

多摩川流域の考古学的遺跡の成立と古環境復元

2007年

比田井 民子
東京都埋蔵文化財センター

目 次

例言-----	1
多摩川流域の後期旧石器時代遺跡の成立と古環境-----	2
比田井民子	
武蔵野台地における旧石器時代の遺跡立地と地形-----	13
伊藤 健	
後期旧石器時代遺跡における文化層の諸問題-----	21
西井幸雄	
野川～多摩川間の地形形成と後期旧石器時代遺跡の動態-----	31
野口 淳・林 和弘	
多摩ニュータウン No.681 遺跡の立川ローム層に見られるスコリアの形態-----	38
上條朝宏	
立川ローム層中に残された考古遺物の時間的位置づけ —文化層分離における諸問題について—-----	57
藤田健一	
後期旧石器時代後半期、武蔵野編年に関する諸問題 —石神井川流域遺跡群を例として—-----	63
飯田茂雄	
執筆者紹介-----	77

例 言

本報告は 2005 年度多摩川およびその流域の環境浄化にかんする調査・試験研究助成により実施された「多摩川流域の考古学的遺跡の成立と古環境復元」（研究代表者比田井民子）にもとづくものである。

東京都埋蔵文化財センター上條朝宏氏、明治大学校地内遺跡調査団藤田健一氏、首都大学大学院山岡拓也氏、明治大学大学院飯田茂雄氏、東京大学大学院林和広氏には試験研究にご協力いただくとともに、その成果の掲載についても御協力をいただいた。

本報告を作成するにあたり、首都大学大学院山岡拓也、明治大学大学院飯田茂雄、東京大学大学院林和広の協力を得た。一部の挿図作成にあたっては東京都埋蔵文化財センター長佐古真也氏のお手を煩わせた。

また、本研究を実施する過程では以下の方々に御指導、御助言をいただいた。記して御礼申し上げたい。

小野昭 白石浩之、阿子島香、久保純子、宇津川徹、早田勉、小菅将夫 関口博幸 麻生敏隆 加藤秀之（敬称略）

多摩川流域の後期旧石器時代遺跡の成立と古環境

比田井民子

武蔵野台地における立川ローム層の形成と後期旧石器時代遺跡の形成（第1図）は密接な関わりのなかにある。後期旧石器時代の出土遺物を中心として最古の遺跡の形成、編年対比の問題など考古学的観点から学史的な研究が積み重ねられてきた。そして、それらと関連する多くの自然科学分析による成果が残されてきたのではあるが、自然科学、考古学の学際的な形で立川ローム層の形成と後期旧石器時代遺跡の形成の問題が武蔵野台地全域を対象として総合的に論じられた場は少ない。このたびの研究は自然科学分野の成果を積極的に取り入れながら後期旧石器時代遺跡の成立や環境の問題を掘り下げることを課題として取り組んだものである。

特に立川ローム層の形成、含まれる火山性降下物・暗色帯と考古遺跡、遺物の関係を中心に研究を進めてきた。その一つは、武蔵野台地の形成と後期旧石器時代遺跡の成立の要因を追求する試みである。もう一つとして、立川ローム層の成因とその中に残される後期旧石器時代の遺物の集積と遺跡の形成の過程の解析、それをもとにした後期旧石器時代の編年の現代的課題を明らかにした。

武蔵野台地における最古期の後期旧石器時代遺跡は立川ローム層の第X層に出土層位が留まっている（第2図、比田井 2004、岩宿フォーラム 2006）。立川ローム層最下部のローム層の検討から、府中市武蔵台遺跡第X層下部と第XI層には赤色スコリアが確認されており、それらは相模野第2スコリアに相当するとされている（武蔵台遺跡調査会 1996、松田・大倉・坂上 1996）。また、武蔵野台地の立川ローム層の第X層中には、通常、視覚的には確認しづらい三枚目の暗色帯があることが指摘されている（第3図3-1、坂上 1985、1987）。炭素、窒素量の分析により明らかにされたこれらの暗色帯は立川ローム層の第X層中部というほぼ定位置で安定する。相模野と武蔵野の中間地点である多摩丘陵の多摩ニュータウンNo.740 遺跡では、武蔵野台地のBB2層相当と思われる暗色帯直下の明褐色土中にある立川ロームと武蔵野ロームの境界線付近に相模野S2Sに相当するとと思われるスコリアの集中部があり、相模野と武蔵野を中継する資料となりうる（第3図3-2、比田井・上條 2002）。ここではC・Nコーダーによる分析でBB2層相当層から武蔵野ローム層との境界線付近までの間で2つ以上の炭素、窒素が高まる部分が認められる。おそらく相模野台地吉岡遺跡等で確認されているBB4、BB5（上杉他 1999）等に対応していく可能性がある。いまのところ武蔵野台地では第X層の下部のスコリア帯付近、あるいはそれを越えて石器出土層準があった事例は極めて少なく、出土する遺物も単独の剥片資料などでその時代的位置づけは難しい。相模野第2スコリアの層準や埋没暗色帯、立川ローム層と武蔵野ローム層の境⁽¹⁾の問題が今後の後期旧石器時代の最古の年代とその成立を左右するものと思われる。

武蔵野台地は約6万年前に現在の台地の中央付近に淀橋台ともう一つの台地が現在の台地よりも遥かに小規模に形成される（第4図、貝塚 1979）。これらの台地は下末吉面にあたり、その後の武蔵野台地の一部をなしているものである。いずれにしてもこの段階では武蔵台遺跡周辺の

国分寺崖線をなす武蔵野面は形成されておらず古多摩川の流路となっている。

武蔵野台地で最古の石器が出土する立川ローム層第X層の問題に立ち返ってみると武蔵野台地内で第X層が確認されているいくつかの遺跡において共通して水の影響を受けた痕跡が認められている。その類例を武蔵野面であげていくと武蔵台西地区第X層下部では含砂率が高くなるのが指摘されており（パリノサーヴェイ2004）、石神井川流域でもX層で含砂率、含水率が高くなる地点が認められる（パレオラボ1992、小山1996）。立川面の遺跡に至っては府中No.29遺跡（比田井・五十嵐1996）、明治大学校地内遺跡においてAT包含層の直下の第二暗色帯下部やその直下層が砂質、粘土化する状態が観察されている（明治大学校地内遺跡調査団2005）。

また、武蔵野台地奥部に位置する高井戸東遺跡は立川ローム層第X層、第IX層で多くの後期旧石器時代遺物を出土したことで知られる遺跡であるが、「いも石」と呼ばれる砂岩を中心とした小粒の礫が第X層から第XI層にかけて大量に出土している（高井戸東遺跡調査会1977）。この「いも石」がどのような起源をもつものであるか土壌学、地理学的検討がなされ、その結果、当時の武蔵野台地では最寒冷期以前の高水位期に溢れた水による再堆積があり、「いも石」もそれにより流入した水成の研磨度の高い自然礫であることが指摘された（加藤1977、1971）。これらの自然礫は武蔵野台地西端部に位地する武蔵台西地区の調査においても第X層下部から出土し始める（写真図版）。

さらに立川ローム層第X層にかかわる年代的問題がある。筆者等の武蔵野台地の横断層序による研究（2）において明らかにしてきたように武蔵野台地の年代測定値はBP20,000年代で留まり、BP30,000年を超えるものは殆どない（比田井他2003）。

測定する資料の条件、測定方法など考慮される問題もあるが、こうした武蔵野台地そのものの地形形成上の制約が、BP30,000年を越えるような遺跡の形成に影響を与えたことも充分考えられてくるのである。

次に立川ローム層上部の問題を取り上げてみたい。

武蔵野台地の立川ローム層には上下2枚の暗色帯が確認されており、AT包含層を間に挟み、それぞれBB1層、BB2層呼ばれている。こうした暗色帯に加えて相模野台地ではBB0層、BB1層、BB2U層、BB2L層、BB3層、BB4層、BB5層とさらに複数の暗色帯が観察される。ATと暗色帯の関係、出土している石器の対比により、武蔵野台地のBB1層は相模野台地のBB2層に相当することが定説となっている。しかし、腐食酸による炭素量の分析から武蔵野台地の立川ローム層の上部にも相模野地域で見られ、武蔵野地域で見られない暗色帯に相当するものがあることが明らかになっている（坂上前掲）。多摩丘陵の立川ローム層上部でも炭素量による暗色帯部の推定がなされており、相模野台地と武蔵野台地を中継している。多摩ニュータウンNo.769遺跡、同じくNo.740遺跡はそうした炭素量による暗色帯の対比、武蔵野台地、相模野台地に共通する出土石器による対比が可能である（第3図3-2・3-3、比田井・上條前掲）。No.769遺跡では上からBB01層、BB0層、BB1層、BB2層と4枚の暗色帯が確認され、AT包含層はBB2層直上に検出されている。出土遺物とAT包含層の直上層に出土層位があった第5文化層、第4文化層は出土した石器から武蔵野IV下・V層、相模野第Ⅲ期に相当する石器文化と推定される。

当時視認された中間層を挟んだ2つの暗色帯が相模野台地のBB2U、BB2Lに相当すると仮定していくとBB0層前後で後期旧石器時代最終末期の細石器の出土が確認されていることにより、相模野台地のBB0層に相当すると考えてよいであろう。多摩ニュータウンNo.740遺跡ではAT包含層より上位に1枚の暗色帯が確認されており、その直上層から第Ⅲ文化層とされる鋸歯縁状の加工に特徴がある石器が出土していることから、武蔵野台地のBB1層の相当するものと思われる。さらに上の明褐色ローム層の中部に、炭素量の測定により炭素量が高まる部分があり、No.769遺跡のBB0層に対応することが明らかにされている（上條2002）。No.740遺跡ではこの直下に第Ⅱ文化層とした後期旧石器時代終末期の尖頭器を伴う石器群があることにより、相模野台地のBB1層相当と推定される。以上、見かけ上は多摩丘陵の層序は処により相模野台地と共通する多くの暗色帯が確認されることもあり、あるいは武蔵野台地の層序に共通する暗色帯による層序となるところもあるが、こうした炭素含量による分析により、相模野台地と武蔵野台地それぞれに対応することができる成果をまとめることが可能である。

武蔵野台地の立川面の立川ローム層上部においても炭素量分析により、見えない暗色帯があることが明らかにされている。ここでは立川ローム層第Ⅳ層中部に炭素量の増加が認められ、BB0層相当の暗色帯があることが指摘されている（第3図3-1、坂上1987）。

さらに立川ローム層上部の特徴あるスコリア層の対比でも詳細な後期旧石器時代後半の編年対比の手がかりとなるものと思われる。多摩丘陵の立川ローム層上部には3つの特徴あるスコリア密集部が認められる。Vs層と呼ばれる最上部のソフトローム層中にある青柳スコリア、その下のVH層と呼ばれるローム層中の上部を中心にある赤色スコリア、同じく下部を中心にある黒色スコリアである。多摩ニュータウンNo.740遺跡ではこれらの内のVH層黒色スコリアの密集層に相模野第Ⅲ期、武蔵野Ⅳ下・V層に相当する内容の石器群の出土層準があり、その上の赤色スコリアの密集層に尖頭器、VS層に細石器が出土した。武蔵野台地に入ると国分寺市花沢東遺跡、府中市武蔵台遺跡においても、Ⅳ層中で赤色スコリアの密集と黒色スコリアの密集が観察されており（恋ヶ窪遺跡調査会1984、松田、大倉、坂上前掲）、これらの関係からも先の武蔵野台地の第Ⅳ層中部の暗色帯は、相模野台地のBB1層に相当するものとな（第5図）。こうした暗色帯の層準でもBB2層と黒色スコリアの密集部との関係であるが、武蔵野台地の立川ローム層のBB2と黒色スコリア層における出土石器群の関係から見ていくと、武蔵野台地のこの段階の遺跡の多くは第Ⅳ層下部から第Ⅴ層の最上部に遺物の出土層準のピークを示す遺跡が主体となる。管見の限りではあるが、相模野台地BB2U層とBB2L層の石器群の出土層準はBB2L層中にその多くが求められるが、遺跡数、出土遺物量は武蔵野台地に比べ少なくなる（比田井2005）。吉岡遺跡でのスコリア密集部がフォールユニットであるという解釈を前提とすると（上杉他1999）、多摩丘陵、武蔵野台地西部は南西端にまで及ぶようなスコリア量からは、富士山系火山降下物によりさらされていた相模野台地の環境の悪化が生じたことも予測され、こうした要因も武蔵野地域の遺跡の増加、ひいては人口の増加にも少なからず影響を与えた可能性も否定できない。相模野地域は富士山からの火山性降下物が立川ローム層形成期に常に降り続けた地域でもあり、そうしたなかにひとが住むうえの条件の厳しさが指摘されている（上杉前掲）。

以上、武蔵野台地を中心とした遺跡の形成、立川ローム層の形成と石器文化の問題にかかわるいくつかの仮説について述べてきた。

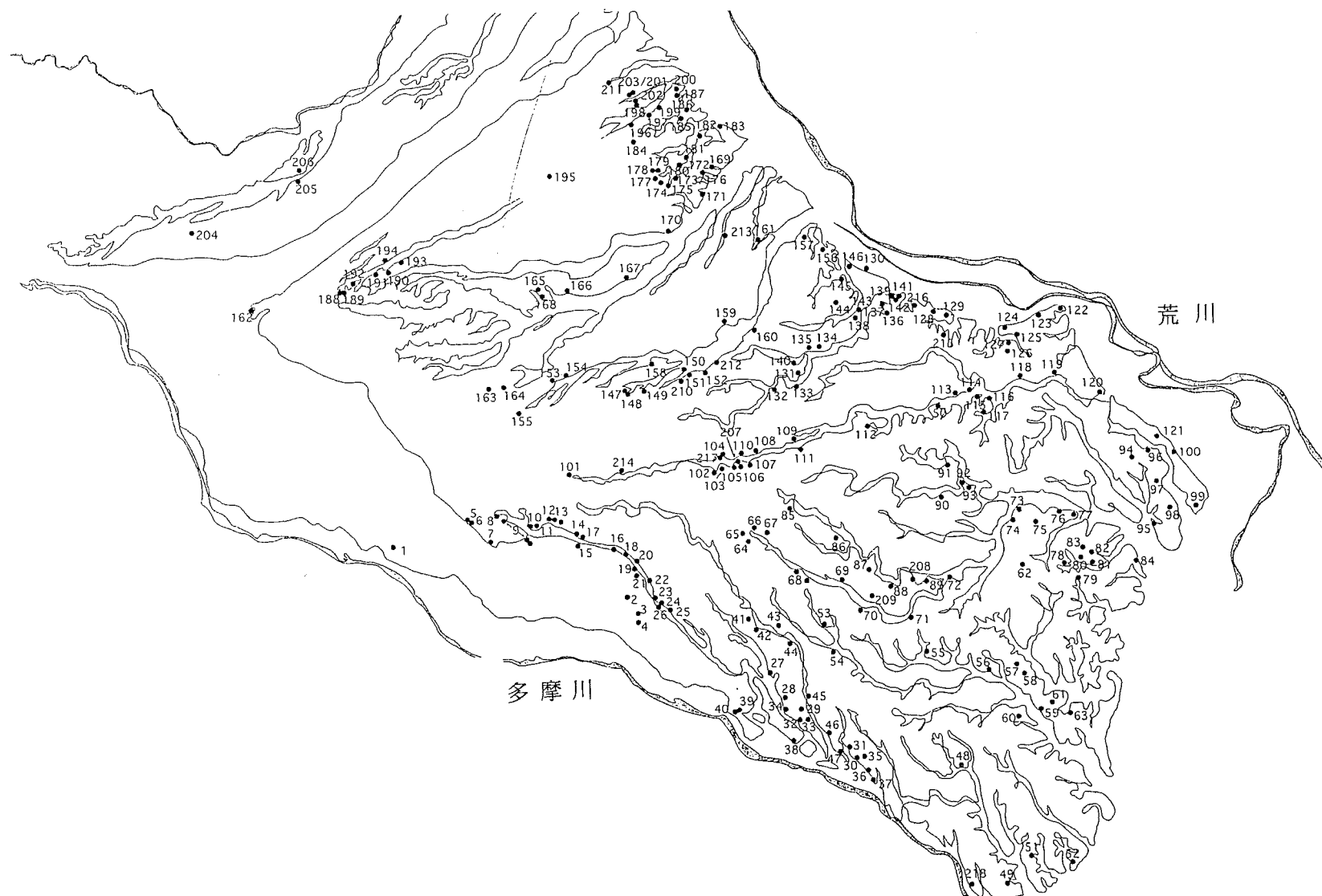
註

- (1) 立川ローム層と武蔵野ローム層の境については蛍光X線による元素分析から明らかにされた事例がある(永塚ほか1991)。

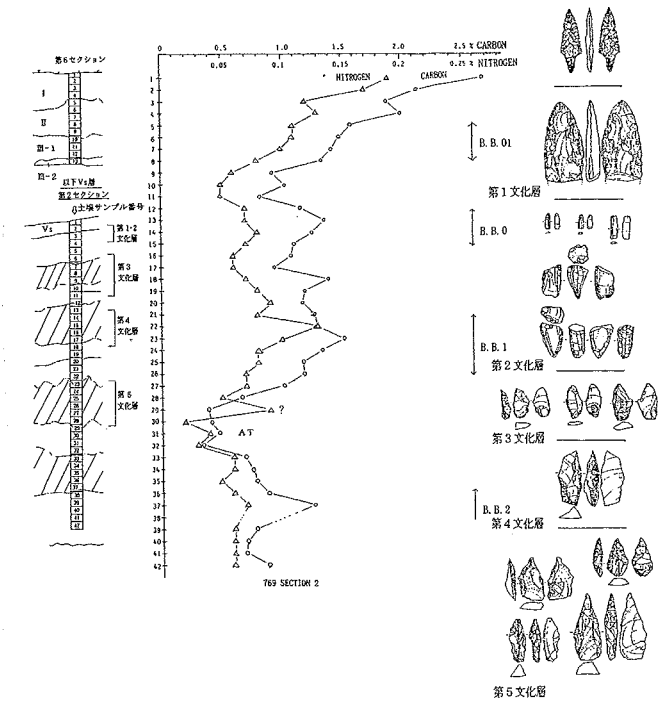
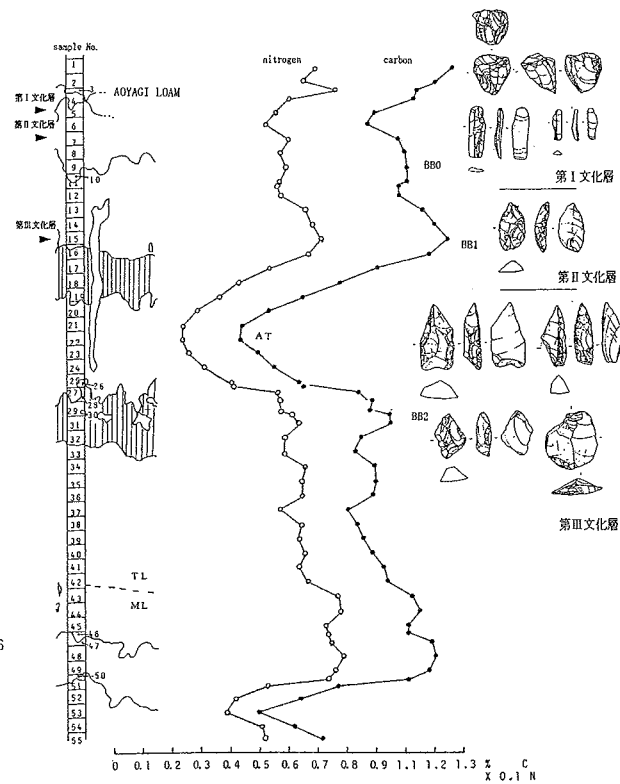
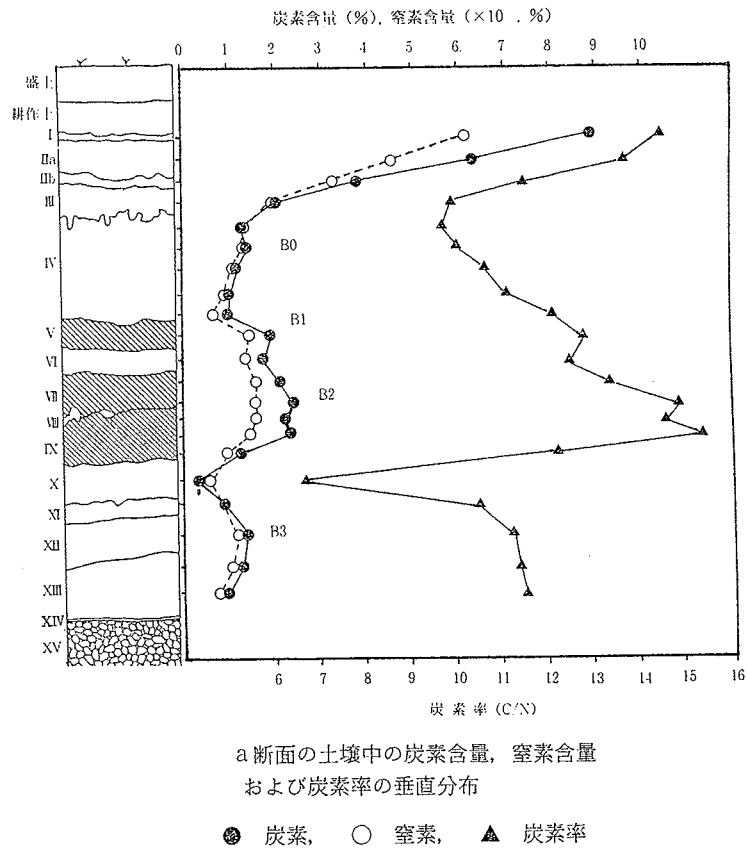
引用・参考文献

- 伊藤健 比田井民子 西井幸雄、野口淳 山岡拓也 藤田健一 林和広 飯田茂雄 2006
武蔵野台地における後期旧石器時代遺跡立地—Geo-Archaeologyの視点— 日本第四紀学会講演要旨集36
岩宿博物館岩宿フォーラム実行委員会 2006 岩宿時代はどこまで遡れるか—立川ローム層最下部の石器群—
上杉陽 1998 付編8. 目黒区大橋遺跡の地形・地質とテフラ 大橋遺跡
岡重文 1995 東京湾から相模湾へ、河口を移した相模川 神奈川の自然をたずねて 日曜の地学
20 築地書館
貝塚爽平 1979 東京の自然史 増補第二版 紀伊国屋書店
加藤好武 1977 2. いも石の分布特徴から見た高井戸東遺跡における立川ローム降灰時代の自然環境に関する一考察 高井戸東(駐車場西)遺跡
加藤好武 1978 第Ⅶ章第四節 鈴木遺跡の自然環境の復原 鈴木遺跡Ⅰ
上條朝宏 2004 2 旧石器時代土坑(A97-SK15)覆土の一次鉱物組成について
武蔵国分寺跡関連遺跡(武蔵台西地区)東京都埋蔵文化財センター調査報告第149集
上條朝宏 2002 追記 多摩ニュータウンNo.740遺跡 東京都埋蔵文化財センター調査報告第102集
久保純子 1988 相模野台地・武蔵野台地を刻む谷の地形—風成テフラを供給された名残川の谷地形— 地理学
評論61
恋ヶ窪遺跡調査会 1984 花沢東遺跡
小山修司 1996 「第3節テフラ」早稲田大学東伏見総合グラウンド遺跡B地区調査報告書
坂上寛一 1984 遺跡立地環境としての土壌 花沢東遺跡
坂上寛一 1987 立川ローム層序と埋没腐食層 都立府中等高等学校体育施設建設予定地の調査
高井戸東遺跡調査会 1977 高井戸東遺跡
竹迫紘 1986 青柳ローム・立川ローム層の特徴 多摩丘陵の歴史と土壌—土壌標本(モノリス)の作製—
永塚澄子 武笠多恵子 上條朝宏 1991 蛍光X線による関東ローム層の土壌分析—多摩ニュータウンNo.796遺跡のD,E,H地点の攪乱層位について— 東京都埋蔵文化財センター
研究論集IX
羽鳥謙三・加藤定男・向山崇久 2000 第1節 多摩川の変遷と武蔵野の地形発達 多摩川流域の段丘形成と考古学的遺跡の立地環境 とうきゅう環境浄化財団
パリノ・サーヴェイ 2004 1 武蔵国分寺跡関連遺跡(武蔵台西地区)にかかるテフラ分析 武蔵国分寺跡関連遺跡(武蔵台西地区)東京都埋蔵文化財センター調査報告第149集
パレオ・ラボ 1992 「第Ⅵ章第1節地形・層序」練馬区愛宕下遺跡調査報告書

- 比田井民子、五十嵐彰 1996 府中市No.29 遺跡 東京都埋蔵文化財センター調査報告第 29 集
- 比田井民子、上條朝宏 2002 多摩ニュータウンNo.740 遺跡 東京都埋蔵文化財センター調査報告第 102 集
- 比田井民子・伊藤健・西井幸雄・野口敦・平井義敏 2004 武蔵野台地後期旧石器時代遺跡の横断層序による研究（2） 第 2 回日本旧石器学会ポスターセッション
- 比田井民子 2004 東日本を中心とする後期旧石器時代初頭の小型剥片石器 古代第 117 号 早稲田大学考古学会
- 松田隆夫、大倉利明、坂上寛一 1996 武蔵台遺跡の立川ローム層・黒土層の層序と地形環境 武蔵台遺跡Ⅱ
- 松田隆夫 2000 第 2 節 多摩川左岸における立川段丘の凹地地形 多摩川流域の段丘形成と考古学的遺跡の立地環境 とうきゅう環境浄化財団



第1図 武蔵野台地の後期旧石器時代遺跡の分布図（伊藤、西井、国武2001原図）



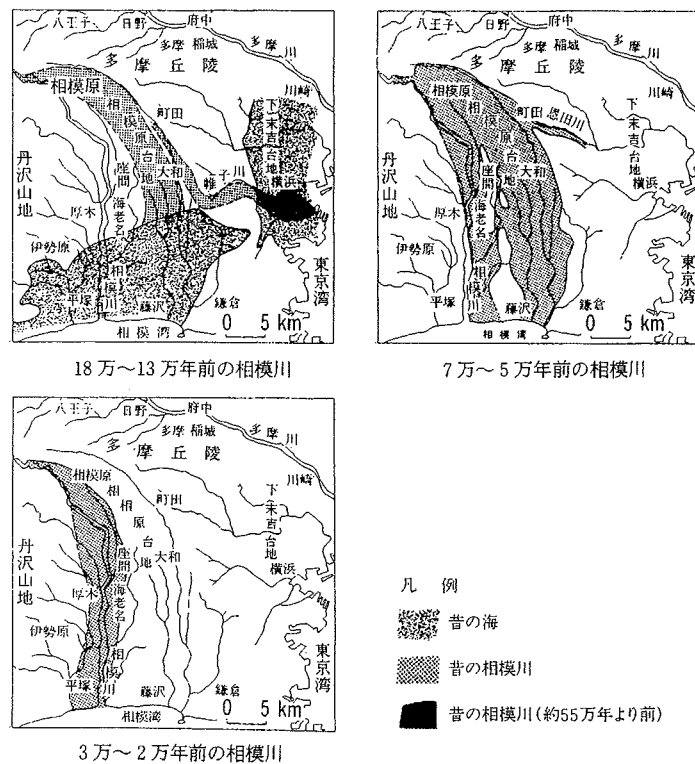
第3-1図 武蔵国分寺跡南方地区遺跡の層序(坂上1987原図)

第3-2図 多摩ニュータウンNo.740遺跡

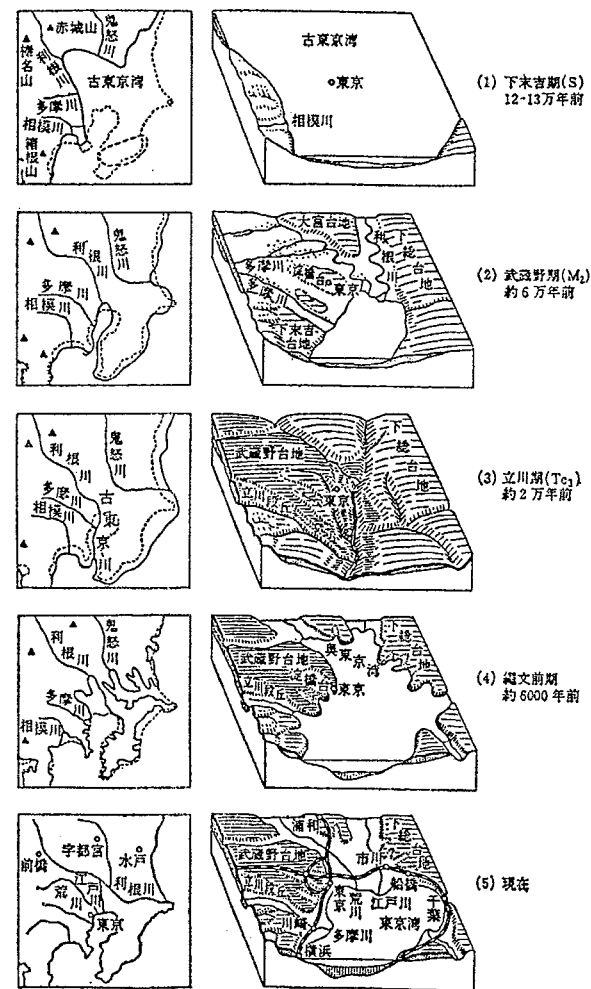
第3-3図 多摩ニュータウンNo.769遺跡(上條2002原図)



写真図版 立川ローム層第Ⅹ層の自然礫（いも石）

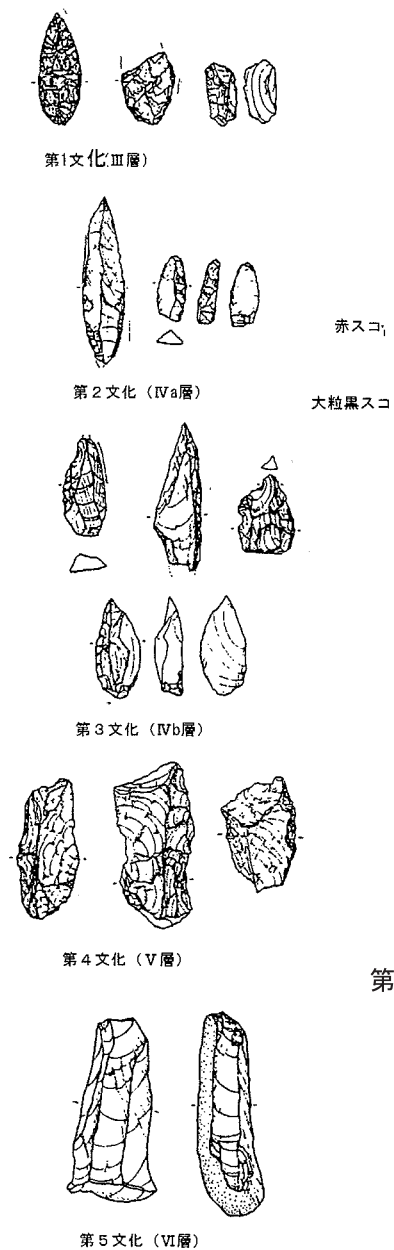


第4-1図 相模野台地の地形変遷 (岡1995原図)

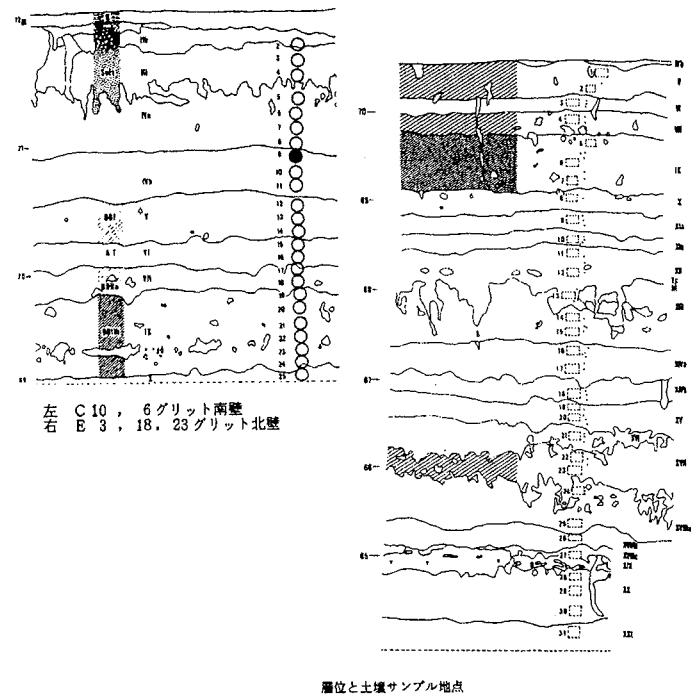


第4-2図 武蔵野台地と周辺の地形変遷 (貝塚1979原図)

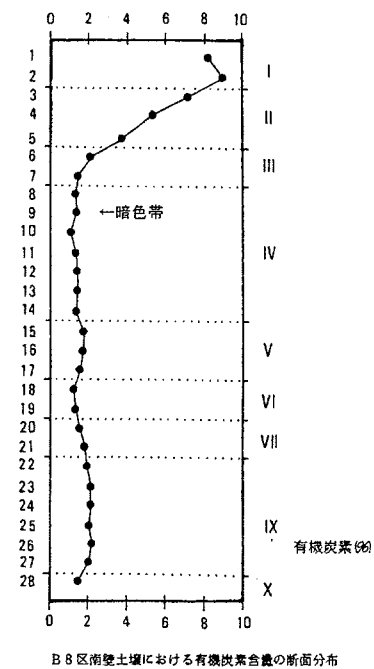
第4図 南関東地方の地形変遷



第5-1図 出土石器(恋ヶ窪遺跡調査会1984原図より抜粋)



第5-2図 層序(恋ヶ窪遺跡調査会1984原図を一部改変)



第5-3図 有機炭素含量の断面分布
(坂上1984原図を一部改変)

第5図 国分寺市花沢東遺跡における暗色帯と出土石器

I 遺跡立地研究の分野

考古学によって明らかにされる人類の行動は、必ず空間的範囲を有している。この「空間」とは、考古学研究において遺跡分布論、地域性論として捉えられてきたものである。小野 昭氏は、旧石器時代における分布論の課題として、①特徴的な石器型式の地域差、②文化系統としての石器の地域差、③石材の分布範囲と原産地と遺跡の関係、④例えば関東地方などの各地域の遺跡分布の意味、⑤遺物分布状況と人間行動の軌跡、の5点をあげている（小野 1978、伊藤 1999）。このうち、遺跡間、遺跡群間のレベルで把握される空間とその特徴は「地域性」とも呼ばれている。木村英明氏によると、地域性とは「一定の圏域（地域）の中で示される歴史的同時性を有した普遍的性格が、他の圏域と比較して特有である性格」とされる（木村 1994 : p. 2）。そうした地域性の把握にあっては「歴史的同時性を有した普遍的性格」、即ち総合的な特徴の抽出と比較がなされなければならない。

さて、こうした「地域性」もしくは「空間」とは人類による経済活動によってなされるものであり、そのため居住地・作業場などの立地は経済活動の最適化を目指して配置されるものである。

遺跡立地研究、即ち遺跡がどのような場所に遺されるか、人類の生活痕跡はどのような立地を示すかについては、こうした経済活動を成立させる「地域性」もしくは「空間」の把握にあってきわめて重要な研究である。それゆえ、遺跡立地研究は考古学において様々な時代、視点において研究が重ねられてきた。

その第一は、伝統的考古学ともいべき社会学的アプローチによってなされた集団構成を絡めた集落立地論、集団関係論によるものである。近年の現代考古学的視点による動作連鎖論を導入した遺跡構造論を遺跡分布との関係によって論じるものも、その一つのバリエーションとをとすることができる。

第二の視点としては、貝類などの生息分布の中で貝塚の立地を論ずる生態学的アプローチがあげられる。これは第四紀学の立場からの遺跡立地研究というに相応しい。そして、最後に地形形成要因との関係において遺跡立地を考究するものである。

最後の、地形要因との関係による遺跡立地研究は、概ね広域・中域・微視的な三つのレベルに区分することができる。広域的な対比は、列島規模、あるいは山地・平野・海岸線等、標高等による区分との対比のレベルを指す。山地・平野の地形区分、標高等によって遺跡立地を分類する広域的な研究があげられよう。例えば、鈴木忠司氏が日本列島における細石刃文化期の遺跡立地を、その標高等との比較から分析したものがこれにあたる（鈴木 1983）。

中域的な対比とは、台地内、河川流域等による区分、あるいは段丘形成との対比のレベ

ルを指す。台地、河川流域を単位とした遺跡分布を人類の行動圏とともに論じるものがある。伊藤、比田井、西井らが羽鳥謙三氏、松田隆夫氏らとともに多摩川流域における後期旧石器時代遺跡分布と地形形成の関係について研究したものは後者に相当する（比田井・羽鳥他 2001）。

そして、最後の微視的な対比は、遺跡内における地形形成を示すものである。多くの遺跡調査報告においては、その視点から地質学・土壌学・地形学の分野から遺跡形成及び地形形成過程の復元がなされてきた。特に、後期旧石器時代の遺跡調査においては、当時の地形が現在の地形とは異なる可能性がそれ以降の時代よりも格段に高いこともあって、その役割は大きいものである。

Ⅱ 武蔵野台地における遺跡立地の再検討

本章は、このように区分されるべき遺跡立地研究のうち、地形との関係において中域的及び微視的な対比によって、遺跡立地研究を為すものである。

さて、本書の扱っている武蔵野台地は、日本列島最大級の台地として遺跡件数が多く、都市部の特性として国内随一の発掘件数の蓄積を誇っている。元々他の時代に比べ遺跡の少ない後期旧石器時代の遺跡立地の検討には、恰好の対象といえることができる。

そうしたことから、本章では武蔵野台地における後期旧石器時代の遺跡を対象とし、遺跡立地と地形の関係性の条件を見出すことを目標とするものである。言うなれば、人類に自然が与えた環境に対し人類がどのように「遺跡立地」として応えたか、地形との関係から検討するものである。換言すれば「どこを発掘すれば遺跡が発見されるか」ということでもある。

武蔵野台地では、どのような地形に遺跡は立地するのであろうか。武蔵野台地での最初の層位的発掘調査が調布市野川遺跡であることが関係しているが、従来の見解として、長い間にわたって野川上流域が最も典型的な立地と考えられていた（小林・小田ほか 1971）。しかしながら、1980 年代以降、石神井川・黒目川流域などの野川流域以外の地域で多くの遺跡が発掘され、必ずしも野川上流域が代表・典型とは言えなくなってきた。一方で、遺跡は小川に沿い、「見はらしのよい台地の上」即ち高台に分布するものと見られていた（新井 2006）。第 5 図は野川上流域の遺跡分布図を示したものであるが、野川上流域では連続して遺跡が分布し、特に国分寺崖線上の武蔵野面に厚く分布する状況が看取できる。しかし、2000 年代に調布市下原・富士見町遺跡などのような野川から離れた立川面での発掘調査で多量の遺物が出土し立川面に対する注目度が格段に上がったことから、必ずしも「見晴らしの良い高台」ばかりで検出されるわけではないことがわかってきた（野口・平井ほか 2005）。

こうしたことから、後期旧石器時代における武蔵野台地の遺跡立地は、再検討する必要性に迫られているといえることができる。

Ⅲ 遺跡立地の特徴

1. 地形区分

武蔵野台地の遺跡立地の検討にあたって、武蔵野台地を南西部、北西部、北東部及び南東部の四つに区分しておく（第1図）。まず、南西部は多摩川側に面する地域である。北西部は、不老川から黒目川までの荒川低地側に向かう小河川の流域である。北東部は、白子川、石神井川、神田川水系、目黒川などの主に東に向かう小河川の流域である。南東部は、下末吉面の範囲に相当し、樹枝状の谷を形成する地域である。南西部の内で立川面については、野口 淳・林 和広氏が検討している（本書野口・林論文参照）。また、加藤秀之氏が北西部について論及している（加藤 2007）。それらの地域はそれに譲るとして、本章ではそれ以外の地域について検討したい。

2. 南西部

南西部・武蔵野面の一例として、武蔵国分寺跡関連・武蔵台遺跡を紹介する（伊藤 2006・2007：第2図）。武蔵国分寺跡関連・武蔵台遺跡は府中市武蔵台に所在し、武蔵野面の国分寺崖線にほぼ接している。遺物の分布する箇所は平坦であるが、約 15° の国分寺崖船斜面の開始点まで約 20m しか離れていない。一方で、崖線から北へ約 100m 奥まった平坦地にはもはや遺跡は存在していない。従って、国分寺崖線に沿った武蔵野面においては、遺跡は崖線に沿って立地し、崖線から離れた平坦地では遺跡は立地しにくいことが推察される。このことは、より東方で国分寺崖線を横切る道路の発掘調査区であった小金井市はけうえ遺跡などでも認められ、蓋然性が高いということができよう（阿部ほか 1980）。

3. 北東部

北東部を流れる石神井川、神田川等の谷地形については久保純子氏の論考に詳しく、上流部、中流部、下流部に区分される（久保 1988 a・1988 b）。上流部は、源頭から山手通り付近までに相当し、勾配は緩く武蔵野礫層に河床が沿っている。左右の段丘と谷の比高は約 6m と一定で、低位の段丘がなく谷はコの字形を呈する。この内、注目する地形は、石神井川の富士見池、神田川の井の頭池のような標高 50m 付近の勾配変換点で湧水を湧出する大きな池である。遺跡は池に直面した武蔵野面上に立地し、池から離れると少ない（井の頭池：第3図、富士見池：第4図）。こうした谷に直面した段丘上の立地は、湧水池周辺にとどまらない上流部の特徴である。ただし、標高 50m 地点よりも上流では一部で伏流水化し、また低位段丘が形成されるなど谷地形が明確ではない。それに従い遺跡も少ないが、北西部の野水地形と同様に未発見の小遺跡が点在している可能性がある。

中流部は河口から 5km 上流付近までである。中流部は上流部とは異なり急勾配であるが、それは最終氷期の海水準低下期に谷が武蔵野礫層を削りこんで下刻した結果である。神田川に最も顕著に表れるのであるが、下刻と河川の離水のためその右岸に低位段丘である立川面が形成されている。神田川右岸の遺跡はその立川面に立地し、武蔵野面ではほとんど認められていない（第6図）。新宿区百人町三丁目西遺跡、下戸塚遺跡は、武蔵野面と低位

面との段丘崖に挟まれた狭い立川面に立地する（百人町三丁目西遺跡：第7図、下戸塚遺跡：第8図、久保・亀田ほか1996、パリノ・S・荻野ほか1997・2001）。最後に、河口約5kmに相当する下流部では勾配は再び緩やかになる。海水準低下期に古東京川へ一気に下刻した谷底の上に縄文時代以降沖積層が埋積したためである。下流部に遺跡は少ないが、それは沖積層下に埋没している可能性がある。

4. 南東部

南東部については、武蔵野面の目黒川流域を間に挟んで、北側の淀橋台、南側の荏原台の二つの下末吉面からなる。下末吉面の谷地形は侵食により形成されたもので、樹枝状を呈し谷と尾根が絡みあう複雑な地形である。遺跡立地は、遺跡調査例の多い新宿区内を検討する限りでは、谷の崖壁に沿うという様相はなく、谷から奥まった段丘上に小規模遺跡ばかりが立地するよう看取される（第6図）。しかし、下末吉面は都心部に相当し、江戸時代以降の地形改変の大きいためか、見かけの分布では理解できない点も多かろうと想像する。

IV 遺跡立地の規則性

こうした検討結果から、遺跡立地の規則性を見出すことができるであろうか。前節での検討に野口氏らの知見を加えて明らかにしてみたい。

全体に個別の地形特性に支配され全体として捉えにくいということはあるものの、第一に、野川等の小河川そのものに向かう斜面に接してではなく、小河川に流れ込む小支谷などに沿って立地する傾向が看取される。このことは、個別の小支谷の微視的な埋積過程に影響されることを示している。小支谷が水生堆積環境にある間には近接して遺跡は立地しないが、ロームによる谷の埋積が始まり乾燥化が進むと斜面の上に遺跡が立地されるなどの状況が窺われる。

また、概ね谷からみて一面上の段丘面に谷に接して位置する傾向が看取される。高台に立地するのは、段丘が単数、即ち背後に高位面を持たない場合である。このことは遺跡立地にとって谷地形との関係というより、小河川・小支谷などの水環境との関係が重要であることを推察させる。水環境については、現況の小河川に注目するだけでは不十分で、埋没小河川、季節的な水流を持つ河川、野水に、さらに湧泉（湧水点）、地下水に注意する必要がある。

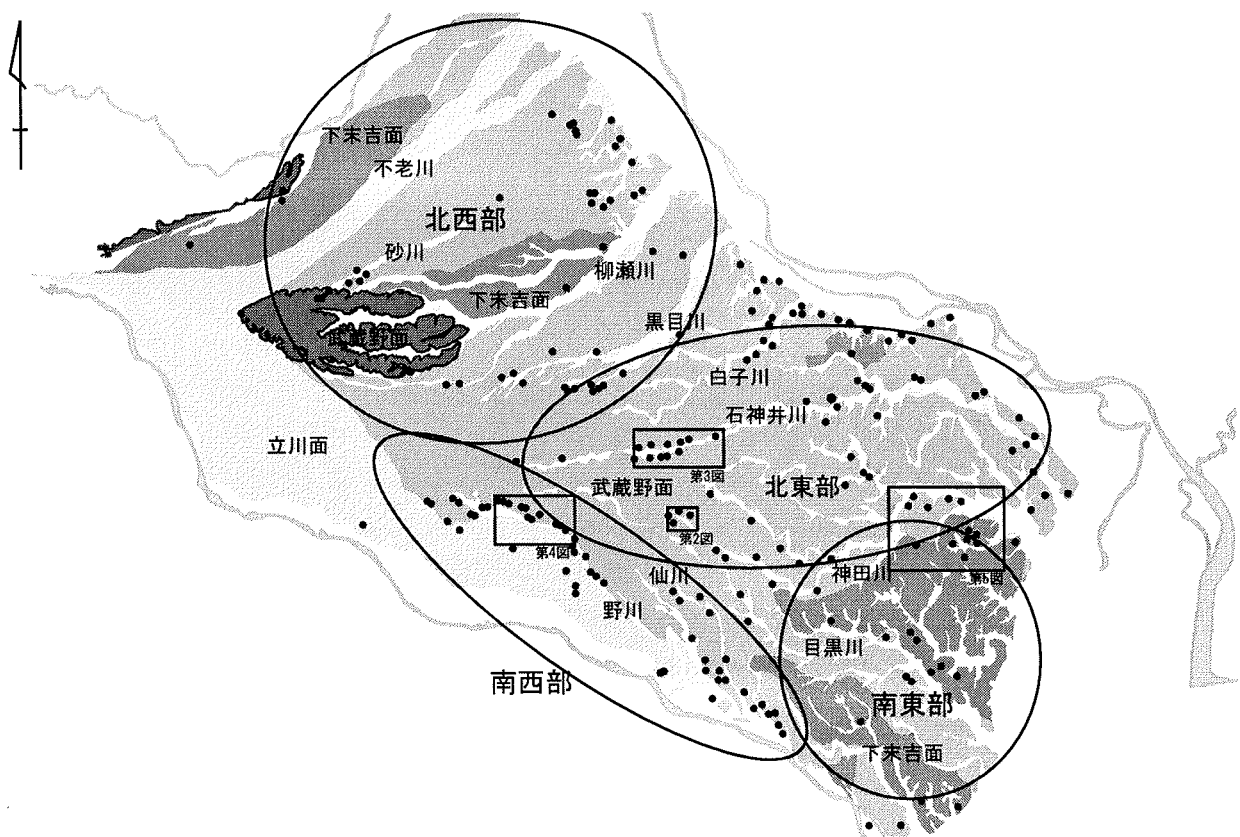
規則性と言い切るまでは明らかにしえないが、このことは次の事項の計測・分析を通じて一般化を図り、その一般化を通じて武蔵野台地以外の各台地等との比較が可能になると考えられる。最後に、その属性を羅列することで本章のまとめとしたい。

遺跡の水環境：1. 河川・埋没河川／水量／水量の季節的変動、2. 湧泉／湧泉の水量／水量の季節的変動

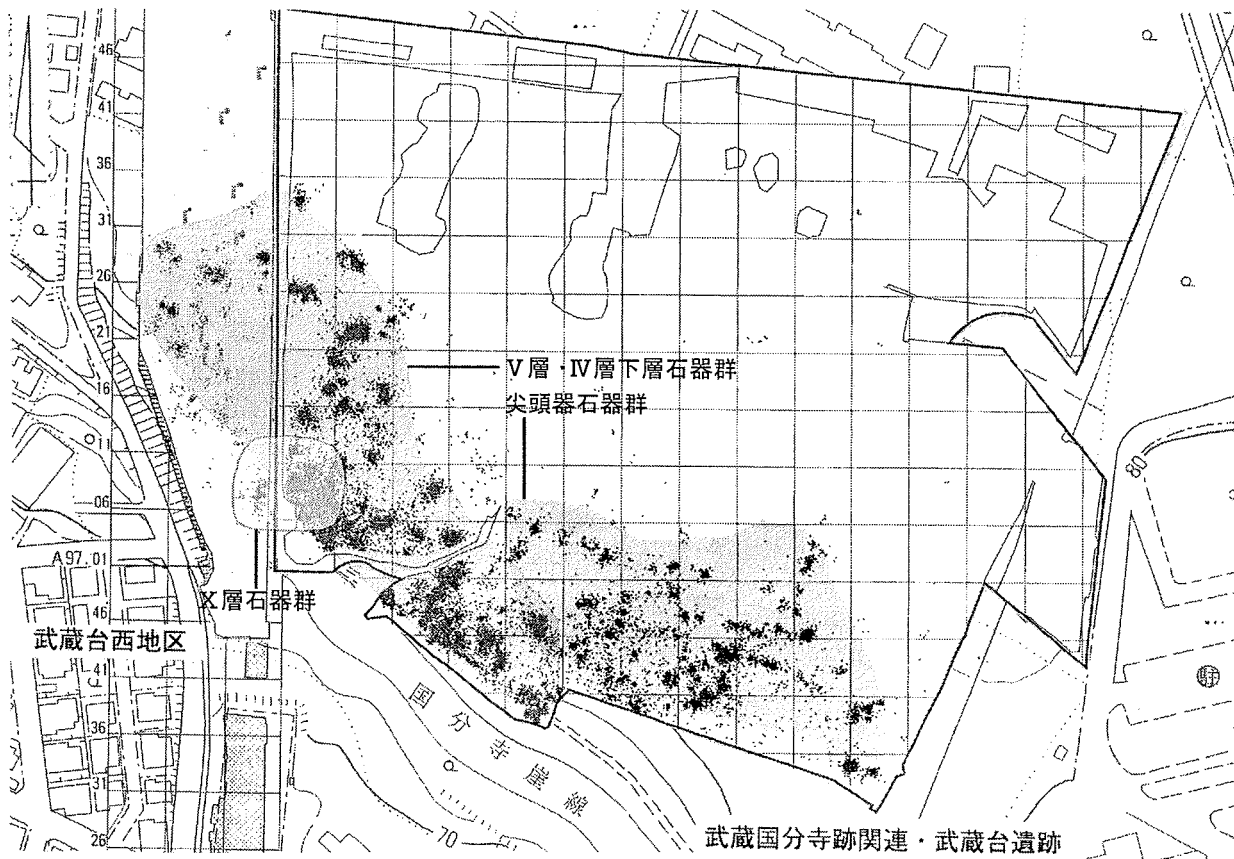
遺跡の地形：1. 段丘の面数、2. 谷底との比高・距離／斜面の角度

引用参考文献

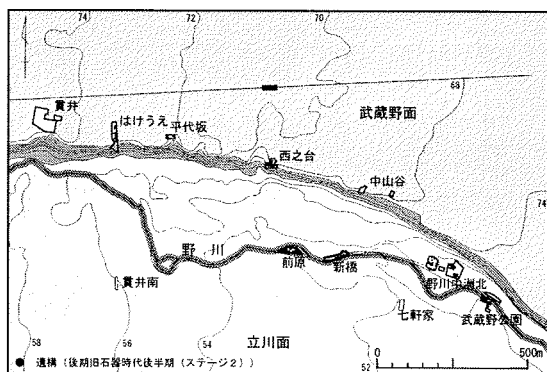
- 阿部祥人他ほか 1980『はけうえ』はけうえ遺跡調査会
- 新井 悟 2006「立川段丘はどう評価されてきたのか」『明治大学校地内遺跡調査団年報』3 明治大学校地内遺跡調査団
- 伊藤 健 1999「地域区分論―地域差研究・地域性研究・2万年前の地理学―」『石器文化研究』7 石器文化研究会
- 伊藤 健 2006「多摩蘭坂・武蔵国分寺跡関連・武蔵台遺跡の石器群」『岩宿フォーラム2006 岩宿時代はどこまで遡れるか 予稿集』岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会
- 伊藤 健 2007「後期旧石器時代初頭期における武蔵台遺跡の遺跡形成と地形環境」『國學院大學考古学資料館紀要』23 國學院大學考古学資料館
- 伊藤 健・西井幸雄・国武貞克 2001「遺跡資料の集計」『多摩川流域の段丘形成と考古学的遺跡の立地環境』とうきゅう環境浄化財団
- 伊藤 健・比田井民子・西井幸雄・野口 淳他 2006「武蔵野台地における後期旧石器時代遺跡立地―Geoarchaeologyの視点―」『2006年度日本第四紀学会大会講演要旨集』日本第四紀学会
- 小野 昭 1978「分布論」『日本考古学を学ぶ』1 有斐閣
- 加藤秀之 2007「武蔵野台地北部における後期旧石器時代遺跡の立地環境」『「土と遺跡 時間と空間」予稿集』多摩川流域の考古学的遺跡の成立と古環境復元研究会
- 木村英明 1994「北海道地域」『月刊考古学ジャーナル』370 ニュー・サイエンス社
- 久保純子 1988a「相模野台地・武蔵野台地を刻む谷の地形―風成テフラを供給された名残川の谷地形―」『地理学評論』61 日本地理学会
- 久保純子 1988b「早稲田大学の地形―武蔵野台地と神田川の非対称谷に関連して―」『早稲田大学教育学部学術研究（地理学・歴史学・社会科学編）』37 早稲田大学教育学部
- 久保純子・亀田直美ほか 1996『下戸塚遺跡の調査 第1部旧石器時代から縄文時代』早稲田大学校地理蔵文化財調査室
- 小林達雄・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男 1971「野川先土器時代遺跡の研究」『第四紀研究』10-4 日本第四紀学会
- 鈴木忠司 1983「日本細石刃文化の地理的背景」『角田文衛博士古稀記念古代学論叢』pp. 1-24 古代学協會
- 野口 淳・平井義敏ほか 2005「明治大学付属明治高等学校・中学校新校舎建設予定地試掘・確認調査の概要」『明治大学校地内遺跡調査団年報』2 明治大学校地内遺跡調査団
- パリノ・サーヴェイ株式会社・荻野早苗ほか 1997『百人町三丁目西遺跡Ⅲ』新宿区百人町遺跡調査会
- パリノ・サーヴェイ株式会社・亀田直美ほか 2001『百人町三丁目西遺跡Ⅴ』財団法人新宿区生涯学習財団
- 比田井民子・羽鳥謙三ほか 2001『多摩川流域の段丘形成と考古学的遺跡の立地環境』とうきゅう環境浄化財団



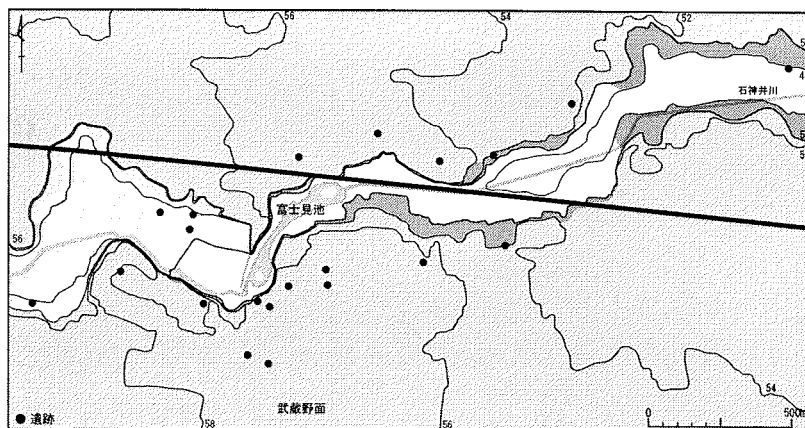
第 1 図 武蔵野台地の地形区分と後期旧石器時代遺跡



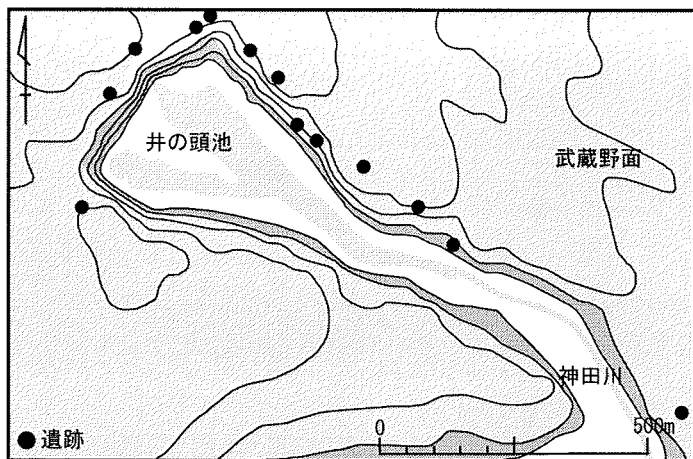
第2図 武蔵国分寺跡関連・武蔵台遺跡の遺物分布



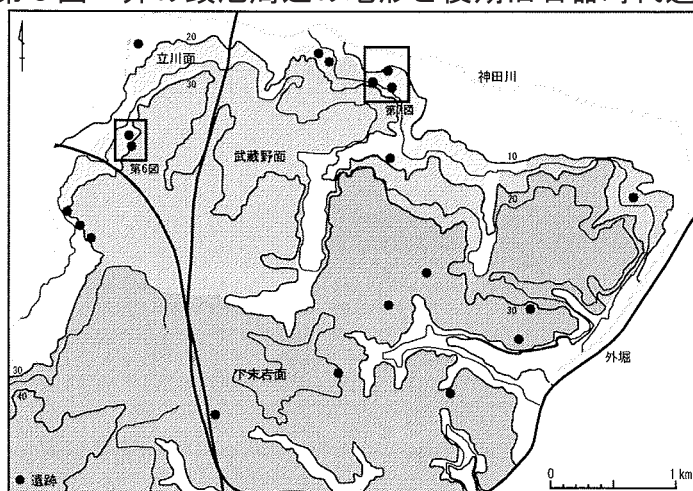
第3図 野川上流域の地形と後期旧石器時代遺跡



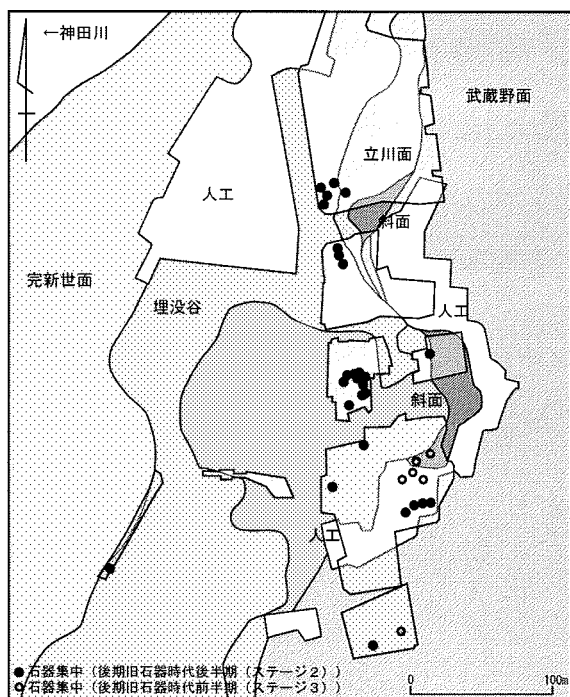
第4図 富士見池周辺の地形と後期旧石器時代遺跡



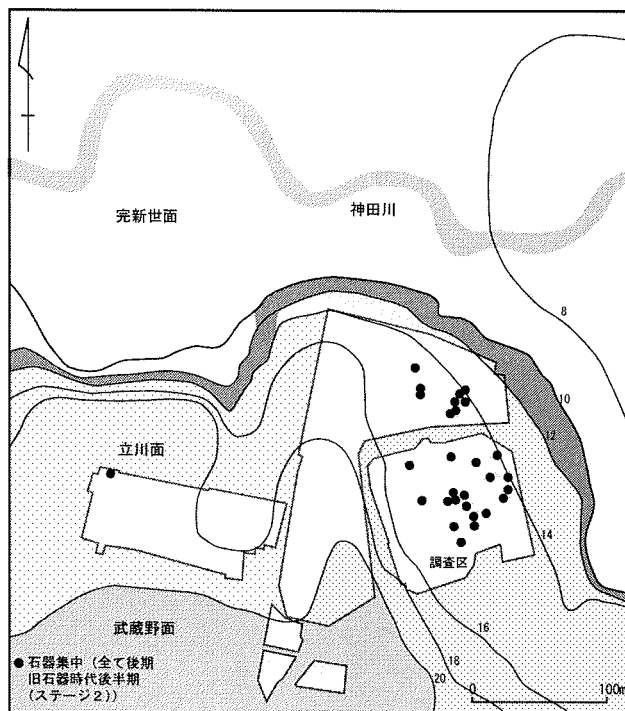
第5図 井の頭池周辺の地形と後期旧石器時代遺跡



第6図 新宿区の地形と後期旧石器時代遺跡



第7図 百人町三丁目西遺跡の地形と遺構分布



第8図 下戸塚遺跡の地形と遺構分布

1) 考古資料の分析において時間軸と空間軸の検討は、最も基本的で重要な視点であり、本項で取り上げる文化層（層位）は遺物の時期序列を設定する上で、最も有力な方法といえる。角田文衛は層を自然層、人為層、文化層（遺物包含層）、不稔（ねん）層（無遺物層）、住居層といった用語を用いて整理（角田 1968）しており、現在の一般的理解と考えられる。

2) 層位論は地質学の「地層累重の法則」（攪乱されていなければ「上に重なる層は、下の層より新しい」）に則して層の前後関係を検討し、それを繰り返すことによってそこに含まれる考古資料の相対的編年を構築しようとするものである。縄文土器編年では多くの場合、貝塚等の人為層に包含されている遺物の層位的関係が検討され、その延長として、遺構埋土の前後関係とそれに包含される遺物の時期的前後関係が分析された。

旧石器研究においては人為層の確認は難しく、遺構（石器集中・礫群を除く）等の前後関係による編年作業は実質的に不可能であった。しかし、関東地域においてはローム層の堆積は厚く、石器群がどの層に包含されるかによる編年序列の研究が進められ、麻生 優が強調した「地層同定の法則」「一つの地層には、その地層に特有な化石が含まれていて、その化石はその上の地層にも、その下の地層にも含まれていない」（麻生 1985）により武蔵野台地を均一な空間にしての最大公約数的編年が可能になったと考えられる。それによって得られた成果は大きい、それによってより小さな地域の問題、各遺跡の個別の問題に対する議論は不活発であったと思われる。近年、武蔵野台地の見直し作業が進み武蔵野台地一般ではなく、その多様性が注目されるようになった。

3) 考古学研究において層位が重要視されるのは、縄文土器の編年研究が確立する過程である。それまでは遺物群を時間的観点からの検討よりも、遺物の変異イコール人種の違いなどといった論争が盛んで、遺物の出土状況を細かく検討することはあまりなかったようである。地質学の研究方法が導入され、遺物の出土状況、層位的上下関係から相対的新古関係を捉える作業が累積的に行われ、そこから導かれた遺物の変遷過程が型式論的に検討され、それを層位的（遺構の切り合い：新古関係）に検証する一連の研究がなされ、今日の縄文土器編年が作られていった。

4) 岩宿遺跡の発見は偶然の結果ではなく、当時の最先端の研究状況と問題意識の中で成されたものである。最古段階と考えられていた撚糸文系土器群と層位的上下関係が確認され、より下層のローム中に石器が包含されていることを明らかにしている。また、ローム層中に複数の文化層があることも確認しており、研究のスタート時点で層位論的視点に立っていたといえる。調査を主導した芹沢長介は「層位は型式に優先する」（芹沢 1968）という考えのもと、全国の複数文化層が確認された遺跡を集成し、旧石器編年の基礎としている（第1図）。しかし、そこで集成された遺跡をみると、その層位的状況は各地域で異

なり、同等に扱えるのかは問題が残る。『日本の考古学』で示された瀬戸内海編年（鎌木・高橋 1965）を佐藤達夫が「型式学的にも層位的にも、最も確実な地域的編年」（佐藤 1970）と高く評価したが、柳田俊雄は各遺跡の層位認定を再検討し、その根拠の脆弱な点を指摘し、当該地域の石器群の検討は「資料的な限界性を深く認識」したうえで行う必要があると警鐘している（柳田 1977）。しかし、多くの問題はあるにしても、限定された地域・遺跡内における層位的な新古関係は相対的編年の基本資料であることは間違いがなく、一つの有意な単位になると考えられる。

5) 1970年代に入ると「野川・月見野以降」というキャッチフレーズに表徴されるように、“より広くより深く”をスローガンに、関東地域で複数時期の文化層を有する大規模遺跡の調査が多く実施された。

野川遺跡の報告でされた層位区分は、それまでの調査で得られた土質の硬軟、色調、粘性等の所見を踏まえ考古学の立場で行われたものと思われる。同じ報文の中で、羽鳥謙三は地質学の中で用いられてきた4部層の区分に沿って分析を行っている。野川遺跡で行われた層位区分が地質学・土壌学の立場からは問題を含んでいるにしても、調査の過程で考古学者の経験知が加わったことは、その後標準層位として分かりやすい共通認識になりえたと考えられる。報文の中でもう一つ注目されるのは、野川遺跡標準層位の中にそれまでに武蔵野台地で実施された各遺跡が整理し当てはめられたことである。此处に、分かりやすい層位区分とその標識層位による、一つの翻訳機構が完成し「地層同定の法則」とまでは言わなくても、複数文化層を有する遺跡の累積的検討から、標準層位を用いた共通言語での分析に展開することが可能になったと考える（第2・3図）。

野川遺跡の報文で課題とされた、相模野台地との層位的対比は1979年神奈川シンポジウムで下総台地を含め、石器群との整合性が図られ、南関東全域にわたり標準層位による石器群の比較検討が可能になった。武蔵野台地北部や大宮台地では、野川流域の成果を横目で見ながら編年の枠組みが構築された。

6) 一方、月見野遺跡群の調査経験から、遺物出土の状況は「当初は遺物が少なく漸増し、極大に達するとまもなく急激に遺物の出土量が減少するのが一般的な傾向である。礫群等の遺構が遺物の極大量に達した直後に確認されるのもまた一般的な傾向である」（矢島・鈴木 1976）ことを指摘している（第5図）。また、野川流域の中山谷遺跡では、「下層の遺物は浮き沈みが著しく1 m以上の巾をもっている」「重量のある遺物はやや下になる傾向がある」（キダー・小田編 1975）とし、「母岩別、石質別、深さ、接合等を加味して」文化層を決めたことが記されている（第6図）。矢島・鈴木は礫群の面を生活面、キダー・小田は重量のある遺物のピークを生活面として捉えている。標準層位の中で示された遺物は、層位的に連綿・整然と検出され「層位は型式に優先」しているかに見えるが、各発掘調査及び整理作業の過程で多面的検討が施され、文化層は決定されていることが伺える。

7) 1980年代に入ると広域テフラの研究が飛躍的に進み、給源・年代・降灰範囲が明らかになっていった。旧石器研究の中で注目されたのは始良火山を給源とするAT（始良・

丹沢火山灰)である。70年代に南関東地域での層位対比は進んだが、より広域の対比においては石器群の型式学的対比は難しく、堆積層の薄い地域では遺跡の地表との深さ等で新古の目安としていた。ATは列島の多くの全域で検出され、AT前後という大きな区分が可能となり、石器編年の見直しが進められた。

広域テフラは大規模火山によるもので、単に火山灰が広範囲から検出されるだけでなく、災害、環境破壊、気候変動と当時の人々にとって重大な事件であり、その生活環境に多大な影響があったと考えられる。考古学からそれを積極的に評価し、石器群・遺跡等の変化が議論されたが、直接に被害を受けた南九州地域以外では、変化の単位の把握が難しく何処までがその影響関係にあるのか議論がわかれた。遺物変遷(編年)と自然科学で導かれる変化は、その単位が整合されておらず直接的比較が難しいのが現状である。しかし、層位に対する新たな視点として、その層位が形成された環境と包含された考古資料(遺物・遺構・遺跡)の関係が注視されるようになった。

8) 野川遺跡の批評で町田 洋は、「テフラ単層が明確である地域」(町田 1971)との比較検討が重要としている。1990年代以降、上杉 陽を中心に相模野台地のテフラ単層を識別しテフラ番号を振っている。そして、武蔵野台地から大宮台地と東側に向かってテフラの観察を行い、考古学的層位区分でなくYNo.(テフラ番号)の比較を試みている。

松井 健は土壌学の立場で、黒色帯・ソフトロームにふれ、考古学と土壌学の連携の重要性を述べている。考古学では黒色帯を目安に層位区分しているが、その黒色帯の形成過程等に関しては深く関心を向けていなかったように思える。当時の環境の問題や遺跡形成の部分で火山灰の検討と共に、土壌学的分析がより重要である場合が多いが共同研究は思うより少なく、最近の明治大学校地内調査における成果に期待するものが大きい。

9) 石器文化研究会による2回のシンポジウムは、対象時期を区切り活動基盤である関東地域の微細な検討を基礎に他分野・他地域の人々を交えて討議し、列島規模での広域編年を提示するなど、最新の研究状況を見据えながら積極的に行った。その際、特に1996年のシンポジウムではタイトルに武蔵野標準層位である「V~IV下層段階」を入れたため、「V~IV下層」の存在を含めて誤解を生じたのではないかと危惧する。武蔵野台地の連番での層位名が前後関係を見るのに簡便であり、シンポジウムに関わった筆者としては石器群を分別するのに用いた名称と認識していた。矢島・鈴木が「文化層は本来的に自然層とはまったく意味の異なるもので、文化層名の呼称を自然層名をもって行うことは、それらが自然層上で複数の部層にまたがる場合があるなどという消極的な理由にとどまらず、文化層についての本質的な理解の欠落を示す」(矢島・鈴木 1976)と指摘している。文化層は調査・整理の過程で複数の分析が行われ、その結果として示されたもので、自然層位で呼称するとさもその層位又はその層位のみから出土した石器群を自動的に抽出した客観的存在と思われかねない。また、近接する遺跡においても状況が異なっている場合が多く、調査担当者は複数の分析(経験的)によって判断し層位・石器群を分けている。それらの行為が明文化されることは少なく、五十嵐彰が指摘(五十嵐 2000)するように問題であ

る。

10) 日本の旧石器研究は岩宿遺跡の調査をスタートに、半世紀以上が過ぎた。研究の当初から層位に関しては重要なテーマであり現在も変わっていない。研究初期段階の複数文化層を有する遺跡の集成から、各地域の標準層位の確立とその翻訳機構による石器群の編年序列の構築、火山灰等と炭化物から標準層位の年代等の研究が進められた。しかし、一方で標準層位による最大公約数的な検討が先行し、小地域・各遺跡の個別性の議論が少なかつたように思える。

今あらためて、武蔵野台地を見直すことによって、より小地域の特徴、個別遺跡の置かれている環境・形成過程、石器集中単位での変異が議論されている。遺跡立地の問題も含め今後の展開に期待したい。

文化層に関する事例

i) 久原小学校内遺跡（東京都大田区）（第9図）

久原小学校内遺跡は、発掘調査の時点で第Ⅳ層～Ⅸ層にかけて遺物が検出され、複数文化層を有する遺跡と捉えられた。しかし、石器組成は剥片と石核、礫器類が主体で明確な製品(Tool)が無く編年的位置付けに苦慮した。整理作業の過程で第Ⅳ層の剥片を除くと、同一母岩と考えられる石器が第Ⅴ～Ⅸ層を横断して含まれており、各層位の遺物分布を重ねると同じ地点に重複することが判明し、自然層としては第Ⅴ層～Ⅸ層に分離できても、文化層としては1層であると捉えた。

ii) 武蔵台遺跡（東京都府中市）（第10図）

武蔵台遺跡は、立川ローム層最下底部の第Ⅹ層を細分する根拠と考えられて来た遺跡である。第Ⅹb層はチャート为主体とする小形石器群で、縦長剥片や黒耀石を含まず局部磨製石斧を多数組成する。一方、第Ⅹa層は黒耀石を主体に局部磨製石斧を組成している。

立川ローム最下底の石器群に関しては、中山谷遺跡、西之台遺跡B地点、鈴木遺跡御幸第Ⅰ地点から出土したチャートの小形石器と礫器を主体とする石器群の評価が議論されてきた、高井戸東遺跡第Ⅹ層上部の基部加工ナイフ形石器を含む石器群と比較し、より古い様相と考えられ武蔵野編年第Ⅰa 亜文化期とし、より古い石器群との含みを持たした設定であったと考えられる。武蔵台遺跡の層位的事例は上記の問題との間に整合性がとれ、受け入れやすかったと思われる。

1990年後半以降、第Ⅹ層の良好な石器群が多数検出されている。特に多摩蘭坂遺跡第8地点の石器群は武蔵野編年第Ⅰa 亜文化期が一つの段階として成立しえるのか問題提示している。諏訪間順は立川ローム最下底部の石器群として、現在確実に認識できる最古の石器群を明らかにするため武蔵台遺跡第Ⅹ層を検証した(諏訪間 2006)。その結果、文化層の細分には問題が多いことを明らかにしている。文化層の設定が全く独自に出来るのではなく、それぞれの研究状況の中でより妥当と思われる方向で分析が進められ一例である。現時点では諏訪間の分析が妥当と思われるが、新たな視点が出れば再度分離に積極的な考

えが提示されるかもしれない。

iii) 葛原遺跡B地点（東京都練馬区）

葛原遺跡B地点は石神井川中流域に位置する。本地域は砂川期の遺跡がまとまっており、当該期研究において重要な地点として捉えられている。葛原遺跡B地点の報告書では、第Ⅰ文化層が自然層第Ⅲ層下部、第Ⅱ文化層が自然層第Ⅳ層上部と分離されているが、同一文化層と捉える人も多い（国武 2000 ほか）。飯田茂雄は詳細な検討を行い、黒耀石が第Ⅲ層下部に多く、チャートが第Ⅳ層上部に多い傾向があり「見方によっては異なる区分も可能」（飯田 2006）としているが、それらが同一地点における異なる活動の結果であれば、同一の時期のものが区分されてしまう危険性があるとしている。

iv) 殿山遺跡（埼玉県上尾市）

殿山遺跡は大宮台地に所在し旧石器の発掘調査は2回実施された。立川ロームの堆積は1.5m程度と薄く、遺物の出土層位はソフトロームから第2黒色帯中で、垂直分布は約1mに広がっている。第1次調査と第2次調査の石器群がはたして、同一時期か時期差があるのかといった問題がある。吉田直哉は文化層の把握の手順として、遺物の平面分布のまとまり→石器・礫の垂直頻度分布→器種・石材の垂直傾向、接合状況→微地形を踏まえて遺物レベルのピークの検討を行い、第1次調査と第2次調査の石器群が同一文化層である可能性が高いと結論した。殿山遺跡の遺物垂直分布は大宮台地の他遺跡と比較しても拡散的で、文化層の把握は特に難しいが、ローム層の堆積が薄い地域では、複数の自然層位をまたいで遺物の垂直分布が拡散する例が殆どで、文化層及び帰属層位の認定は難しい。

v) 武蔵野台地北部及び大宮台地の事例

武蔵野台地北部から大宮台地は立川ローム層の堆積が薄く、また第Ⅲ層ソフトロームが第Ⅳ層中まで進行しているため、砂川期以降の石器群は全てソフトロームからの出土になる。田中英司は、武蔵野台地北部と大宮台地の幾つかの遺跡を取り上げ、標準層位に遺物の深度差を線で表すことで遺跡間における変異が大きいことを示し、層位による編年序列の難しさを指摘している。

遺物の深度差を線で表すことによって、細別編年とは別に各遺跡の個性を見る事が出来る。また傾向として、上層から①細石器から砂川期まではソフトローム中に含まれる。②岩宿Ⅱ期は第Ⅳ層に入ったあたりから出土する。土層断面的にはソフトロームと第Ⅳ層の境で微妙であるが、平面的に掘り下げて行く過程では明らかに硬化するので認識できる。③第2黒色帯中はその中での細分は難しいが、第Ⅴ層と第Ⅹ層とは区分が容易である。④第Ⅹ層から検出された遺跡は少ないが、明花向遺跡A区では写真等で見る限り明らかに下層からの検出されている。

引用・参考文献

麻生 優 1985 「層位論」『岩波講座 日本考古学Ⅰ 研究の方法』岩波書店 pp80-113

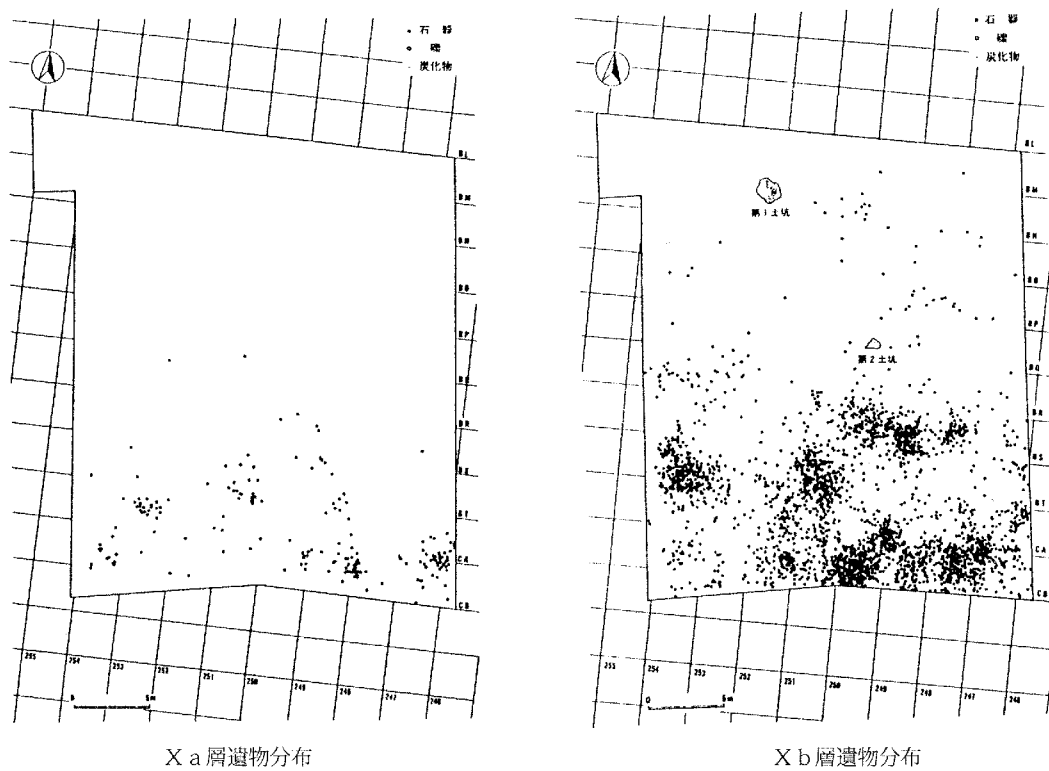
荒井幹夫 1997 「西南日本における細石器文化の様相―競合する諸仮説―」『人間・遺跡・遺物Ⅲ―麻生

- 優先生退官記念論文集一』発掘者談話会 pp.48-62
- 飯田茂雄 2007 「後期旧石器時代後半期における立川ローム層の石器群」『土と遺跡 時間と空間』多摩川流域の考古学的遺跡の成立と古環境復元研究会 pp.20-23
- 五十嵐彰 2000 「「文化層」概念の検討—旧石器資料報告の現状（Ⅱ）—」『旧石器考古学 60』旧石器文化談話会 pp.43-56
- 上杉 陽・上本進二・米澤 宏 1999 「神奈川県綾瀬市吉岡遺跡群のテフラ層位」『吉岡遺跡群Ⅸ 考察編・自然科学分析編』かながわ考古学財団調査報告 49 pp.81-103
- 小田静夫 2003 『日本の旧石器文化』同成社
- 神奈川考古同人会編 1979 『神奈川考古 第7号 ナイフ形石器終末期の諸問題 特集』神奈川考古同人会
- 神奈川考古同人会編 1980 『神奈川考古 第8号 特集 ナイフ形石器終末期の諸問題（Ⅱ）』神奈川考古同人会
- 鎌木義昌・高橋 護 1965 「瀬戸内海地方の先土器時代」『日本の考古学Ⅰ 先土器時代』河出書房新社 pp.284-302
- J.E.キダー・小田静夫編 1975 「Attached Fig.1」『中山谷遺跡』国際基督教大学考古学センターOccasional Papers Number 1
- 栗原伸好 1999 「層位論」『石器文化研究 7』石器文化研究会 pp.211-220
- 国武貞克 2000 「武蔵野台地石神井川流域の砂川期の様相」『石器文化研究8』石器文化研究会 pp.235-270
- 小林達雄・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男 1971 「野川先土器時代遺跡の研究」『第四紀研究』第10巻第4号 日本第四紀学会 pp.231-252
- 佐藤達夫 1970 「ナイフ形石器の編年的一考察」『東京国立博物館紀要 五』 pp.23-76
- 白石浩之 1983 「考古学と火山灰層序—特に関東地方を中心とした旧石器時代の層位的出土例と石器群の様相—」『第四紀研究』第22巻第3号 日本第四紀学会 pp.185-198
- 諏訪間順 2006 「旧石器時代の最古を考える—『X層』研究の意味—」『岩宿時代はどこまで遡れるのか—立川ローム層最下部の石器群—』岩宿フォーラム実装委員会 pp.2-12
- 芹沢長介 1968 「層序と編年」『新版考古学講座1 通論〈上〉』雄山閣 pp.193-208
- 芹沢長介 1974 「層位的出土例と相対的編年」『古代史発掘1 最古の狩人たち』講談社 pp.105-117
- 田中英司 1987 「埼玉の先土器文化」『埼玉の文化財 第27号』埼玉県文化財保護協会
- 角田文衛 1968 「自然層と文化層」『新版考古学講座1 通論〈上〉』雄山閣 pp.172-193
- 戸沢充則 1983 「町田・新井論文に対する評論」『第四紀研究』第22巻第3号 日本第四紀学会 pp.150-152
- 中村真理他 2003 『多摩蘭坂遺跡Ⅳ』国分寺市遺跡調査会
- 野口 淳 2006 「2 ローム層と文化層、時期区分—旧石器時代研究の時間尺度についての覚え書き—」『明治大学校地内遺跡調査団 年報3』 明治大学校地内遺跡調査団 pp.69-76
- 野本孝明 1981 『久原小学校内遺跡』大田区の埋蔵文化財第2集
- 比田井民子・伊藤健・西井幸雄・野口淳・平井義敏 2004 「武蔵野台地後期旧石器時代遺跡の横断層序による研究（Ⅰ）」日本旧石器学会第2回シンポジウム ポスター発表

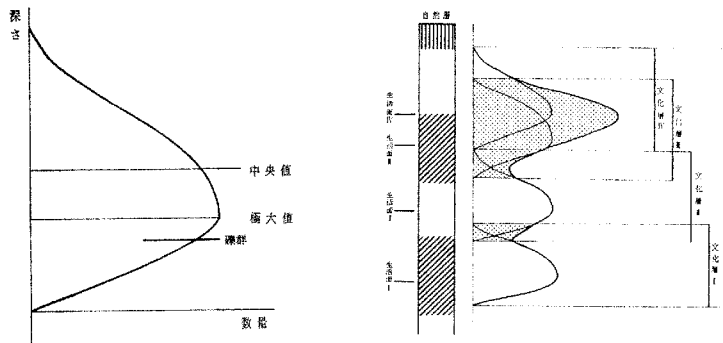
- 比田井民子・伊藤健・西井幸雄・野口淳・山岡拓也・藤田健一・飯田茂雄 2006 「武蔵野台地後期旧石器時代遺跡の横断層序による研究(2)」日本旧石器学会 2006 年度総会・研究発表会・シンポジウム ポスター発表
- 廣田吉三郎 1987 『葛原遺跡B地点』練馬区遺跡調査会
- 町田 洋 1971 「小林・小田・羽鳥・鈴木論文に対する論評」『第四紀研究』第 10 巻第 4 号 日本第四紀学会 p. 263
- 町田 洋・新井房夫 1983 「広域テフラと考古学」『第四紀研究』第 22 巻第 3 号 日本第四紀学会 pp. 133-148
- 松井 健 1971 「小林・小田・羽鳥・鈴木論文に対する論評」『第四紀研究』第 10 巻第 4 号 日本第四紀学会 pp. 263-265
- 矢島國雄・鈴木次郎 1976 「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古 第 1 号』神奈川考古同人会 pp. 1-30
- 柳田俊雄 1977 「瀬戸内東部及び近畿地方における旧石器時代研究の現状と問題点—特に研究過程における方法論をめぐって—」『プレリユード 20』旧石器文化談話会
- 横山祐平・川口潤他 1984 『武蔵台遺跡 I』都立府中病院内遺跡調査会
- 吉田直哉 2005 「殿山遺跡の文化層」『県指定文化財上尾市殿山遺跡シンポジウム』埼玉考古学会・上尾市教育委員会 pp26-38



第9図 久原小学校内遺跡



第3図 武蔵台遺跡X層の平面分布

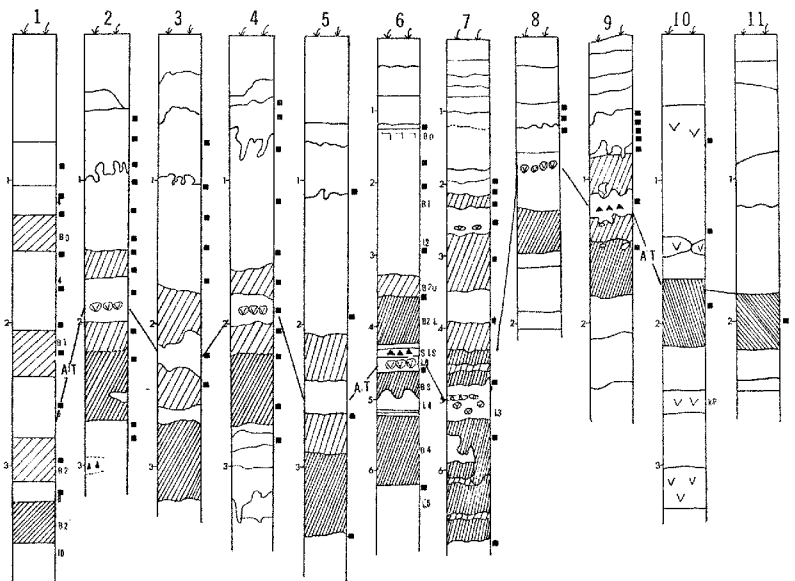
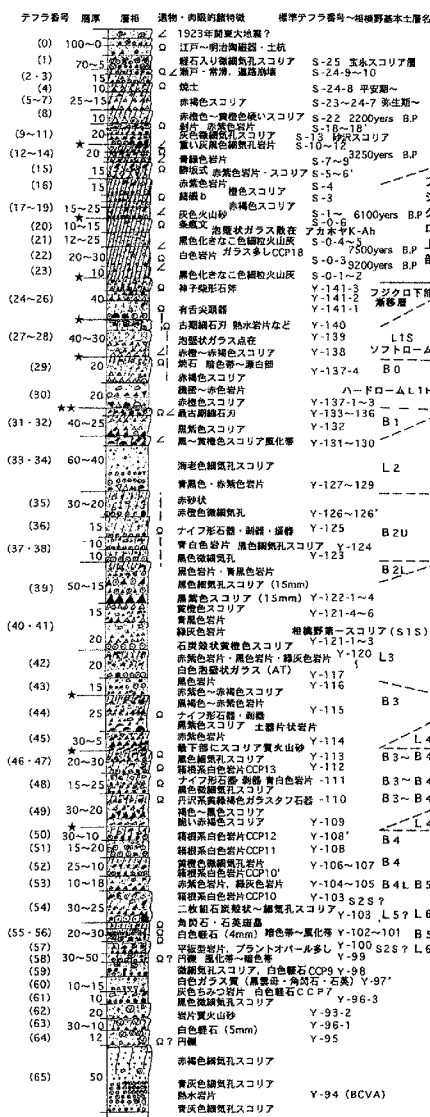


第5図 ビーナス曲線(矢島國夫・鈴木次郎 1976)

「先土器時代の遺跡の発掘では、当初は遺物が少なく漸増し、極大に達するとまもなく急激に遺物の出土量が減少するのが一般的な傾向である。礫群等の遺構が遺物の極大量に達した直後に確認されるのもまた一般的な傾向である」これを「ビーナス曲線」と呼称した

第6図 中山谷遺跡(J.E.キダー・小田静夫編 1975)→

「このグラフを作成することによって文化層の決定ができる。母岩別、石質別、深さ、接合等を加味して4枚の文化層に分けられた」
「40g以上の遺物はよく分離している。第Ⅲ文化層の遺物は上下の中が少ない。それに比べて、下層の遺物は浮き沈みが著しく1m以上の巾をもっている」
「重量のある遺物はやや下になる傾向がある。この面を逆に生活面としてとらえることも出来る」



第7図 関東地方の上部ローム層と石器群の層位的出土例(■は石器群の出土位置)(白石浩之 1983)

1: 東京都野川遺跡、2: 東京都西之台遺跡B地点、3: 東京都前原遺跡、4: 東京都はけうえ遺跡、5: 東京都多摩蘭坂遺跡(武蔵野台地)、6: 神奈川県寺尾遺跡、7: 神奈川県栗原中丸遺跡(相模野台地)、8: 千葉県星谷津遺跡、9: 千葉県腹山谷遺跡W区(下総台地)、10: 群馬県岩宿遺跡B地点、11: 栃木県星野遺跡(北関東)

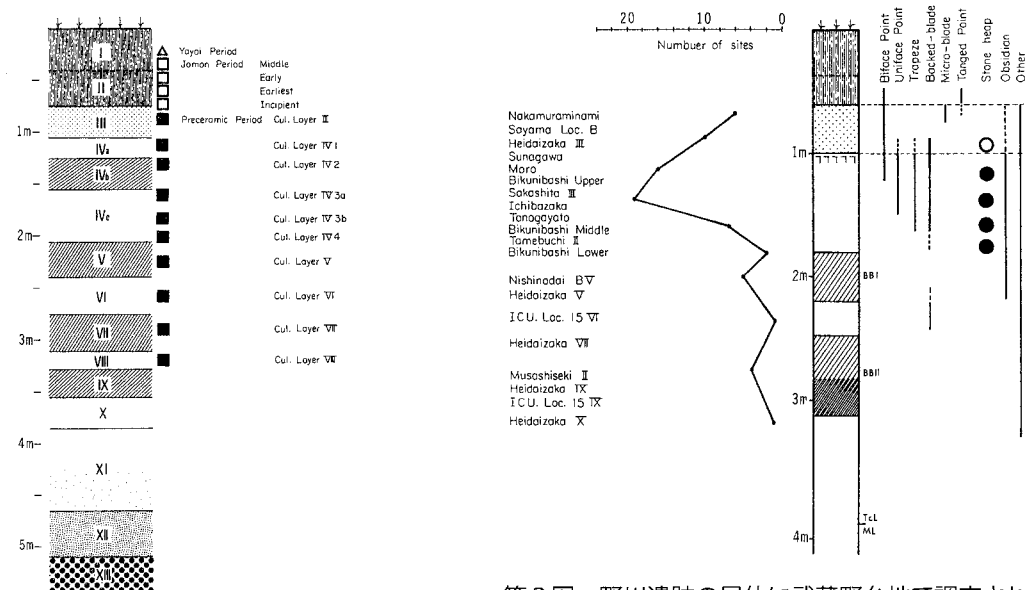
関東地域の土層柱状図に広域テフラ(AT)の位置を入れることで広域における石器群の対比が可能になった

第2図 相模野標準土層の概略のテフラ層位(上杉陽他 1999)

(C地点)	(A地点)	ク チ カ ル シ ュ ナ イ 遺 跡	石 鉄	上 屋 地 A 遺 跡	縄文土器	岩 宿 遺 跡	両面加工尖頭器	武 井 遺 跡	石鉄・土器片	有舌尖頭器	柳 又 遺 跡	縄文土器・石鉄	福 井 洞 穴
細石刃	有舌尖頭器		打製片刃石斧		石 鉄		彫刻刀		有舌尖頭器	細石刃		縄文土器・石鉄	
細石刃核	製片尖頭器		両面加工尖頭器		無 遺 物		石 刃		有舌尖頭器	彫刻刀		細石刃・爪形土器	
彫刻刀	スクレイパー		有肩尖頭器		切出形石器		石 核		両面加工尖頭器			細石刃・隆線土器	
スクレイパー	彫刻刀		打製片刃石斧		周辺加工尖頭器		ナイフ		尖頭器・ナイフ	ナイフ		細石刃・両面および 片面加工尖頭器	
石刃尖頭器	細石刃		石 刃		縦長製片		製 片		石 刃	彫刻刀		無 遺 物	
	細石刃核		製片尖頭器		楕円形石器				彫刻刀	石 刃		小石刃・石核	
	スクレイパー		制 片		無 遺 物							無 遺 物	
	両面加工尖頭器		チョッパー		チョッパー		細石刃	井 島 遺 跡	石 鉄			制片・石核	
			握 槌		チョッピングツール		小形の 横割ナイフ		縄文土器			無 遺 物	
			ルバロウ型石核		握 槌				細石刃			無 遺 物	
					制片尖頭器				合形石器			握槌?・スクレイパー	
					尖頭器								
					彫刻刀								

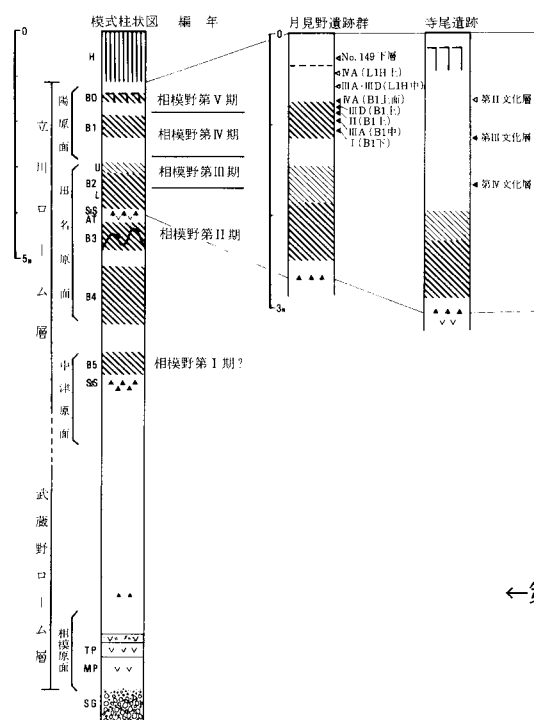
第1図 複数の文化層が確認された代表的遺跡(芹沢長介1974一部)

「日本の代表的な層位的出土例による遺物の相対的新古の比較 横線は層位の境界を示し、同一遺跡では下層ほど年代が古くなる」



第2図 野川遺跡で示された武蔵野台地標準層位

第3図 野川遺跡の層位に武蔵野台地で調査された遺跡の石器群を当てはめたもの



←第4図 相模野台地の標準層位と各遺跡の層位図
(神奈川考古同人会シンポジウム1979・1980)

「立川ロームは武蔵野面では薄く、したがって文化層把握にも層位的重複関係を云々するのも困難であった・・・中略・・・これまでも層位的に重複する遺跡は少なからず存在するのである—これも野川遺跡の発掘に於いて詳細な重複関係の把握に成功したことから、改めて他遺跡に対する評価によって発見したものである。」(小林他1971)

野川～多摩川間の地形形成と後期旧石器時代遺跡の動態

野口 淳（明治大学校地内遺跡調査団）

林 和広（東京大学大学院）

はじめに

武蔵野台地の南縁は多摩川の流路に画されている。この多摩川とほぼ平行して流れる野川の流路は、基本的に武蔵野面と立川面を画する国分寺崖線の南縁に沿っている。この崖線は、野川の兩岸で大きく異なる特徴的な地形を作りし、同時に豊富な湧水を供給している。こうした環境の特質は、立川礫層堆積期、武蔵野—立川ローム移行期以降かたちづくられたものであり、時間的には後期旧石器時代の開始期以降にほぼ重なり合う。このため野川～多摩川間に広がる地形面（立川面）に点在する考古遺跡には、その時代の人間活動の痕跡とともに、地史的できごと、地形発達の記録も残されている。それらの記録は、一遺跡（一生活地／一活動地点）の立地条件、生活環境を明らかにするだけでなく、流域全体としての地形形成過程、遺跡の立地条件、生活環境の変遷の解明をも可能にする。とくに野川流域には、武蔵野面側を中心に後期旧石器時代遺跡が密集している（下原 2005 など）。したがって立川面の地形形成過程の把握は、武蔵野面側に密集する遺跡の後背地（または前面）の生活環境の変遷という巨視的な遺跡立地の検討のために欠かせない。

本報告は、野川～多摩川間の立川面においてこれまで調査されてきた多数の遺跡・地点を網羅的に検索、考古学・地学双方に連絡可能なデータを整備することで上記の課題に取り組むものである。

1. 立川面の成立過程：考古遺跡における埋没地形の復元から

多摩川の主流路が武蔵野台地の南縁を洗い削ってできたのが国分寺崖線である。削られたあとの当時の河床部分には立川礫層が堆積した。そして主流路が南遷する過程で、崖線沿いから順に、旧河床は陸化・段丘化した。これが、野川～多摩川間の立川面形成過程の概略である。

この立川面、とくに野川から離れた「内陸部」とも呼べる範囲は、野川沿いとは異なり、後期旧石器時代遺跡の分布は少ないと考えられてきた。しかし、ここ十数年来の調査では、埋積された台地内小河川流路としての凹地、多摩川の現流路を臨む府中崖線に沿った遺跡分布も把握されている（中山 2006 など）。

そうした中で、調布市、三鷹市域の立川面での発掘調査では、立川礫層上部から立川ローム層下部にかけての堆積環境、地形形成過程が検討されている（調布市遺跡調査会 2006、明治大学校地内遺跡調査団編 2005a,b,2006、沼上編 2006 など）。そこでは、陸化・段丘化の過程が国分寺崖線から現流路に向かう単純な一方向・不可逆的なものではなかったこと、地形面が安定するまで、乾陸環境での降下火山灰層の堆積と、削剥、水成層の堆積、あるいは乾陸環境での堆積物の二次的な「水つき」といった多様な状況が複雑に行き来し

つつ進行していた。それは網状河川流地帯における地形形成過程としては一般的なものだが（菊地 2005）、それが実際の遺跡調査における露頭断面、埋没地形面上に明確に捉えられたという点で重要である。

先にも指摘したとおり、こうした地形環境の複雑な変化は、すなわち生活の「場」としての性格の変化である。しかもそれは、「発掘調査範囲」としての一遺跡・地点に限られず、隣接する遺跡・地点、さらには対岸の武蔵野面に密集して分布する周辺遺跡へと広く結びついているはずである

2. 野川～多摩川間の地形形成：考古遺跡の土層断面が明らかにすること

一遺跡・地点における状況が明らかになったところで、さらに視野を広げてみよう。遺跡調査で記録された露頭断面図を集成、乾陸環境下で堆積した降下火山灰層としての立川ローム層が野川標準層序のどこまで堆積しているのかを確認していくことで、野川～多摩川間の地形形成過程の復元像を描き出すことができる。野川標準層序が地学的にどのような意味をもつのかという点では問題が残るが（野口 2006）、しかし火山ガラス（AT および UG）、あるいは一次鉱物組成（輝石－カンラン石比）の分析データを併用することで、最大公約数としての層序対比は可能である。さらに考古遺跡における記録は、一定間隔で試料を採取するボーリング調査のデータよりも連続性という点で確実、かつ時間的な解像度も高い。平面的な広がりの中で埋没地形を復元している調査データも少なくない。これにより、高精度・高解像度の復元が可能になるのである。

巨視的にみれば、もちろん国分寺崖線・野川の側から、府中崖線・現多摩川流路の側へ、順次、陸化・段丘化してきた過程が復元される。一方で微視的には、野川標準層序の VII 層より上位が降下火山灰層として堆積しているという点では共通する遺跡・地点間でも、VII 層より下位の堆積状況が大きく異なっていることも指摘できる。これは離水の時期と安定斜面・土壌層形成の時期が必ずしも一致しないという状況を示している（上杉・関東第四紀研究会 2006）。流路河床から氾濫原地帯へと移行する過程で、部分的な微高地（自然堤防や中州など）上には降下火山灰層が形成され、低地・凹地部分には水成堆積層が形成される。離水して間もない面は再び湛水することもあっただろうし、いったん形成された堆積層が剝離されてリセットされる場合もあったはずである。付け加えるならば、野川あるいは仙川流域などの低地部における泥炭層の形成など、低湿地的な環境を示すデータは武蔵野台地全体で見ても少なくない（野口 2004）。

そうした複雑な状況は、しかし VII 層（おそらくその中でも上部）段階における広範囲の安定斜面化・段丘化によって大きく変わったようである。府中・調布市域の多くの遺跡・地点において、VII 層より上位には、水送性の堆積環境の痕跡はまったく認められないと言ってよさそうである。

続く大きな画期は、始良 Tn 火山灰が降下した後、IV 層下部の段階に認められる。現在の立川市域～調布市域に至る府中崖線沿いの範囲のほとんどが、礫層直上にあまり厚くな

い砂層あるいは「水つきローム」をのせた上に野川標準層序 IV 層下部より上位の降下火山灰層をのせている。この段階での離水から安定斜面形成は比較的短時間のうちに一方向的に進んだと考えられるが、これは最終氷期における海水準の最大低下期との関連で説明可能だと思われる。同時期、台地内のいくつかの河川流域では水流の途絶した谷部の埋積が進む一方、水流が集まる谷では限定された流路の削剥が進んだ（野口前掲）。こうした地形形成に関する復元像は、MIS3 から 2 へと至る環境変遷の一端を示している。

3. 野川～多摩川間における後期旧石器時代遺跡の動態

野川流域における遺跡分布の動向については、おもに武蔵野面側の資料にもとづいて、おおむね次のようにまとめることができる（下原 2005、2006 など）。

- ① 後期旧石器時代初頭～前半（X 層～V 層下部段階）は遺跡数が少なく、規模も小さい。
- ② 唯一の例外は源流部の武蔵台・多摩蘭坂遺跡であるが、ここでも VII～V 層下部段階。
- ③ の資料はきわめて限られている。
- ④ 後期旧石器時代中葉（V 層上部～IV 層下部・中部段階）になると遺跡数が急増し、さらに流域各所に大規模な遺跡が見られるようになる。
- ⑤ 後期旧石器時代後半～終末（IV 層上部～III 層段階）の遺跡数は再び減少し、規模も小さくなる。ただし、源流部の武蔵台遺跡は例外である可能性がある。

このような中、調布市野水遺跡における X または IX 層段階の大規模遺跡（環状ブロック群?）の検出は新たな問題を提起した。立川面の陸化・段丘化の最初期に、当時の多摩川流路にも至近であったと思われる谷状地形に面して、従来把握されていなかった遺跡の存在が確認されたからである。こうした遺跡立地のあり方は、群馬県域あるいは北信・野尻湖周辺などにおける同時期の様相と比較されるべきものであろう。武蔵野面側の遺跡についても、眼前に広がりはじめた低地帯＝立川面との関連の中で再度検討する必要がある。

一方、V 層上部～IV 層下部・中部段階については、他地域からの移動も視野に入れた人口増による可能性が指摘されてきたが、先に見たような地形形成過程の復元と併せると、むしろ生活環境の変化、つまり立川面の広範かつ安定した乾陸化による日常的な活動範囲（home range）の拡大によるものと考えるべきであろう。しかし現在までのところ、大規模遺跡はいずれも野川沿いにあり、「内陸部」ないし多摩川沿いには小規模・派生的な遺跡（野口 1995）しか見られない。一方で、立川面という拡大された活動範囲を前面にもつ野川流域と、それ以外の小河川流域との間では、大規模遺跡の分布や時期・層位別の出現傾向に差があるようだ。さらに地形環境の異なる武蔵野台地北部（石器文化研究会編 2006）との比較も含め、現状としての地形図から捉えられる「静的な」立地条件だけでなく、地学的な検討を踏まえた地形形成過程との関連で遺跡分布の動態を捉えなおすことは今後の旧石器時代研究において重要な課題となるだろう。

それはもちろん、武蔵野台地にのみ限られるものではない。

引用文献

- 上杉陽・関東第四紀研究会 2006 「南関東の古地理の変遷に関する異説」『「野川流域の旧石器時代」』：57-59
- 貝塚爽平 1979 『東京の自然史』、増補第2版、紀伊國屋書店：1-239
- 菊地隆夫 2005 「〈コメント〉礫層表面の起伏と崖線下の低地の成因」『シンポジウム 立川ローム層下部の層序と石器群 記録集』：34-37
- 久保純子 1988 「相模野台地・武蔵野台地を刻む谷の地形—風成テフラを供給された名残川の地形—」『地理学評論』第61巻1号（Ser.A）：25-48
- 小林達雄・小田静雄・羽鳥謙三・鈴木正男 1971 「野川先土器時代遺跡の研究」『第四紀研究』第10巻4号、日本第四紀学会：231-253
- 下原裕司 2005 「野川流域 武蔵野面の遺跡とその分布」『第10回石器文化研究交流会 発表要旨』、石器文化研究会：63-70
- 下原裕司 2006 「野川流域の旧石器時代遺跡の分布と変遷」『「野川流域の旧石器時代」フォーラム—』：67-70
- 石器文化研究会編 2006 『第11回石器部課研究交流会—発表要旨—』、石器文化研究会・第11回石器文化研究交流会埼玉実行委員会：1-132
- 調布市遺跡調査会編 2006 『都立武蔵野の森公園埋蔵文化財調査—野水遺跡第1地点—報告書』、調布市遺跡調査会：1-254
- 中山真治 2006 「立川面の旧石器時代遺跡—その分布と内容の変遷—」『「野川流域の旧石器時代」フォーラム』：71-83
- 沼上省一編 2005 『武蔵野の森公園整備工事に伴う埋蔵文化財試掘調査 東京都三鷹市大沢 武蔵野の森公園D地区』、東京都建設局西武講演緑地事務所・三鷹市教育委員会・三鷹市遺跡調査会（三鷹市埋蔵文化財調査報告第29集）：1-34
- 野口 淳 1995 「武蔵野台地Ⅳ下・Ⅴ上層段階の遺跡群—石器製作の工程連鎖と配置の体系—」『旧石器考古学』第51号、旧石器文化談話会：19-36
- 野口 淳 2004 「武蔵野台地における後期旧石器時代遺跡の立地と地形」『明治大学校地内遺跡調査団年報1』：64-70
- 野口 淳 2006 「ローム層と文化層、時期区分—旧石器時代研究の時間尺度についての覚え書き—」『明治大学校地内遺跡調査団年報3』：69-76
- 野口淳・林和広 2006 「明治大学調布付属校用地の遺跡（仮称）における遺跡形成過程の研究—ジオアーケオロジー調査方法の確立に向けて—」『明治大学校地内遺跡調査団年報3』：37-44
- 羽鳥謙三 2004 『武蔵野扇状地の地形発達—地形・地質と水理・遺跡環境—』、地学団体

研究会：1-45

パリノ・サーヴェイ(株) 2006 「第6章 自然科学分析」『都立武蔵野の森公園埋蔵文化財調査－野水遺跡第1地点－報告書』、調布市遺跡調査会：244-254

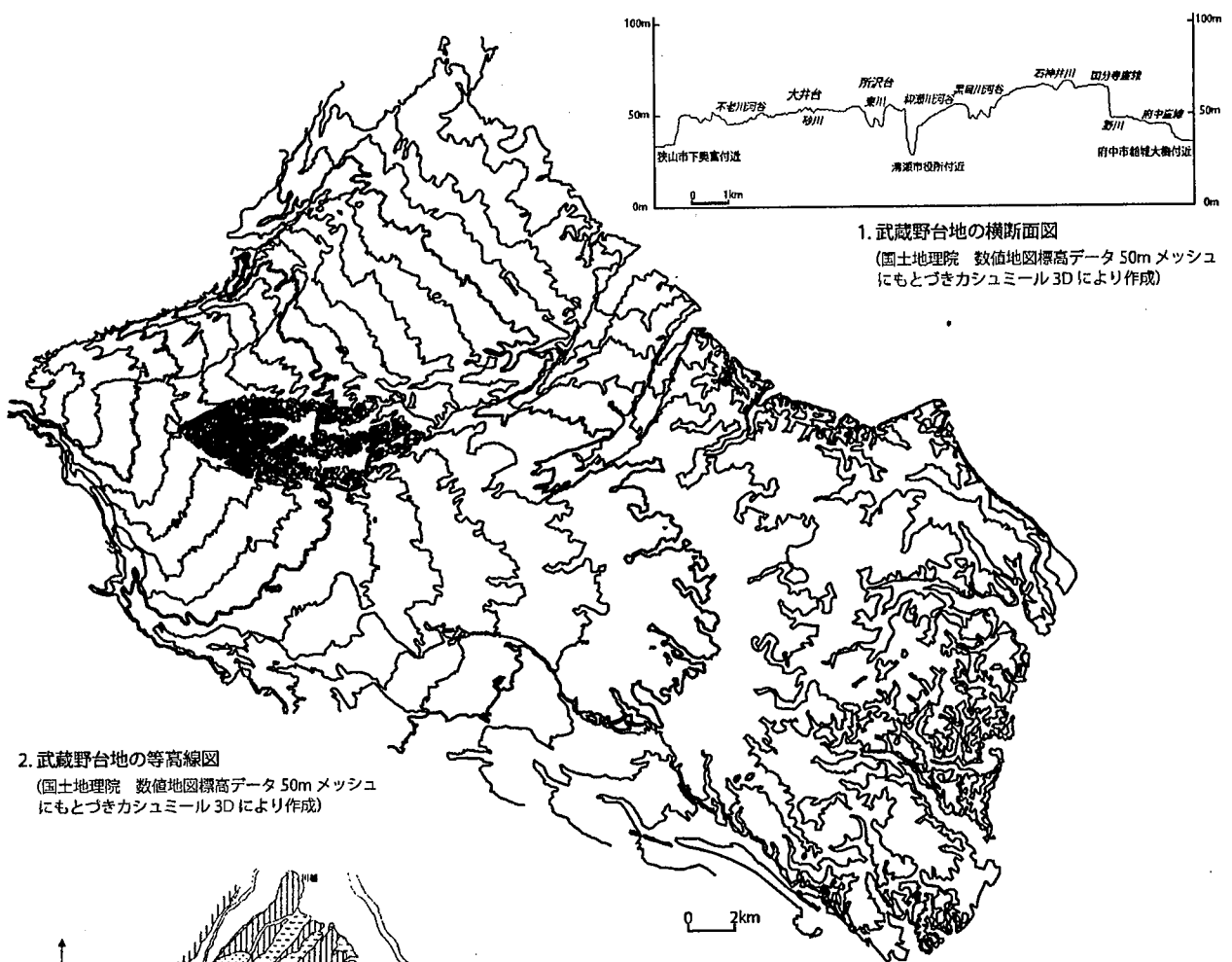
松田隆夫・大倉利明 1988 「立川段丘と凹地地形について－府中市周辺の立川面の区分－」『府中市郷土の森紀要』1：23-77

松田隆夫・井出浩正・菅頭明日香 2005 「東京都府中市・調布市・三鷹市周辺の凹地地形とテフラ」『明治大学校地内遺跡調査団年報 2』、明治大学：71-82

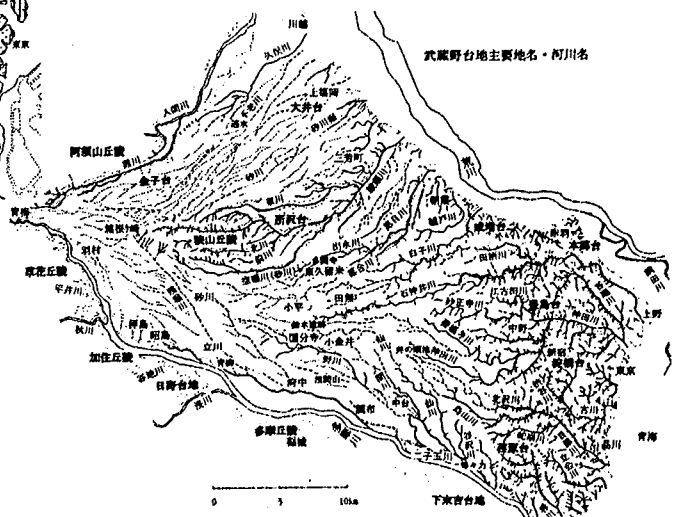
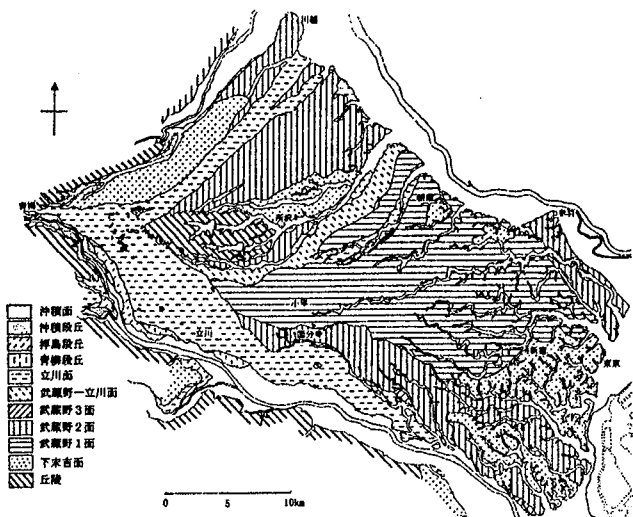
明治大学校地内遺跡調査団編 2005a『シンポジウム 立川ローム層下部の層序と石器群予稿集』、六一書房：1-44

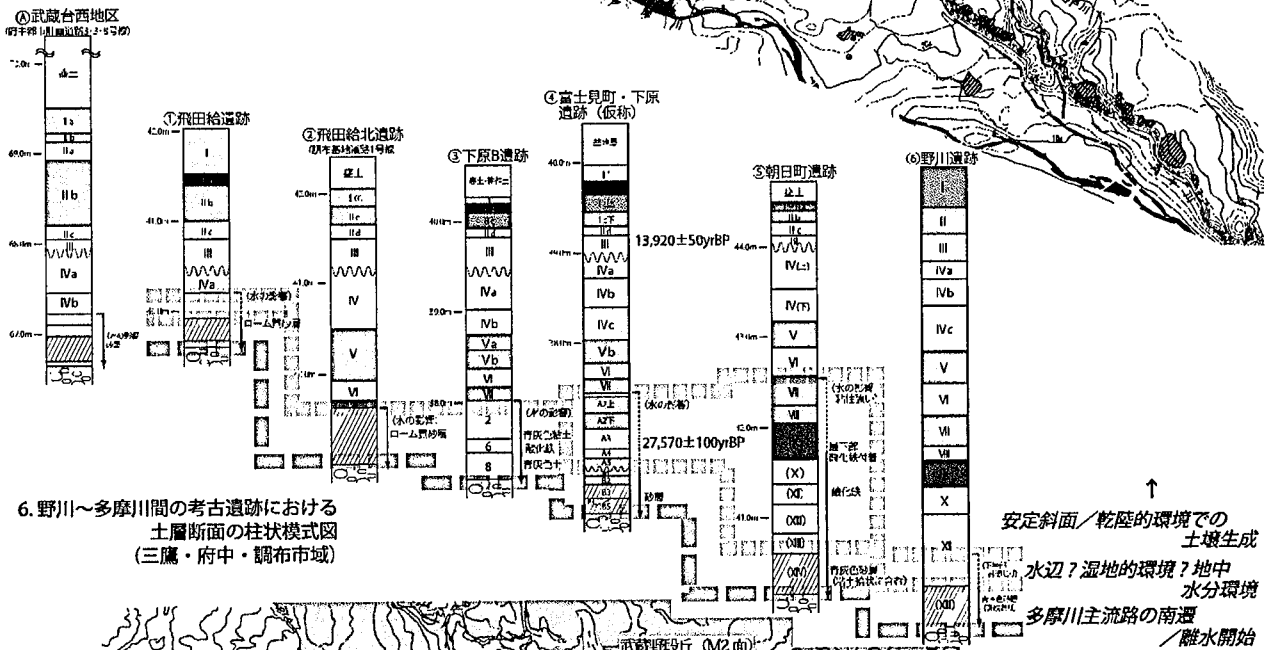
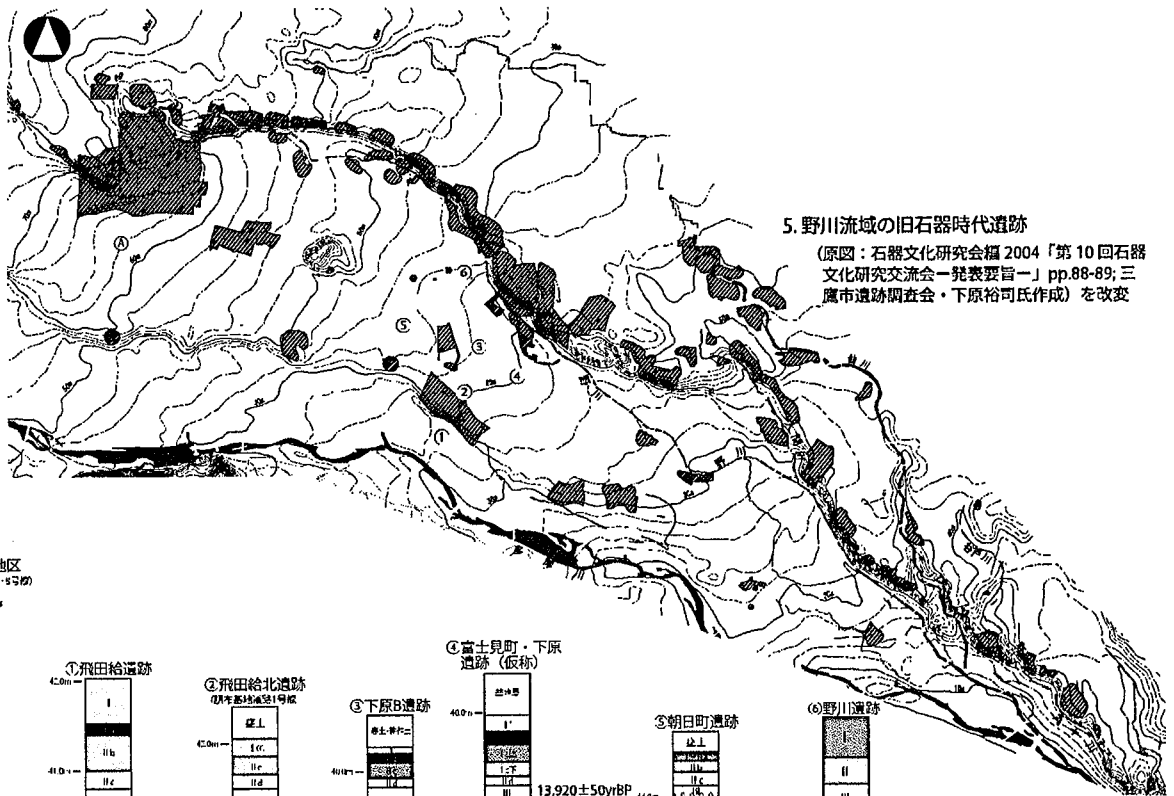
明治大学校地内遺跡調査団編 2005b『シンポジウム 立川ローム層下部の層序と石器群記録・コメント集』、六一書房：1-62

明治大学校地内遺跡調査団編 2006『野川流域の旧石器時代フォーラム』、調布市教育委員会・三鷹市教育委員会・明治大学校地内遺跡調査団：1-90

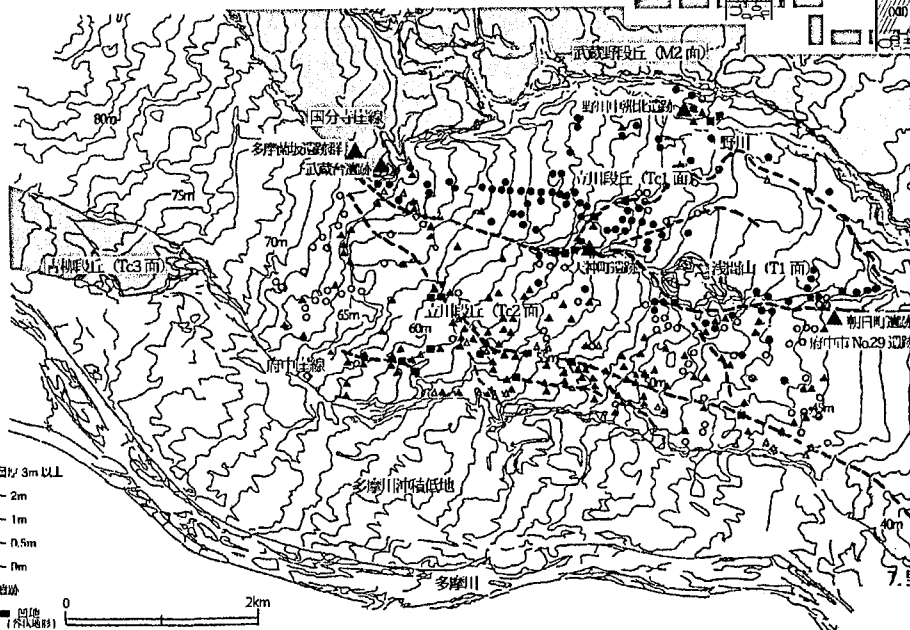


2. 武蔵野台地の等高線図
 (国土地理院 数値地図標高データ 50m メッシュ
 にもとづきカシュミール 3D により作成)





6. 野川～多摩川間の考古遺跡における土層断面の柱状模式図 (三鷹・府中・調布市域)



7. 野川～多摩川間のローム層厚分布と凹地地形・埋没谷 (松田ほか 2005: 第29図)

多摩ニュータウンNo.681 遺跡の立川ローム層に見られるスコリアの形態

上條朝宏

一般に立川ロームの一次鉱物組成を鑑定すると橄欖石とか輝石類の鉱物組成の増減が、それなりのカーブを描くことが知られている。またA T層準を中心に、上部に関して言えば、火山ガラスが鑑定されることで層位区分が可能になり、出土石器と人との関係を検討する作業が可能となる。それがA T層準より下層は、上層に比べ鉱物組成の増減が少なくなる傾向がある。

ここでは、一次鉱物組成だけでなく、さらにスコリアの形態を含めて再度見直した結果を紹介してみる。

武蔵野台地のスコリア層は、多摩丘陵より多摩川を挟んで富士山から遠くなることでその粒径が小さくなる。今回は、武蔵野台地と比較するために、まずは多摩ニュータウン内の土壌断面から採取した試料を検討し、先行き時間があれば武蔵野台地との本格的な比較を試みようと考えている。

第1図は、武蔵野台地東端の板橋区の菅原神社台地上遺跡でのA T層準上面の一次鉱物組成であり、橄欖石の増減による動きが見られる。第2図は府中市の武蔵台西遺跡でのA T層準下部の一次鉱物組成である。小さい○印の表記部分は植物珪酸体の含量でB B II相当にあたる。この一次鉱物組成をみると、B B II相当以下ではやや一次鉱物組成の動きが少ないことがわかる。

したがって、これらの層準から旧石器が出土した場合に一次鉱物組成とスコリアの形態から、どのように出土層を表現できるかということを検討する。ここでのスコリアとは、火山灰中に含まれている岩滓質な粒状の物質であり、走査電子顕微鏡による表面観察の画像で、その形態の変化が観察できる。

第3図の右側は、武蔵野台地の西端に位置する世田谷区の都立園芸高校内丸山東遺跡の土壌断面上部のスコリアの形態である。左側が立川ローム全般の層準に近い多摩ニュータウンのスコリア形態である。

この丸山東遺跡の上部に見えるスコリアのうち、1点だけ輪郭が明瞭なスコリアがある。当初は北関東系のスコリアかと推察したが、試料採集者の話だと北関東には類例がないとのことであり、今後青柳スコリアに含まれるかを検討する必要がある。それ以外は、富士山系のスコリアと思われる。

スコリアの形態について、細かい分類はおこなっていないが、発泡が良好というのは、円形もしくは卵形で円形に近く、レンズのように底がみえるもの、あるいは底が抜けているものを指し、逆に穴が不定形で小さくなっているものは発泡が不良と解釈される。また、スコリア自体、いろいろな色と形があり、色では、赤褐色・黄褐色などの色調があるが、今回は大きく2種類に分けて、赤色と黒色のスコリアとして報告する。

第4図の右側、多摩ニュータウンと富士山東方地域のとの比較となるが、立川ローム最

上部の青柳スコリアと下部の赤色スコリアの発泡性を紹介したもので卵形あるいは円形のスコリア形態になる。それから下層の第一黒色帯（BB1）でやや発泡性が小さくなり、AT層準以下の層になると発泡性が小さいスコリアがみられる。今回は数ある多摩ニュータウンの土壌断面のうち、どの断面を紹介しようかということとなるが、その選択に先立って蛍光X線分析法による火山灰分析を紹介する。

多摩ニュータウン区域内の標準断面は、No.753 遺跡に隣接する大露頭があり、永塚澄子氏が蛍光X線分析法で分析した主要元素8元素、微量元素3元素の分析結果があり、マグネシウム・カリウム・カルシウム・ストロンチウムの分析結果によると、上部から立川・武蔵野・多摩ロームになる（第5図）。

これらの元素分析からみると赤線から上が立川ローム、下が武蔵野ロームになる。おそらく元素分析結果からみて、立川と武蔵野ローム層の境界が明瞭にできたのは、この分析例が初めてと思われる。そこでこの元素分析に相当する土壌断面を検討した結果、立川ロームの残りが良好な場所として、No.681 遺跡を選んだ（第6図）。この土壌断面は、最上部を一部分消失しているが、永塚澄子氏の元素分析からも武蔵野ロームの上部が確認できる。また多摩ニュータウン区域は、斜面堆積が多いため第二暗色帯相当は、ほとんどが水付ロームになっているが、このNo.681 遺跡の土壌断面は、やせ尾根にもかかわらず武蔵野台地のX層相当の赤色スコリアも観察できる。そういった意味では、将来的に武蔵野台地と比較する上で良好な断面といえる。

概略の説明となるが、AT層準が数字でいえば、6番Cで6-A・B・Cとなり、A・Bあたりが第一黒色帯（BB1）相当、それから7番相当が第二黒色帯（BB2）の上層相当、それから8番近くが第二黒色帯の下層相当になり、10層がアカスコ帯で、11層が武蔵野ローム層上部となる。

これらの層中に含まれるスコリアを走査電子顕微鏡を用い、60倍で観察した結果を報告する。

（第7図1）上段の5sから5-1～5-2が立川上部の赤スコで発泡性が良いことがわかる。合わせて下段の黒スコの方も発泡性が良いといえる。

（第7図2、第7図3、第7図4）これが通常のハードロームの赤スコ、それからデカスコの黒色スコリアも割合発泡性が良い。6-Aが第一黒色帯近くになる。6-B・CがAT層準になるが、この層準から、少し発泡性のあるものから、発泡性の少ないスコリアに移っていく。このあたりが境目になり、第二黒色帯に入り7Aから下層については、一見すると発泡しているように見えるが、発泡の穴が小さくなる。このスコリアは、手にとってみると、黄褐色で堅いスコリアであり、発泡の穴が非常に小さいということが肉眼的にも判断できる。

（第7図5）続いて7Bが第二暗色帯の上層と下層の境目になる。この段階でやや発泡する傾向が見られる。黒色スコリアも割合発泡しているが、その後下層になるとまた発泡性が少なくて穴の径も小さくなる。

(第7図6)第二暗色帯の下層部分にあたり、割合発泡が小さいということが見て取れる。

(第7図7) X層のアカスコに近くなり、9-7から10-A付近から赤スコになる。

(第7図8) 割合発泡の小さいものから少しずつ若干発泡の形態が大きくなってくると10A、B、このあたりが赤スコ帯になる。赤スコ帯の上層部分は割合スコリアも大きくて発泡も良いが、下層の部分になると割合発泡も小さくて少ない傾向になる。

(第7図9) 11は武蔵野上部になる。スコリアの大きさが1~2mmしかないので塊ごとカッターで切り取り、試料台に載せ撮影した状態である。立川ロームのスコリアで今まで見てきたような発泡の形からみると武蔵野ロームの場合は非常に粒が小さく、スコリアの色もアズキ色に近い色になる。立川ロームの場合は、褐色もしくは黄褐色に近い色が多いとすれば、武蔵野上部に関していえば、やや明るい明赤褐色のスコリアで発泡性が小さく11の1~4までの形態が見られる。

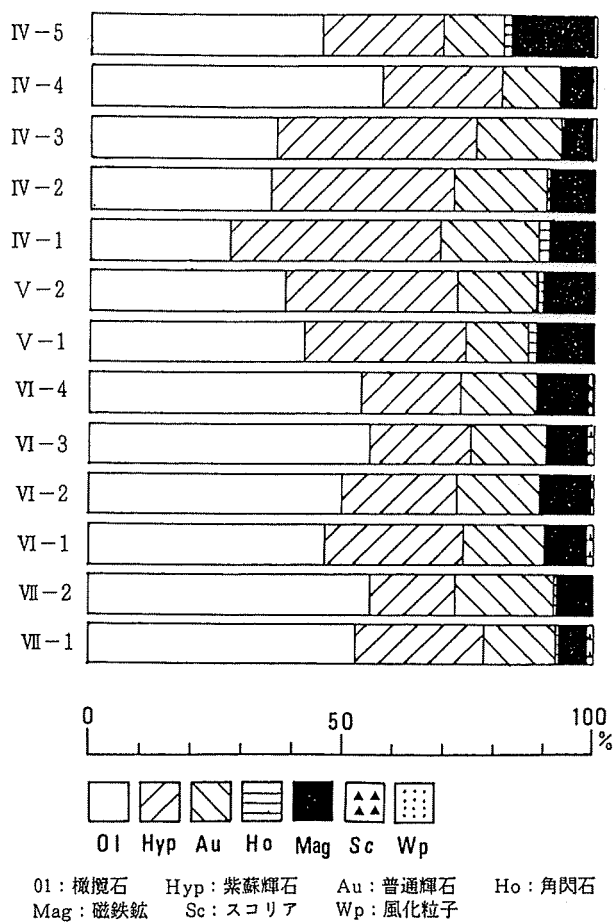
以上、スコリアの形態を紹介したが、一次鉱物の鑑定結果だけで判断すると、鉱物組成の変化が少ない場合は、どの層に決めるかの判断に迷うことがあるかも知れない。また、地域によっては、AT層準が抜けていたりする場所がある可能性もある。その場合は、指標になる火山ガラスが判断基準に使えないため、一次鉱物組成だけで決定しなければならない。そんな時にスコリアの形態の分類が層位を決定する上で、参考資料となる可能性がある。

なお、これらのスコリアの研究については、「多摩川流域の段丘と旧石器の考古学的立地と環境」で府中市の松田隆夫氏が、本報告より、詳細な記載で報告がなされている。内容的には、写真で見るのと、文章表現とで少し理解がしがたいかも知れない。しかしながら立川ローム層中に含まれるスコリアは、全層中同様なスコリアというわけではなく、発泡が良いスコリア、悪いスコリア、柔らかいスコリアや固いスコリアもあるわけで、調査中に肉眼観察で判断しやすいスコリアを再度上層から下層まで見直してみる必要性があるのではないかと考えている。

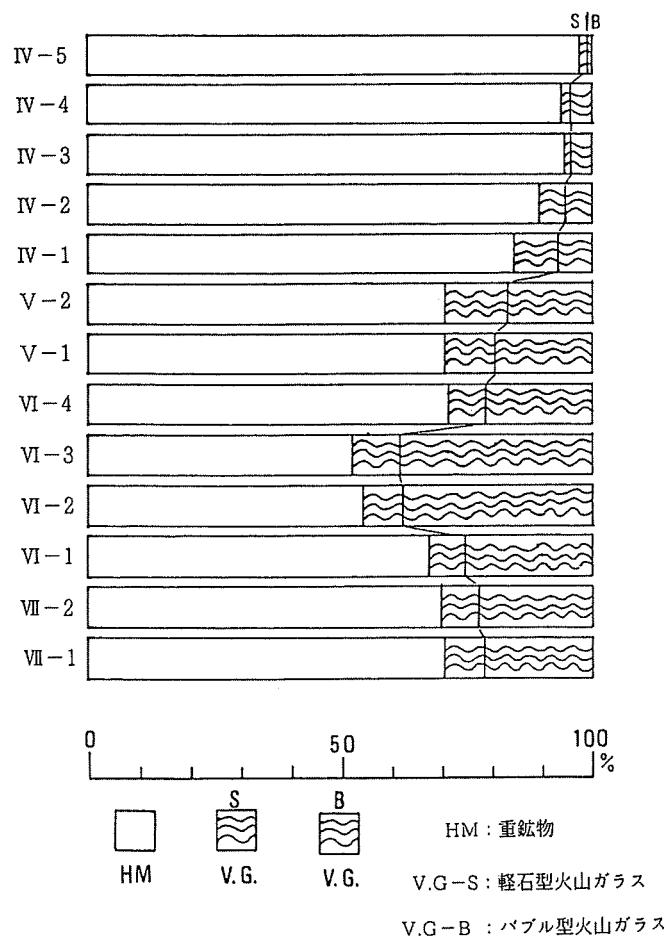
引用・参考文献

- 上條朝宏 1997 3 菅原神社台地上遺跡出土の旧石器時代土坑に伴う火山灰の一次鉱物組成について 菅原神社台地上遺跡 東京都埋蔵文化財センター調査報告第46集
- 上條朝宏 2004 2 旧石器時代土坑(A97-SK15)覆土の一次鉱物組成について 武蔵国分寺跡関連遺跡(武蔵台西地区) 東京都埋蔵文化財センター調査報告第149集
- 上條朝宏 2005 多摩ニュータウン区域の火山灰中に含まれるスコリアの形態分類について 東京都埋蔵文化財センター研究論集 XX I
- 上條朝宏 2006 丸山東遺跡の表層土壌の分析について 丸山東遺跡 東京都埋蔵文化財センター調査報告第196集
- 永塚澄子他 1990 蛍光X線分析法による関東ローム層の土壌分析 研究論集VIII 東京都埋蔵文化財センター p. 67~83

- 永塚澄子他 1991 蛍光X線分析法による関東ローム層の土壌分析－
多摩ニュータウンNo.796 遺跡の D. E. H 地点の攪乱層位について 研究論集IX 東京都埋蔵
文化財センター p. 67～86
- 比田井民子 2000 多摩川流域の段丘と旧石器の考古学的立地と環境
とうきゅう環境浄化財団
- 松田隆夫 2000 第2節 多摩川左岸における立川段丘の凹地地形 多摩川流域の段丘形成と考古学的
遺跡の立地環境 とうきゅう環境浄化財団

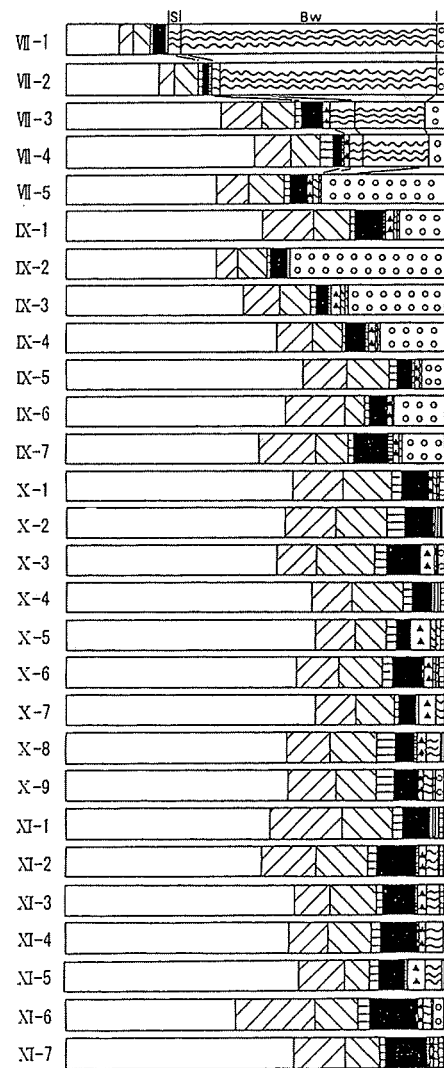
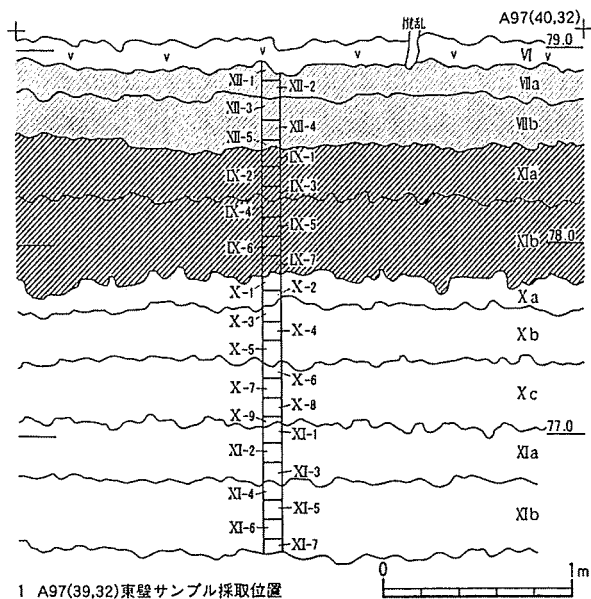


一次鉱物組成

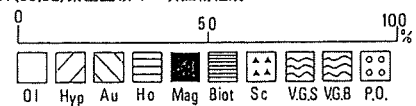


重鉱物と火山ガラスの比

第 1 図 菅原神社台地上遺跡の立川ローム層の一次鉱物組成 (上條1997)

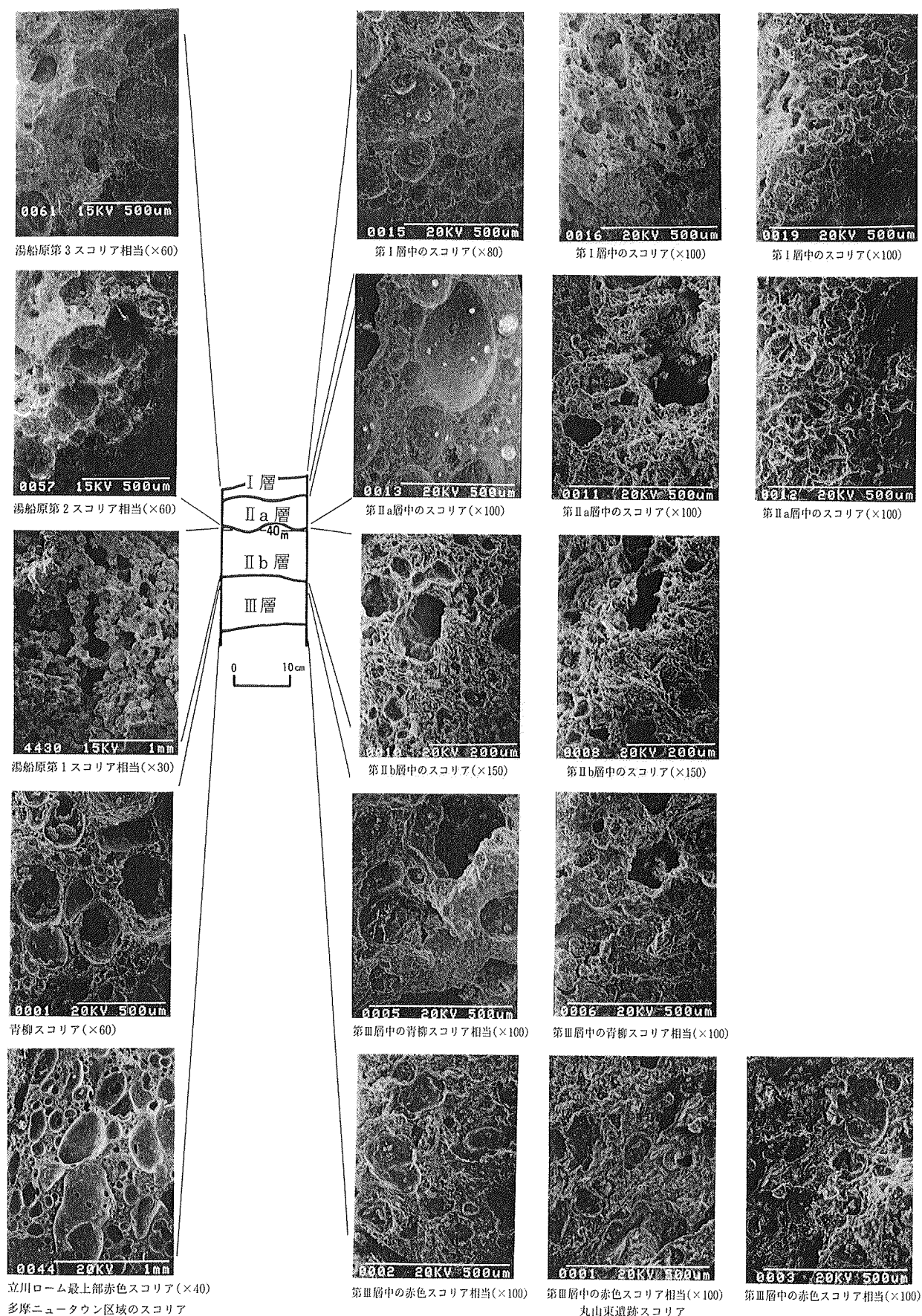


3 A97(39,32)東壁土壌の一次鉱物組成

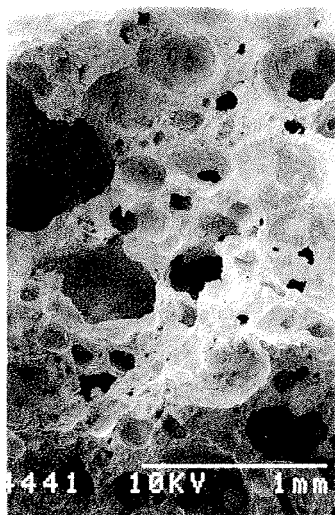


Ol:K 橄欖石 Hyp:紫蘇輝石 Au:普通輝石 Ho:角閃石 Mag:磁鉄鉱 Biot:黒雲母
Sc:スコリア V.G.S:火山ガラス(スポンジ状型) V.G.B(BW型) P.O.:植物残骸

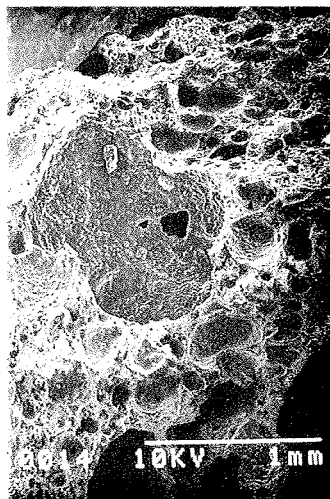
第2図 府中市武蔵国分寺関連遺跡（武蔵台西地区）における
立川ローム層の一次鉱物組成（上條 2004）



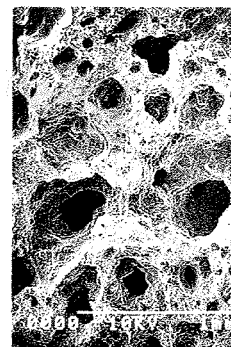
第3図 多摩ニュータウン地域と丸山東遺跡にみられるスコリアの形態（上條 2000）



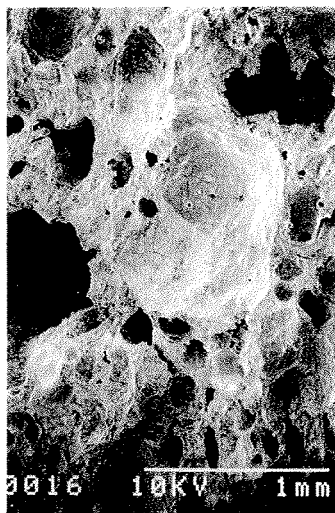
1 富士山東方地域
(Y-141a)



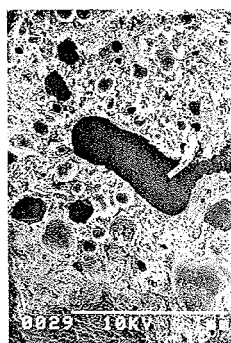
4 No.740 遺跡
青柳スコリア



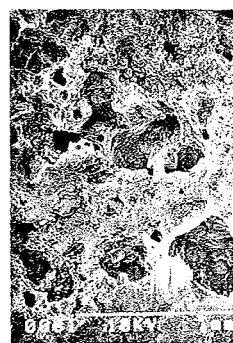
5 No.740 遺跡
赤色スコリア 2



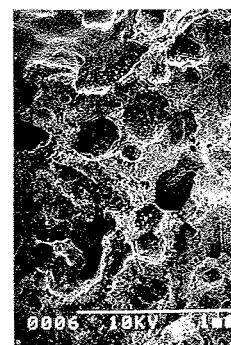
2 富士山東方地域
(Y-140)



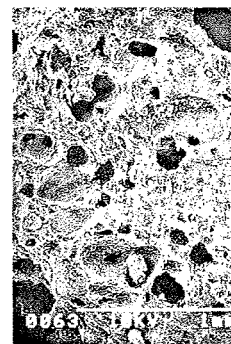
7 No.740 遺跡
赤色スコリア 6



8 No.740 遺跡
赤色スコリア
(B.B.1)



6 No.740 遺跡
赤色スコリア 5



10 No.740 遺跡
赤色スコリア
A.T. 直下



3 富士山東方地域
(Y-139b)

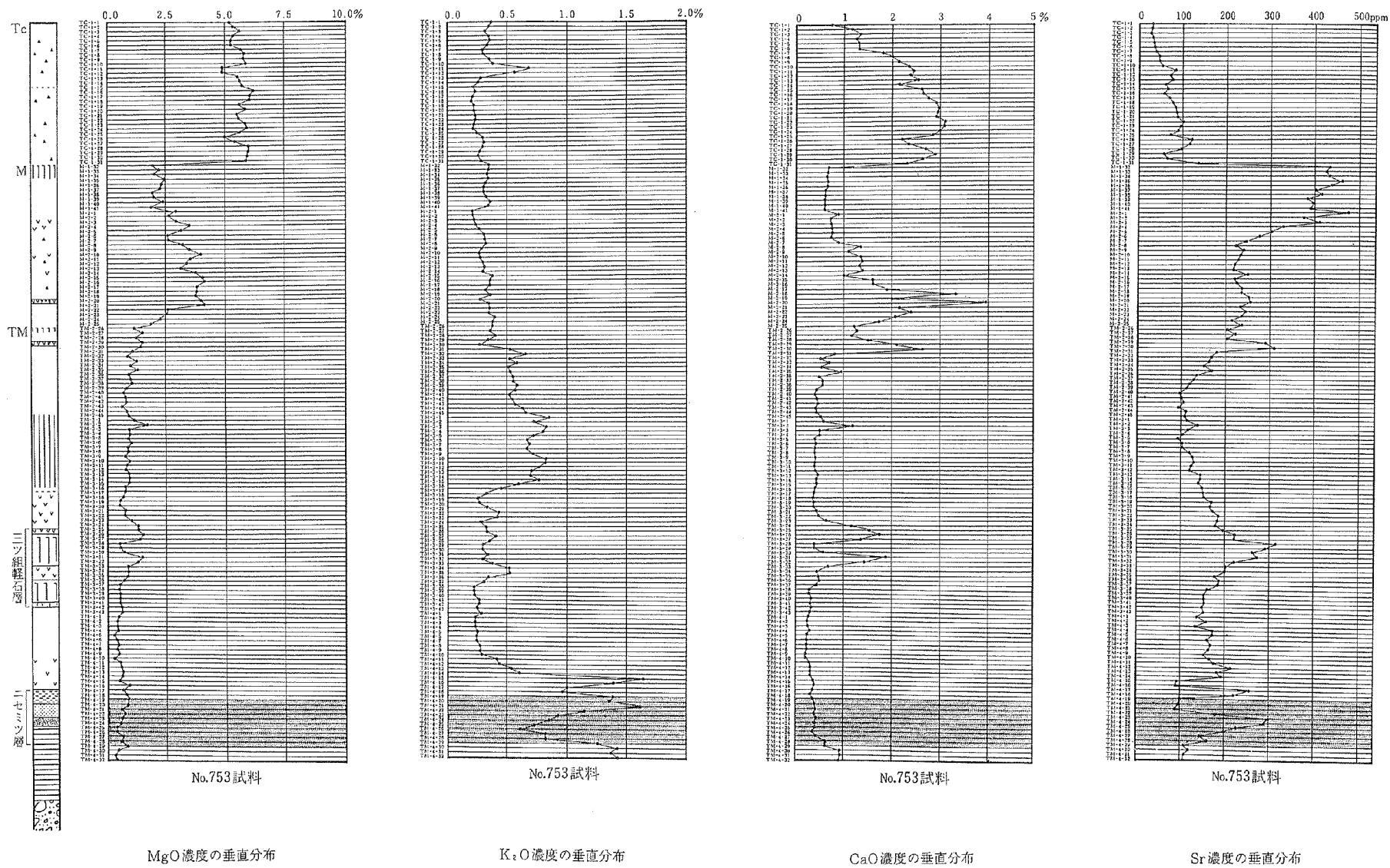


9 No.740 遺跡
赤色スコリア
(立川最上部)

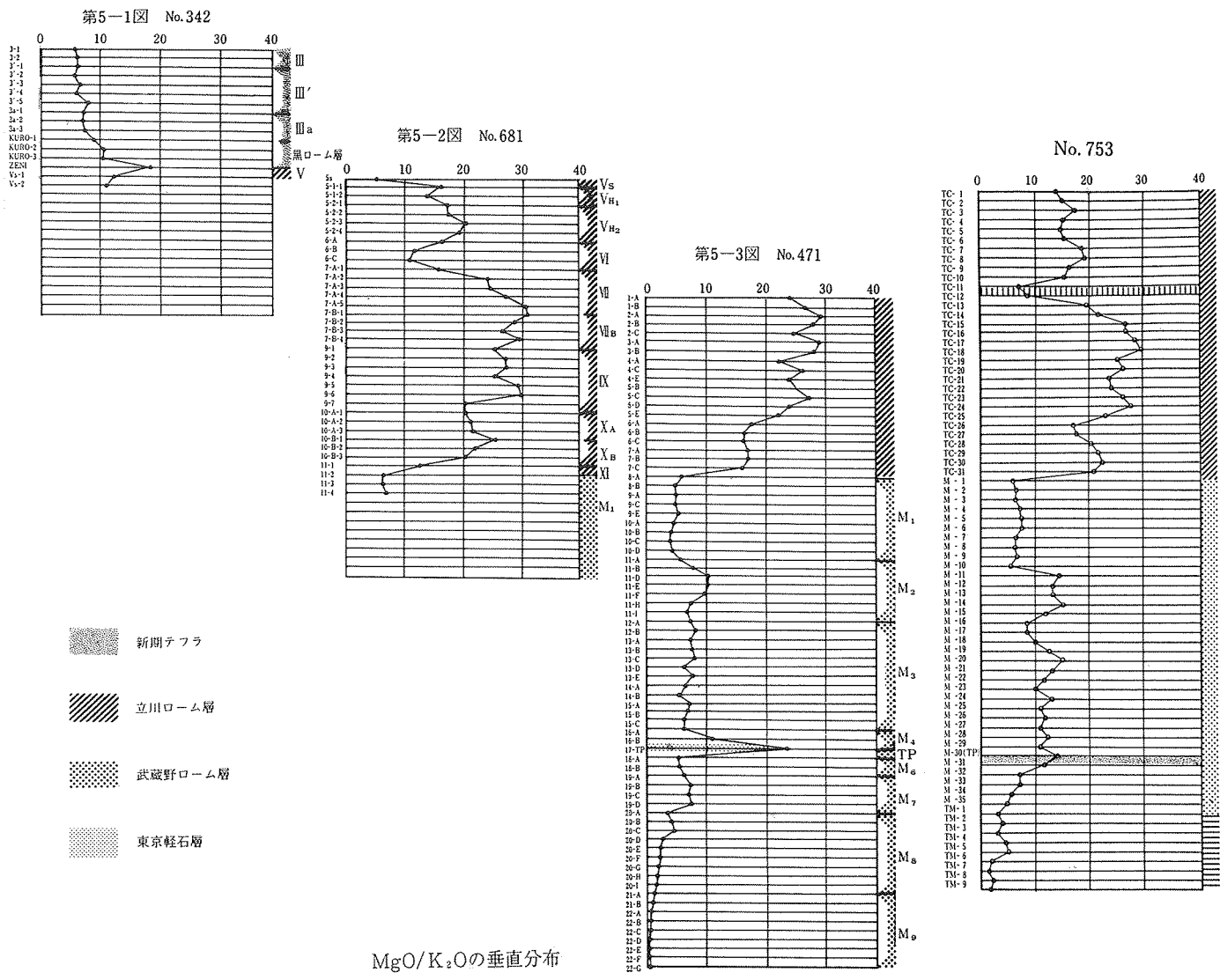


11 No.740 遺跡
赤色スコリア
(B.B.2)

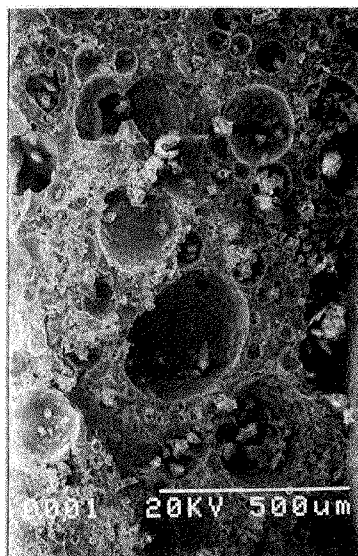
第4図 富士山東方地域と多摩ニュータウンNo.740遺跡の更新世のスコリア形態 (上條 2006)



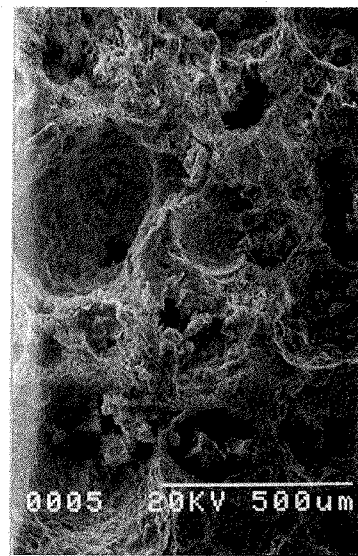
第5図 永塚澄子他（1992）「多摩ニュータウンNo.248遺跡の粘土採掘坑の層位について」
『研究論集IX』



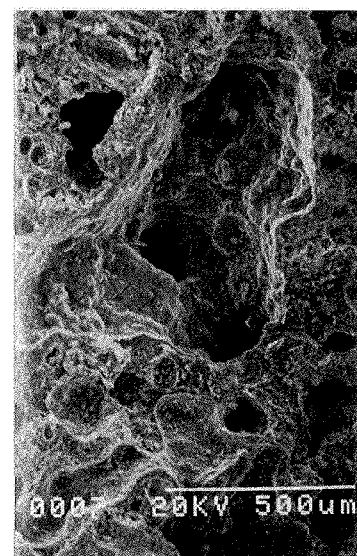
第6図 蛍光X線分析による関東ローム層の土壌分析
永塚澄子他（1991）研究論文IX



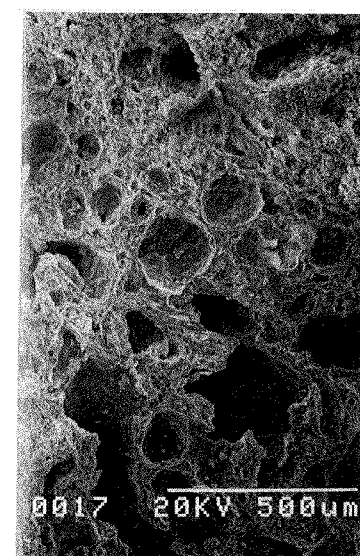
5s 赤スコ



5-1-1 赤スコ



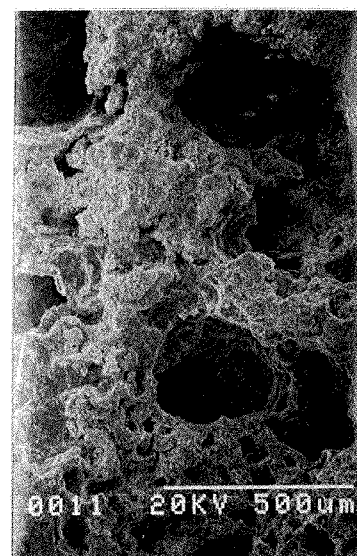
5-2-1 赤スコ



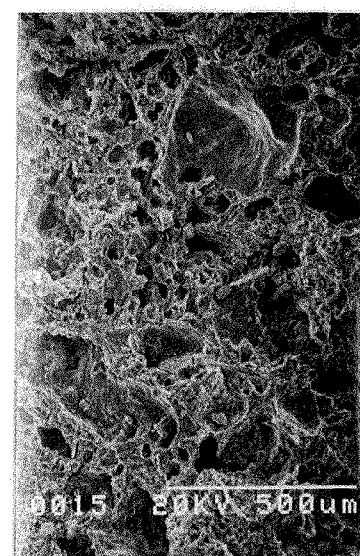
5-2-2 赤スコ



5-1-1 黒スコ

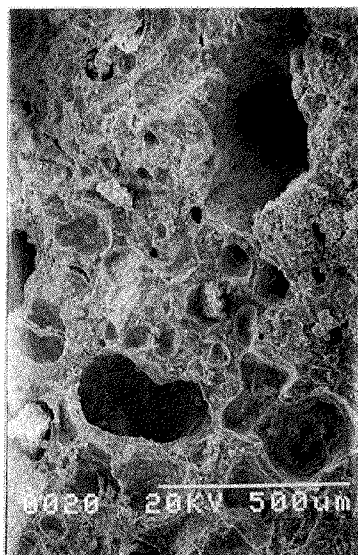


5-2-1 黒スコ

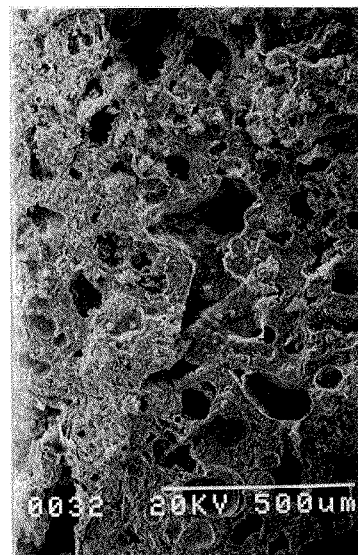


5-2-2 黒スコ

第7図1 No.68遺跡立川ローム層スコリアのSEM係



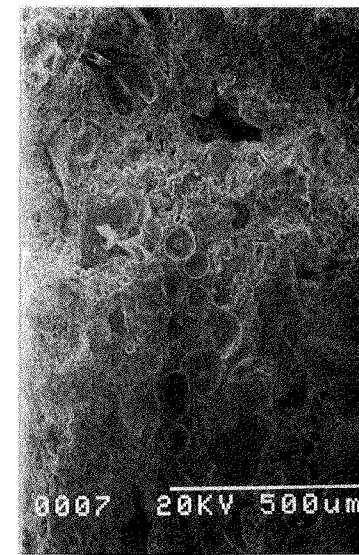
5-2-3 赤スコ



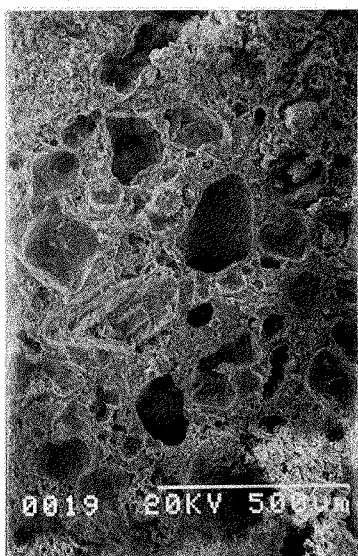
5-2-4 赤スコ



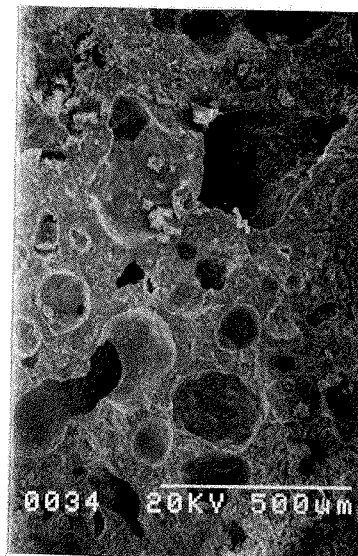
6-A 赤スコ



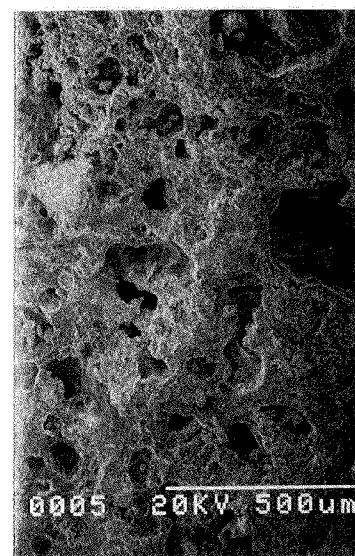
6-A 赤スコ



5-2-3 黒スコ



5-2-4 黒スコ

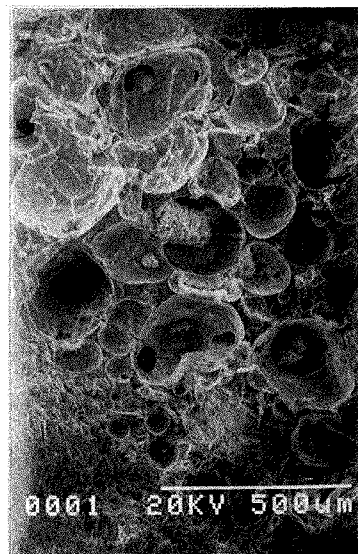


6-A 黒スコ

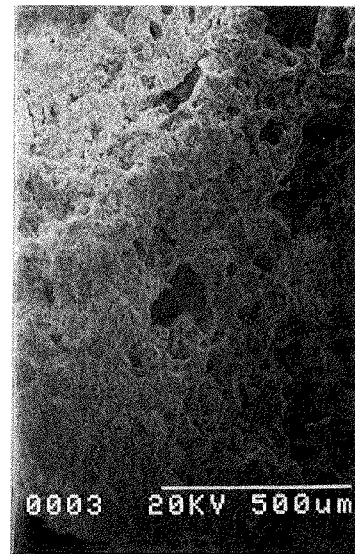
第7図2 No.68遺跡立川ローム層スコリアのSEM係



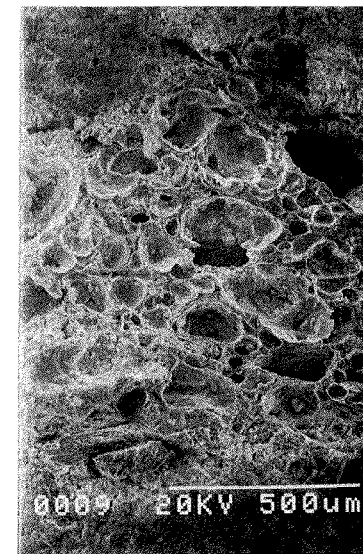
6-B 赤スコ



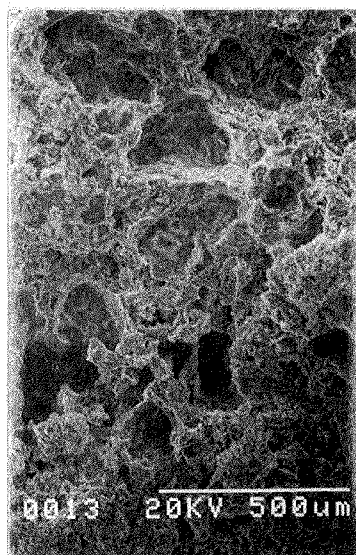
6-C 赤スコ



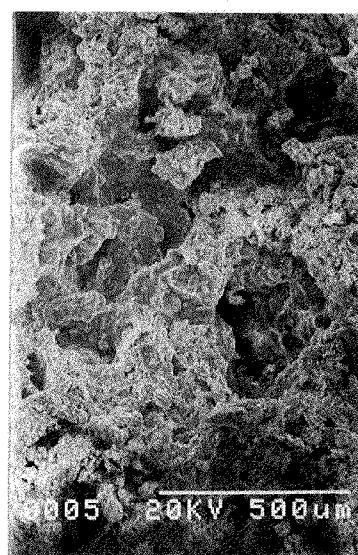
6-C 赤スコ



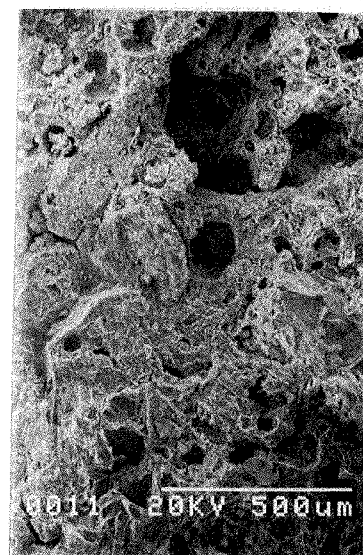
7-A-1 赤スコ



6-B 黒スコ



6-C 黒スコ

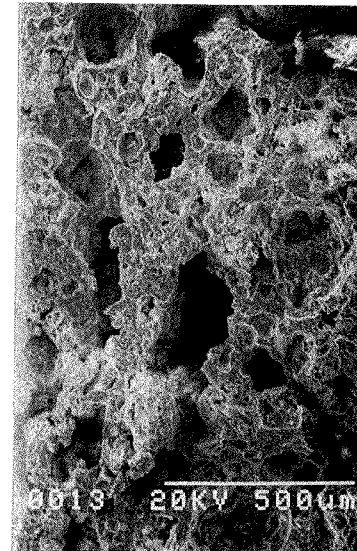


7-A-1 黒スコ

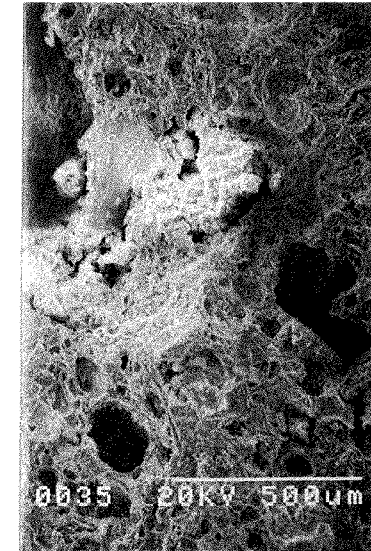
第7図3 No.68遺跡立川ローム層スコリアのSEM係



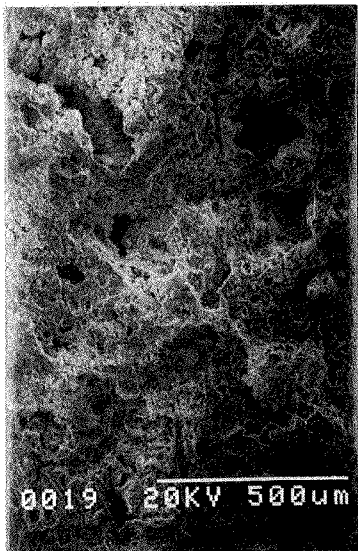
7-A-2赤スコ



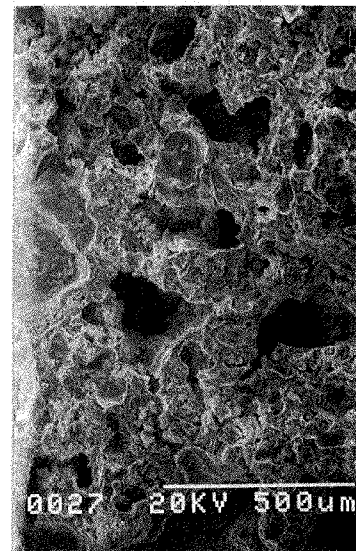
7-A-4赤スコ



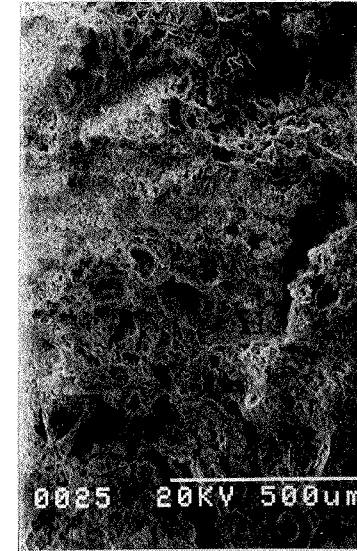
7-A-5赤スコ



7-A-2黒スコ

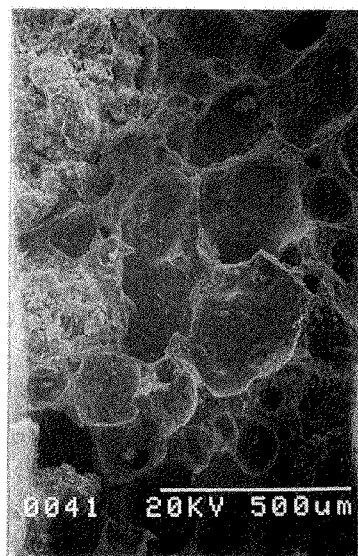


7-A-3黒スコ



7-A-4黒スコ

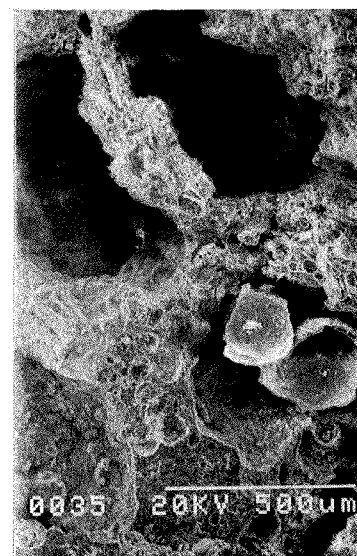
第7図4 No.68遺跡立川ローム層スコリアのSEM係



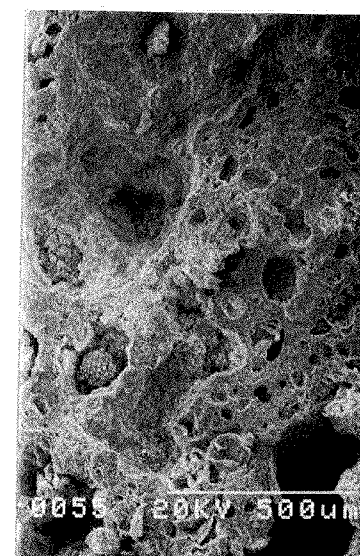
7-B-1 赤スコ



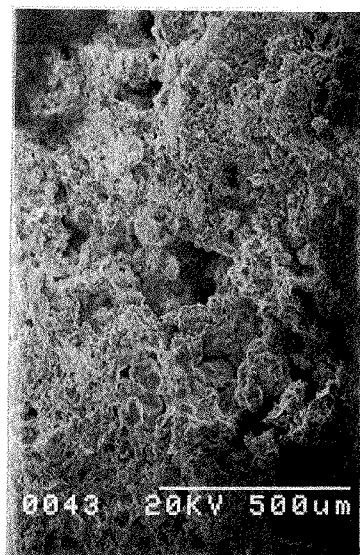
7-B-2 赤スコ



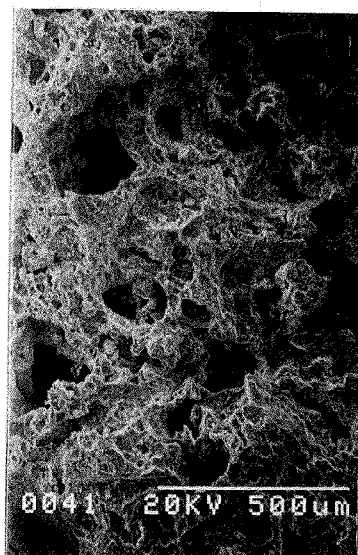
7-B-3 赤スコ



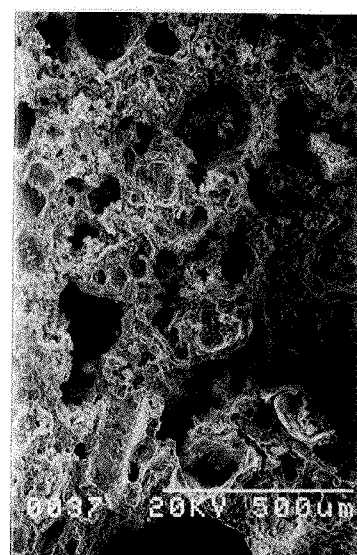
7-B-4 赤スコ



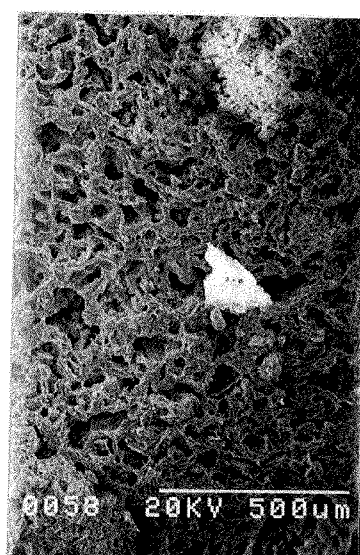
7-B-1 黒スコ



7-B-2 黒スコ

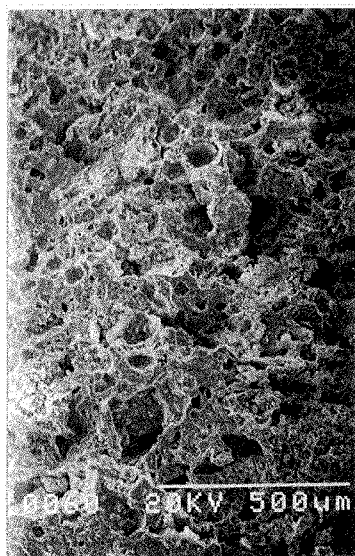


7-B-3 黒スコ



7-B-4 黒スコ

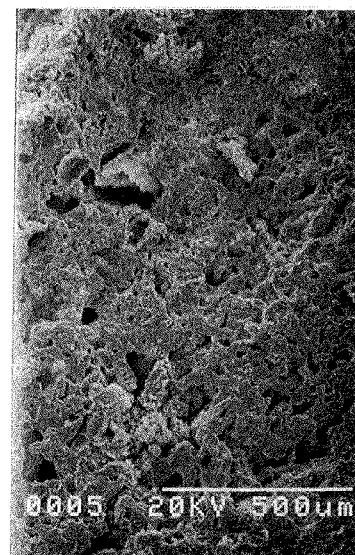
第7図5 No.68遺跡立川ローム層スコリアのSEM係



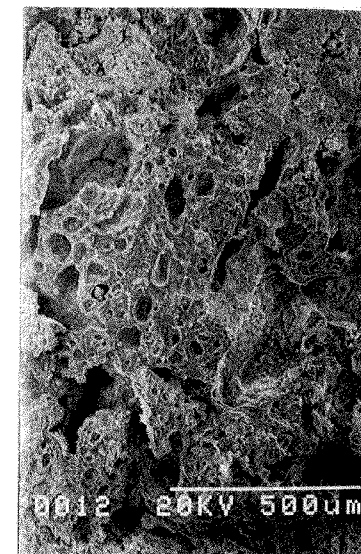
9-1 赤スコ



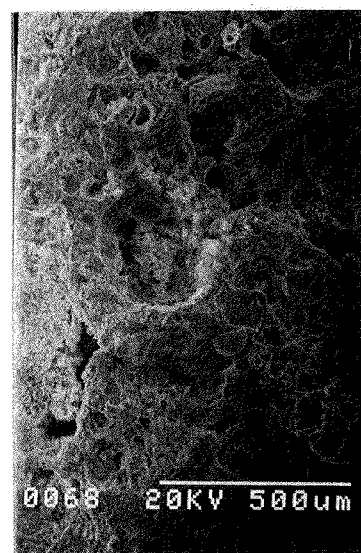
9-2 赤スコ



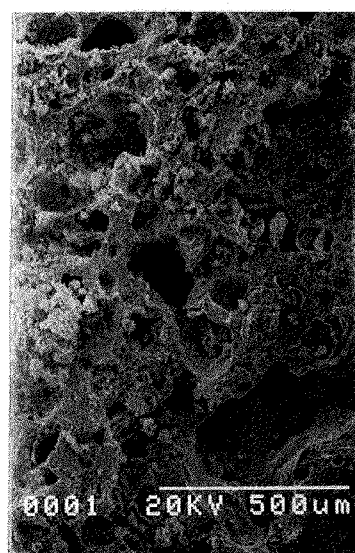
9-3 赤スコ



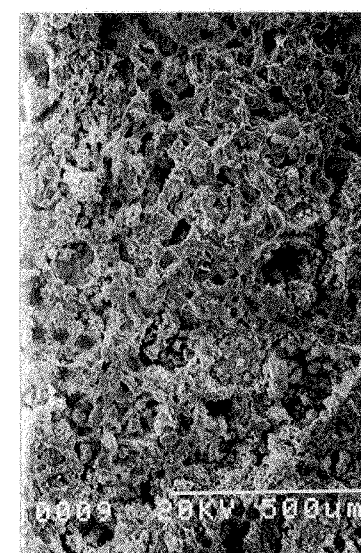
9-4 赤スコ



9-2 黒スコ

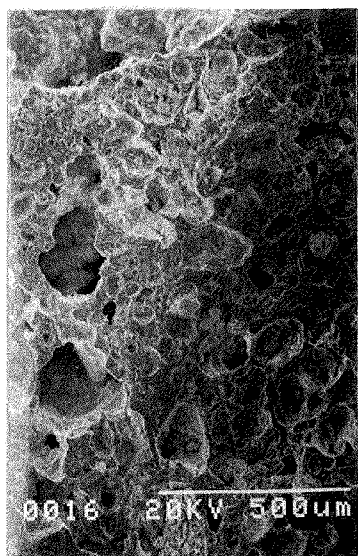


9-3 黒スコ

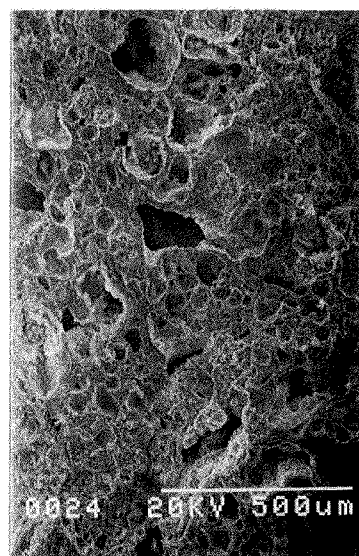


9-4 黒スコ

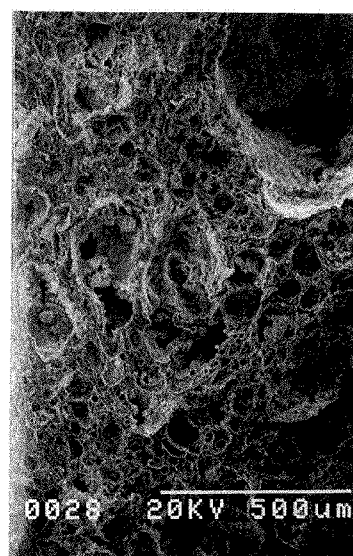
第7図6 No.68遺跡立川ローム層スコリアのSEM係



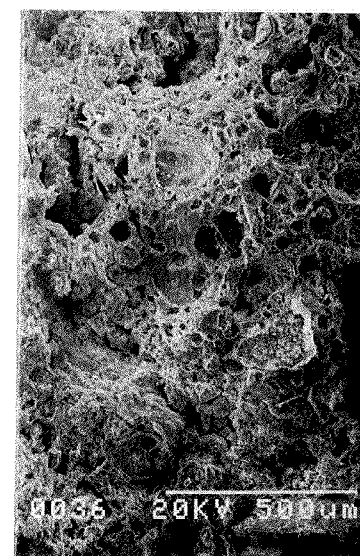
9-5 赤スコ



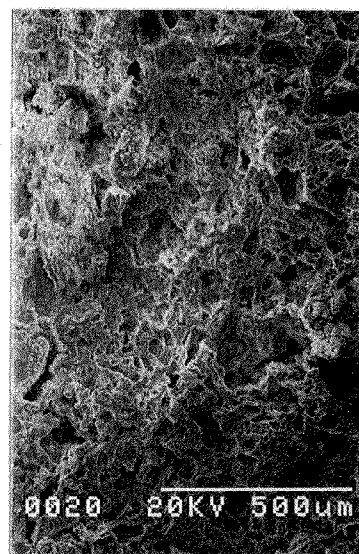
9-6 赤スコ



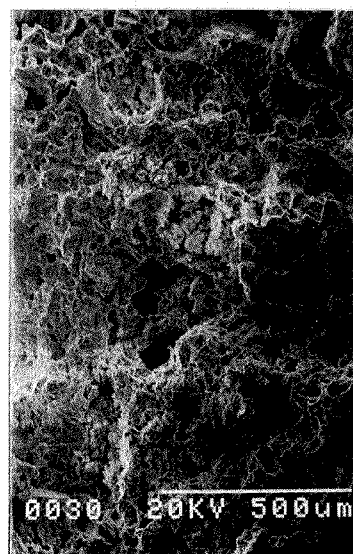
9-7 赤スコ



10-A-1 赤スコ

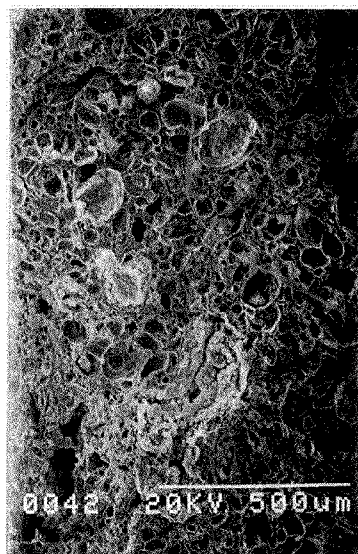


9-6 黒スコ

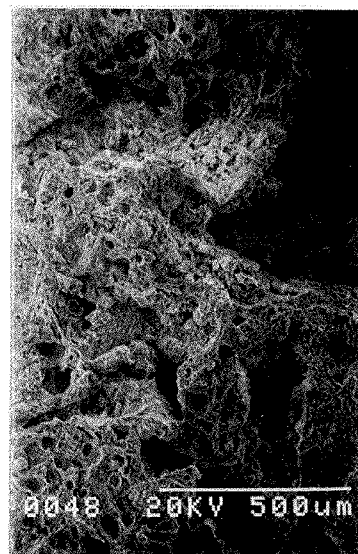


9-7 黒スコ

第7図7 No.68遺跡立川ローム層スコリアのSEM係



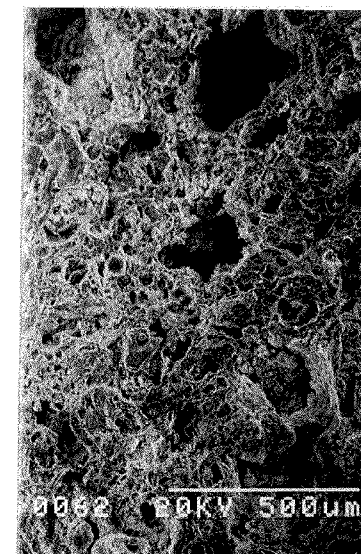
10-A-2赤スコ



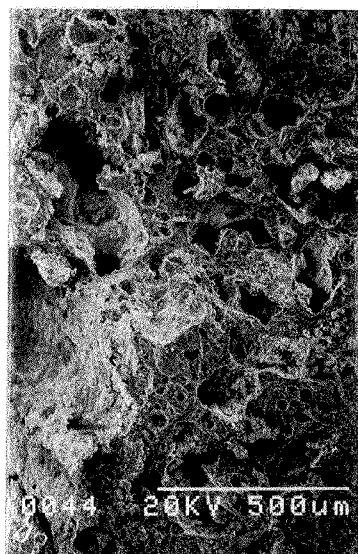
10-A-3赤スコ



10-B-1赤スコ

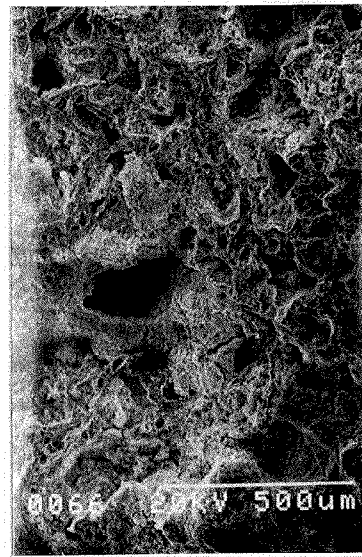


10-B-2赤スコ

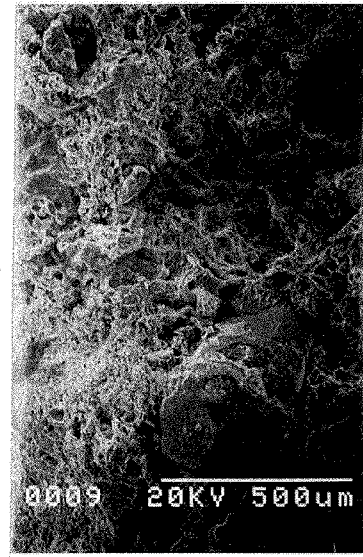


10-A-3黒スコ

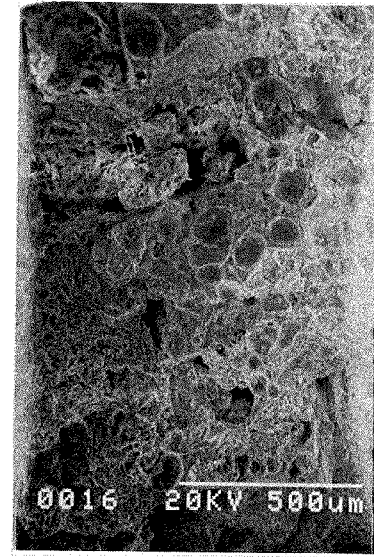
第7図8 No.68遺跡立川ローム層スコリアのSEM係



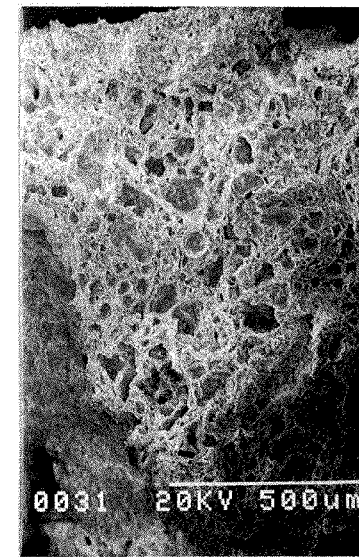
10-B-3 赤スコ



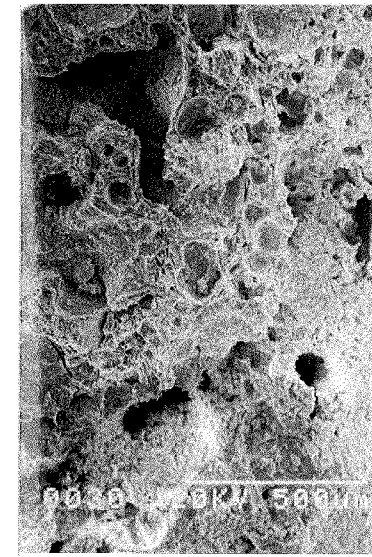
11-1 赤スコ



11-2 赤スコ



11-3 赤スコ



11-4 赤スコ

第7図9 No.68遺跡立川ローム層スコリアのSEM係

立川ローム層中に残された考古遺物の時間的位置づけ —文化層分離における諸問題について—

藤田健一

はじめに

先土器時代の編年研究において、あるいは型式論の深化の主たる前提条件として、「複数文化層遺跡」がもたらした成果はおおきい。層位累重の法則、層位同定の法則を論拠とした石器群の時空間への位置付けは、型式論における論理性・整合性の追及とともに車の両輪となり、先土器時代研究の展開、編年の細分を支えてきた。そして一遺跡内における文化層の重畳事例が、編年案に絶対的な信頼性を付加したかのように思える。しかしながら内実はどうであろうか。個々の場面に際し、編年観が重複する石器群の区分を行い、また一方でそのように区分された石器群が編年観をより強固にする、「螺旋状の論理」が展開されているようにも見受けられる。本論では、実際に復元、検証可能な一遺跡を具体例として挙げ、そこから導かれる問題点を提示したい。

複数文化層遺跡について

研究初期にはわずかではあるが、群馬県岩宿遺跡など複数の文化層を持つ遺跡の報告がある（杉原 1956 など）。これ以後、複数文化層の報告例が増加するのは神奈川県月見野遺跡群（明治大学考古学研究室・月見野遺跡調査団編 1969）および東京都野川遺跡（小林ほか 1971）の調査以降、すなわち 1970 年代以降のことである。いわゆる“月見野・野川以後”、この類の遺跡は枚挙にいとまない。

さて、近年、複数文化層遺跡における文化層の分離作業、およびその報告方法についての諸問題は五十嵐彰の指摘にあるとおりである（五十嵐 1999）。たしかに資料操作の意図や過程が不明瞭であるばかりでなく、追って検証できない報告形態が実に多い。

そこでこのような状況を踏まえ、近接するブロックに富む複数文化層遺跡で、かつ報告書から遺跡のあり方の復元が比較的容易なものから、学史的にも著名な東京都多聞寺前遺跡（戸沢・鶴丸 1983）を事例として、本論を進めたい。

多聞寺前遺跡の事例報告

多聞寺前遺跡は東京都東久留米市南沢 1-15, 16 に所在する。武蔵野台地のほぼ中央部に位置する同遺跡は、目黒川の支流である落合川右岸の段丘上に立地する。先土器時代の生活痕跡は 5 つの時期に区分されている。すなわち、IV_上文化層、IV_中文化層、IV_下文化層、VII 層文化層、IX 層文化層である。概要は次の通りである。

《IV_上文化層》 石器、礫を含め遺物総数が約 8,000 点、ブロック 15 箇所、礫群・配石 19 基を数える。石器群は、黒曜石を主体とするナイフ形石器終末期石器群のブロックと、ホルンフェルス製の両面調整を主とする尖頭器を持つブロックに大別される。報告文ではこ

これらの時間的な先後関係を示唆している。

ブロック内の垂直遺物分布状況は、波状を呈するⅢ層とⅣ層の境界部付近にピークをもつものの、明らかにⅣ層中部にくい込む分布も見取れ（第1図2）、また上下の分布幅が1m近いブロックも確認できる（第1図1）。礫群は概ね波状帯か、それよりもやや上位に位置している（第2図1、2）。

《Ⅳ_中文化層》 遺物総数約1,000点、ブロック12箇所、礫群・配石9基を数える。石器群は伴うナイフ形石器の形態から、「Ⅳ_中1」と「Ⅳ_中2」に区分され、前者は「Ⅳ_上的」、後者は「Ⅳ_下的」な顔付きを見せる、という。これらは、先後関係をもつものとして捉えられている。

ブロック内の垂直遺物分布状況は、Ⅲ層からⅣ層の中位にまで分布し、Ⅳ層のほぼ中間部にピークがくるものが見受けられる（第1図3）。一方では、ピークは波状帯直下に位置するもの（第1図4）もある。礫群はⅣ層の中位で安定する傾向があるが（第2図3）、配石は波状帯の直下で安定するものが多い（第2図4）。

《Ⅳ_下文化層》 遺物総数約300点、ブロック2箇所、礫群3基を数える。帰属するとされる「切出形石器」、「角錐状石器」の多くは単独出土である。

比較的規模の大きなブロックの垂直分布は安定しているようにも思われるが（第1図5）、Ⅴ層～Ⅵ層から出土しているように読み取れるもの（第1図6）もある。また、礫群はⅣ層下部で比較的安定して出土したようだが、添えられた模式柱状図からは、Ⅳ層はきわめて薄いことが推測される（第2図5）。なかにはⅢ層下底の波状帯がⅤ層に達するものもある（第2図6）。これは、Ⅳ_下文化層の礫群が「緩斜部の北側縁辺」に位置するためであろう。

《Ⅶ文化層》 遺物総数約850点、ブロック7箇所、礫群・配石8基を数える。散漫に分布する石器はⅤ層からⅦ層下部まで分布するが、ピークは礫群共々はⅦ層下部で安定している（第1図7）。礫群もⅦ層の下部で安定して検出されている（第2図7）。

《Ⅸ文化層》 遺物総数約900点、ブロック18箇所、礫群・配石は構成しない。石器集中部は散漫であり、Ⅸ層中部以上、あるいはⅨ層下部にピークを持つ垂直分布が読み取れる（第1図8）。上下幅があるところは、遺物の垂直分布がⅤ層以上に多くの遺物が食い込んでいる。

多聞寺前遺跡の諸問題

上述の石器群を、文化層ごとに遺物の分布の上下幅や生活面（出土位置のピーク）の在り方で比較するとそれぞれに異なる特徴を示す。

まずⅣ層であるが、Ⅳ_上文化層とⅣ_中文化層の石器の垂直分布を重ねてみると、明確に上下差が認められないものがみられる（第1図参照）。一方で礫群・配石は、個々の事例に関しては上下幅も少なく、安定して出土している。しかし、文化層という枠組みから文化層の幅を比較した場合は、石器集中部と同様に明瞭な上下幅を持つものではない（第2図参

照)。石器群と礫群を合わせて比較した場合はなおさらである。

IV_下文化層については、緩斜部に立地するということから、文化層分離においては堆積状況に難がある。礫群はたしかにV層のすぐ上で検出しているようだが、そもそもIV層が薄いのであれば話は別である。また、帰属するとされる「切出形石器」は単独出土であり、本来的にはどの層位に帰属するものなのか、といった疑問が残る。

共通して言えるのは、これらが“型式観”に強く基づいた分類であるということである。石器群に伴うナイフ形石器の形態差を論拠としたIV_中文化層の時間的細分では、報告書中で、「出土層位をもって一律に石器群の時間的前後関係を決定することの危険性を示す好例」であるとし、時間的に違う複数の遺物分布が同一レベルで出土することに注意を促している。あたかもすでに判明し、確定された時空間の単位があらかじめ存在し、それに投影しているかのようであり、その単位こそが“型式観”であろう。ではなぜ、IV_上文化層に複数の時間があることについては、示唆するのみに留まったのであろうか。また「IV_下的」であるIV_中2文化層とIV_下文化層との関係については報告者が言及すべきであろう。これらが問題であるのは、準拠する編年観が不明瞭な点であるとも言える。

五十嵐は、「文化層」の記載に際に、「検出され」「発見され」「確認され」といった「本来隠れていた何かが姿を現したときに用いる動詞」を多用する現状を批判する（五十嵐2000）。言葉尻をとらえたかのような指摘であるが、言葉が認識の道具でもある限り、意識的あるいは無意識的に使用者の認識を示すものと言える。多くの報告書は結論として「文化層」がそもそも存在していたかのように扱っており、これが意図するところではないのであれば、五十嵐の指摘は、研究者の無意識な思考、動作を批判するものである。多聞寺前遺跡における諸問題も根本は同じであるのではなかろうか。

さて、これらIV層の遺物における文化層区分に困難をきたすもうひとつの要因として、遺物の上下拡散の程度が集中部毎に違うという現象が挙げられる。

AT 下位のふたつの文化層の在り方をみると、両者は対照的ともいえる在り方を示している。すなわちVII層文化層はVII層下部で比較的安定しているのに対し、IX層文化層は遺物の上下拡散が激しい。これらの文化層設定は妥当なものと考えるが、この出土状況の差異はいったい何に所以するものであろうか。

課題と展望

多聞寺前遺跡における諸問題は、複数文化層を有する遺跡の理解へ次のふたつの課題を投げかける。まずひとつ、文化層区分の方法論そのものの問題である。先に「螺旋状の論理」と述べた層位と編年の関係は、言うまでもなく層位的出土事例が先行する。ゆえに、前提（編年観）に囚われない資料操作を行ったのちに、既成事実の真偽を問う作業（編年研究）が必要となる。その際には、土壌の堆積状況や旧地表の微細な起伏をも考慮した繊細な作業が求められる。

そしてもうひとつ、遺物分布の在り方そのものの検討である。すなわち、「なぜそこに“在

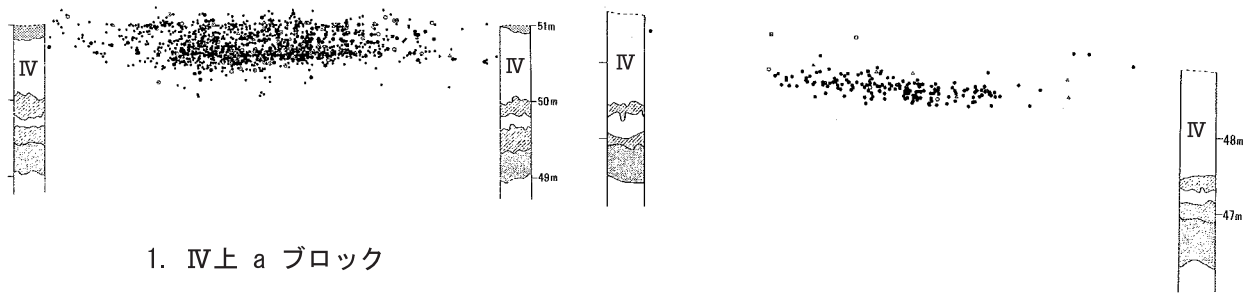
る”のか」あるいは「“無い”のか」ではなく、「なぜ“そのように在る”のか」を問わねばならない。遺物の拡散の問題については、ジオアーケオロジー調査方法の確立を念頭に置いた試みがある（野口・林 2006）。ここで野口 淳は遺物分布の在り方から「過去の人類活動」を読み取る為に「自然営力の変形」などの多様な二次的変形を考慮する必要性を説いている。同じく林 和広は、遺物の垂直分布状況は遺物重量や表面積のみならず遺物支持層の自然形成過程に左右される可能性を指摘する。つまりはひとつの事例をすぐさま汎用することについては否定的な立場をとらざるを得ないのである。

おわりに

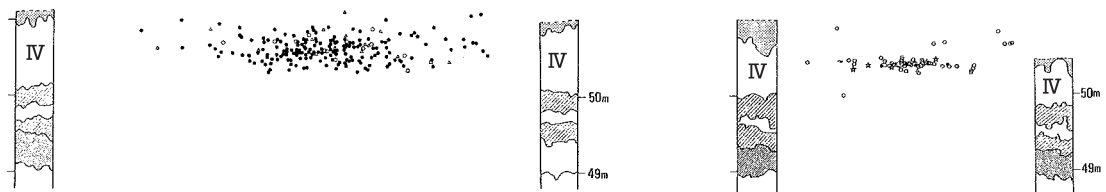
着実に更新される研究成果は研究者の認識を改め、また新たな問題を提起してきた。そして今日も、先土器時代資料の検出は増加の途をたどる。この状況下で我々は、過去に発掘された資料を、今後も生きたものとして用いるために、考古学の深化のために、新たな資料に目を向けるのみではなく、過去の成果の評価を常に行わなければならない。多角的な視点から「遺跡構造論」の展開を試みるなど、多聞寺前遺跡報告文の功績は多大なものである。すでに行われたこの“実験”を、未来に向けて如何に焼き直すか、先学の恩恵にあずかる者の義務でもある。いまいちど研究の前提条件と、真摯に向き合う必要を感じた。

主要引用参考文献

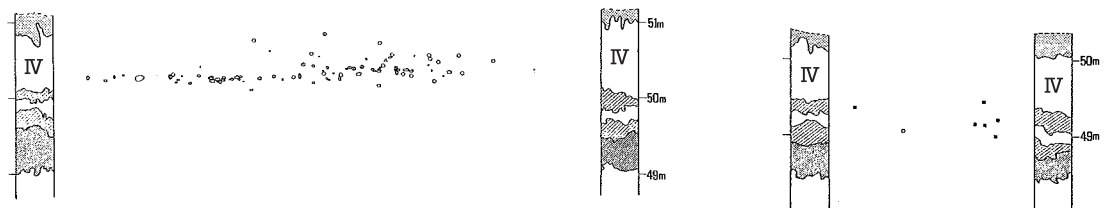
- 五十嵐章 1999「旧石器資料報告の現状(I)-坂下遺跡の分析を中心として-」『東京考古』17 東京考古談話会
- 五十嵐章 2000「『文化層』概念の検討-旧石器資料報告の現状(II)-」『旧石器考古学』60 旧石器考古談話会
- 栗島義明 1983「ブロックの構成と機能-個別別資料からみたブロックのあり方」『多聞寺前遺跡 II』 多聞寺前遺跡調査会
- 栗原伸好 1999「層位論」『石器文化研究』7 石器文化研究会
- 小林達雄・小田静夫・鳥羽謙三・鈴木正男 1971「野川先土器時代遺跡の研究」『第四紀研究』10-4 日本第四紀学会
- 杉原荘介 1956『群馬県岩宿発見の石器文化』明治大学文学部考古学研究報告 1 明治大学文学部考古学研究室
- 鈴木次郎 1999「編年論」『石器文化研究』7 石器文化研究会
- 戸沢充則・鶴丸俊明編 1983『多聞寺前遺跡 II』 多聞寺前遺跡調査会
- 鶴丸俊明 1983「ブロック-その厚さの意味の検討-」『多聞寺前遺跡 II』 多聞寺前遺跡調査会
- 野口 淳・林 和広 2006「明治大学調布付属校用地の遺跡（仮称）における遺跡形成過程の研究-ジオアーケオロジー調査方法の確立に向けて」『明治大学校地内遺跡調査団年報』3 明治大学校地内遺跡調査団
- 明治大学考古学研究室・月見野遺跡調査団編 1969『概報 月見野遺跡群』 明治大学考古学研究室



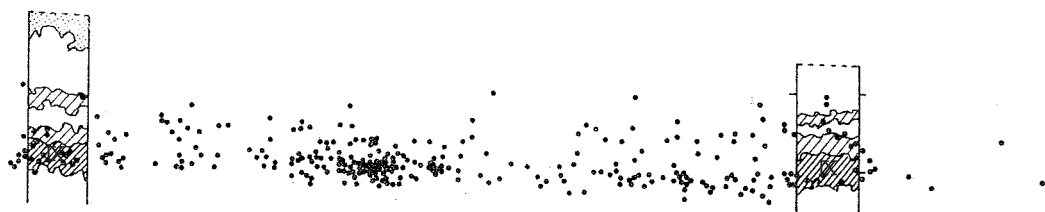
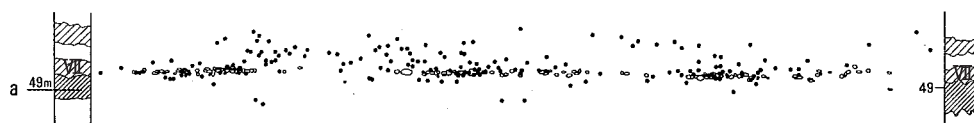
2. IV上 e ブロック



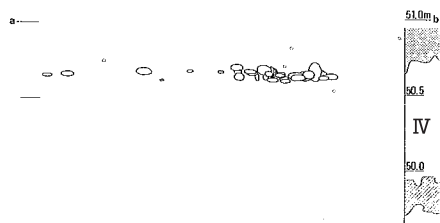
4. IV中 h ブロック



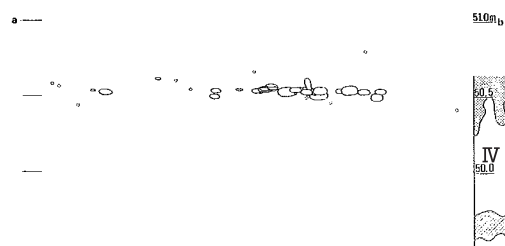
6. IV下 b ブロック



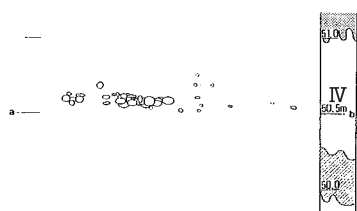
第1図 多聞寺前遺跡における石器集中部の垂直分布図 (S=1/100)



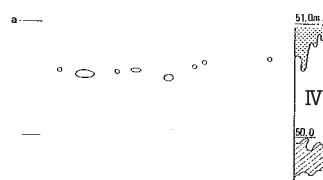
1. IV上 b 礫群



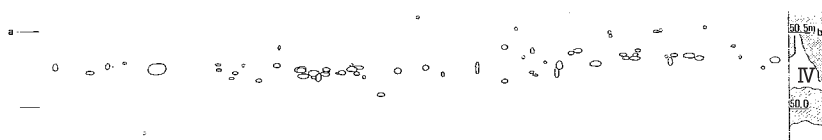
2. IV上 d 礫群



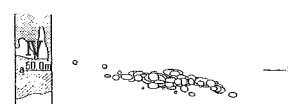
3. IV中 d 礫群



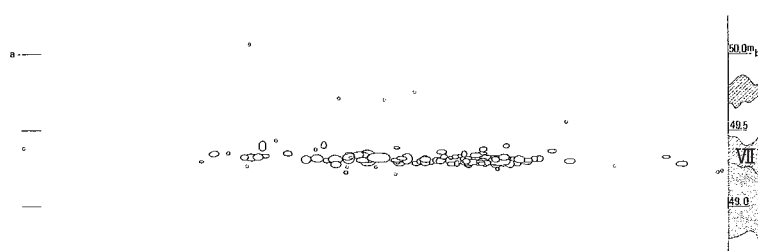
4. IV中 c 配石



5. IV下 a 礫群



6. IV下 b 礫群



7. VII a 礫群

第2図 多聞寺前遺跡における礫群・配石の垂直分布図 (S=1/50)

後期旧石器時代後半期、武蔵野編年に関する諸問題
—石神井川流域遺跡群を例として—

飯田茂雄

はじめに

後期旧石器時代の日本列島における時間的変遷を捉えようとしたとき、武蔵野台地は格好のフィールドとして、研究材料を提供してきたと言える。台地に厚く堆積した降下火山灰である立川ローム層は、そこに包含された石器群の層位的先後関係を裏づけ、さらに遺跡間での比較を可能とした。特に 1969 年に行われた野川遺跡の調査（小田・小林ほか 1971）を端緒とした編年研究では、その後、野川流域の諸遺跡の層位的事例の蓄積を背景として、小田静夫氏とキーリー氏によって武蔵野編年として結実している（小田・キーリー 1973、小田 1980 など）。その編年研究は、相模野編年（鈴木・矢島 1978、諏訪間 1988 など）とともに、全国編年の基準となってきた。

「武蔵野台地」というような地理的範囲での変遷を捉える上では、「層位的先後関係」をもとに剥片剥離技術あるいは石器形態の漸移的变化を想定し、編年をより強固にする方式は有効であると考えられてきた。しかし、近年では、武蔵野台地においても野川流域とは異なる立川ローム層の堆積環境、あるいは地形の形成があったことが明らかになりつつある（野口 1997 など）。また、地理的・空間的に隔たれた遺跡・石器群を比較する際に、分析単位となる資料群を抽出する作業が、より慎重におこなわれる必要があるのではないかと提起されている（五十嵐 1999・2000、野口 2005 など）。そこでまず初めに、武蔵野編年とその基礎になった野川遺跡についてみていきたいと思う。

1. 野川遺跡と武蔵野編年

野川遺跡は、武蔵野台地の南側にある野川右岸の立川面上に位置しており、周辺には武蔵野公園遺跡（小田・キーリー前掲）・新橋遺跡（中津ほか 1977）といった、学史上著名な遺跡が数多く分布している。

遺跡では、およそ 3m にわたる立川ローム層の堆積があり、土層の観察から 10 層に区分されている（図 1）。こうした土層区分は、現在武蔵野台地の標準土層として広く知られているところである。その立川ローム層からは、層位的に重なりあう石器群が出土し、計 10 枚の文化層が設定されている。基本的には 1 層序区分に対し、1 文化層が設定されているが、IV 層については層序区分・文化層双方が細分されている。詳しく見ると、土層区分については、IVa 層から IVc 層に 3 区分され、そこに包含されている文化層については、IV 1 文化層から IV 4 文化層というふうに 4 区分されている。さらに、IV 3 文化層は石器組成の差異から、IV 3a と IV 3b とに細分され、IV 層には都合 5 文化層が設定されている。つまりここでは、層序区分と石器文化層が一致する例と、一致しない例が示される。特に IV 層に顕著なように、両者の対応関係は当初から 1 対 1 対応ではなく、層（文化層）の細分化といった方向性を含んでいたといえる。

武蔵野編年は、こうした遺跡での層位的出土事例の蓄積によって形成されていく過程で、修正・改訂を行っていくが（小田・キーリー1973、小田 1976 など）、その基本的方針は、野川遺跡例の検証という側面があったといえる。野川遺跡に続けて行われた野川流域諸遺跡の調査・報告では、野川遺跡との比較検討が行われ、武蔵野編年が補強されていった。ただ、野川遺跡のⅣ層と文化層の対比でみたように、層位と石器どちらが編年を行う際に有意に働いていたかには注意を必要とする。少なくとも武蔵野編年は、一遺跡での重複する文化層（層位的先後関係）によって保障された変遷観であり、それを担保していたのはローム層の層厚ということになる。

そこで本報告では、武蔵野台地における後期旧石器時代石器群の編年、武蔵野編年の再検討をおこなうための基礎的な作業として、武蔵野台地の北東部にある石神井川流域に分布する遺跡を取り上げてみたい。

2. 武蔵野編年の概要と問題

まず、武蔵野編年の概要です。今回取り上げる武蔵野編年Ⅱ期（以下、とくに記載のない場合は武蔵野編年を指す）は、おおよそ立川ローム層のⅤ層上部からⅢ層下部にかけて出土するとされている。

このⅡ期は、ナイフ形石器の製作技術上の差異からⅡa期とⅡb期というように細分がなされ（小田・キーリー前掲）、それぞれⅤ層上部からⅣ層中部、Ⅳ層上部からⅢ層最下部に出土層位を持つとされている（小田 1977）。Ⅱb期については、さらにナイフ形石器の型式学的検討からⅡb期前半・後半というように細分されている（坂入・伊藤・織笠 1977）。そうした細分はまた、おおよそⅣ層中部とⅣ層上部というように、出土層位差に還元できるだろうと指摘された。

このように、野川遺跡での調査においては捉えきれなかった、立川ローム層と石器文化層の対応関係は、野川流域の諸遺跡の成果—各出土層位ごとのナイフ形石器型式や、器種組成、剥片剥離技術、石材組成など—を整理することで明らかにされ、その間隙は埋められていったといえる。各遺跡での事例をつなぎ合わせ総合化する過程で、一旦「層位的事例」と認められた細別時期と細別層位との関係は、「遺跡」を越えて敷衍化していった。こうした状況は、特に野川流域と比較して立川ローム層の堆積の薄い台地北部から東部にかけての調査・報告においては顕著だったといえる。

しかし、本来こうした地域では、特に細分化された編年案を裏付ける「層位的事例」を蓄積することが難しく、その検証という性格をほとんど有していない。そのためまずは、そうした地域の実際を見ていくことで、問題点を抽出していくこととする。

3. 石神井川流域の諸遺跡

ある特定の空間にまとまりをみせる諸遺跡は遺跡群（相模野考古学研究会 1971 など）として認識されるが、こうした見かけ上の集中は、河川という自然地理的な属性によって、何らかの有意なまとまりとしてみられてきた（稲田 1984、栗島

1987 など)。ここでは、その一例として武蔵野台地中央部を東西に流れる石神井川を取上げる。

まずは、対象とする流域遺跡の立川ローム層の層厚を示した（図 2）。

石神井川の源流部にある鈴木遺跡（鈴木遺跡調査団 1980）においては、Ⅳ層の層厚がおおよそ 1 m 近くあるが、下流部に行くにしたがい薄くなり、最終的には 20 cm、あるいは 10 cm といった具合になっていく。ただし、河川の右岸と左岸あるいは同一遺跡においても、地点によってⅣ層の層厚にばらつきが見られる場合があり一様ではない。遺跡の分布を見ると、源流部と石神井川中流域の富士見池周辺および石神井池周辺に集中しており、水環境との関連も指摘されている（国武 2001）。

さて、Ⅱ b 期とされる石器群が出土している遺跡の出土層位をみると、そのほとんどがⅢ層とされているソフトローム層から出土しており、やはり野川流域の標準的な出土層位とされたⅣ層とはズレがある。よく指摘されているように（荒井 1980 など）、そういった意味では出土層位の齟齬があると思われる。また、後述するが、Ⅱ a 期の石器群は概ねⅤ層からⅣ層の、より下位にかけて出土する。

分布図では、従来の編年観を踏襲し、石器群の内容からⅡ b 期前半と後半とに区分してプロットしている。Ⅱ b 期前半の遺跡に偏在が認められ、Ⅱ b 期後半では河川流域に分散して分布している。こうした分布状況は、武蔵野台地北部で指摘されたこととよく共通している（野口前掲）。

4. 葛原遺跡 B 地点の事例

次に、複数の石器集中部、あるいは文化層が確認されている葛原遺跡 B 地点（廣田ほか 1987）を取り上げる。

葛原遺跡は石神井川の中流部にある遺跡で、先ほどの分布図の 7 になる。この遺跡では、計 3 枚の文化層が設定されており、それぞれⅢ層下部、Ⅳ層上部、Ⅳ層下部を出土層位に持つ、第 1 文化層、第 2 文化層、第 3 文化層というようになっている。

この内、第 1 文化層と第 2 文化層がおおよそⅡ b 期（国武 2000 など）、Ⅳ層下部とされている第 3 文化層がⅡ a 期に相当する。

分布図（図 3）を見ていくと、いくつかの石器集中部については、重複しているのが分かるが、これらの帰属文化層についてはいずれも第 3 文化層と第 1 文化層、第 3 文化層と第 2 文化層というように、Ⅳ層下部の石器群と、Ⅳ層上部・Ⅲ層下部の石器群が重なって出土している場合に区分されている。それ以外にも近接した石器集中部があるが、同一文化層に帰属させているというのが実際である。報告書からは、第 1 文化層・第 2 文化層が、はっきりと有意な差をもって、層位的に区分されると認識するのは若干難しい。

いまひとつは、石器集中部の平面的な広がりをもどのように区分するかということがある。垂直方向への区分とともに、石器集中部あるいは文化層を認定する重要な問題である。

少なくとも読み取れるのは、Ⅳ層下部の石器集中部（第 3 文化層：Ⅱ a 期）と、

Ⅳ層からⅢ層（第1・2文化層：Ⅱb期）とが、層位的に分離されるだろうということである（図4）。

問題となるのは、こうした複数の石器集中部が出土する遺跡において、複数時期の石器集中部が残されている場合に、それらをどのようにして区分するかということにあるかと思われる。例えば、石器集中部ごとの主要なナイフ形石器とか石材組成、あるいは剥片剥離技術といったように、いくつかの特徴を持って時期的に区分することは可能であるかもしれないし、事実区分出来ているかどうか保証のないままに遺跡の報告がなされてきた。また、区分出来たとしても、区分されたものがどのような「単位」であるのか、それが何か分かりにくいことがある。問題は、区分されたものがはたして時期差であるのか、それとも遺跡における活動差、遺跡間変異（高倉 1999）として認識すべきなのか、一石器集中部では判断できない。また、一旦区分され、報告された「文化層」や「遺跡」そのものを再検討・再区分するだけの材料が提示されていることは稀か、あるいは非常に困難である。これは、石神井川流域に限ったことではなく、石器研究が本質的に抱える課題ともいえる（野口 2005）。

5. 編年研究の課題と方向性

これまで見てきたように、石神井川流域の諸遺跡においては、Ⅱb期相当の石器群がⅢ層からⅣ層にかけての同一層準から出土しており、各遺跡の層位的先後関係や遺跡間での比較は難しい状況にあるといえる。野川流域の事例をもとにした編年と同様の変遷をたどることが保障されない以上、検討を要するものと思われる。

ではどのようにして、時間的な問題を取り扱っていくのかということであるが、一つの方向性としては、一遺跡（あるいは一文化層）の石器群を編年の単位として用いないということある。これは、石器集中部の空間的な広がりをもとに捉えるのかという問題と表裏の関係にある。遺跡に残された石器群というのはあくまで、石器製作の部分であるので、一連の石器製作過程そのものを、有機的な単位として抽出していくということがあるかと思う（安蒜・戸沢 1975）。したがってまずは、遺跡・石器集中部がどのようなコンテキストの中で残されているのか、明らかにされなければならない。ある特定範囲に分布するそれらを対象にした時間的な変化、そしてその空間的な広がりを捉えていくということになるかと思われる。いわば遺跡群を対象とするような編年研究をおこなっていく必要がある。

おわりに

後期旧石器時代の編年研究における時間区分の基準というのは、主に層位的な出土事例とそこに含まれている指標的な石器の序列化によって形作られてきた。こうした方向性は岩宿遺跡以来一貫したものといえる。今回取上げた武蔵野編年、特に後半期の遺跡・石器群においては、遺跡間の差異が顕著な場合が多く、文化層の区分や石器集中部の同時性、あるいは単位性を十分に検討することが難しい

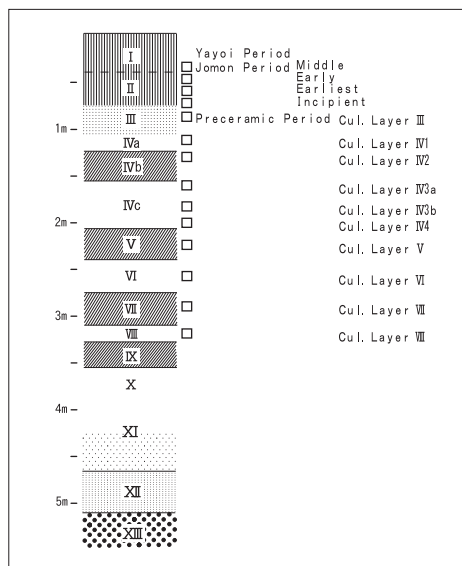
され石器群の序列化がなされたとしても、それは考古学的に検証可能な仮説とはいえない。編年をする対象が一体何であるのか、問いかける必要があります。それは武蔵野編年や相模野編年で志向されてきた層位編年を検証するための枠組みでなければならない。

※紙幅の制約上、本文で触れた以外の遺跡報告書については割愛させていただいた。ご容赦願いたい。

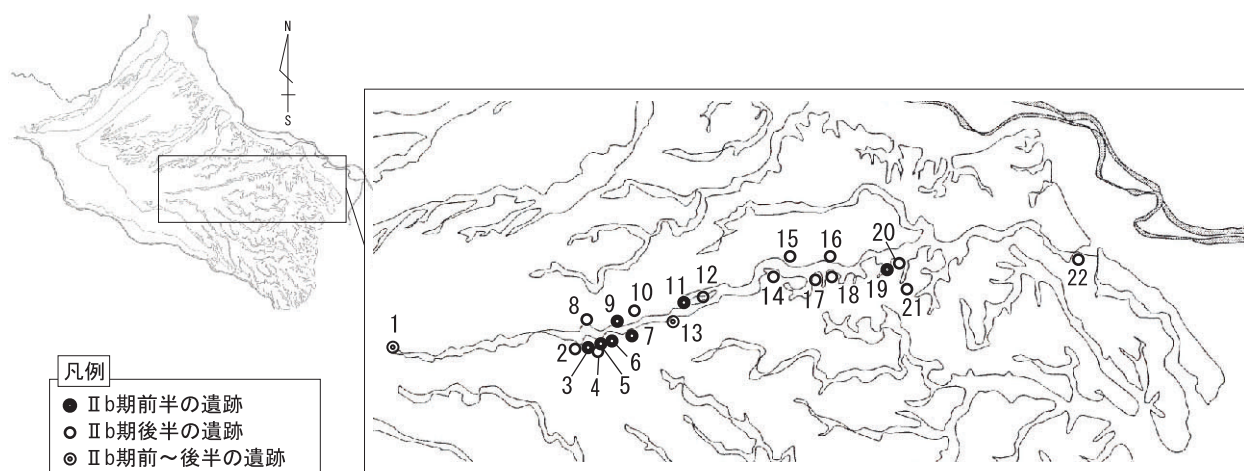
参考文献

- 荒井幹夫 1980 「第Ⅰ章 2. 各地域における研究の現状と成果 武蔵野台地東部」『神奈川考古』8: 31-33、神奈川考古同人会
- 安蒜政雄・戸沢充則 1975 「砂川遺跡」『日本の旧石器』2、雄山閣
- 飯田茂雄 2007 「後期旧石器時代後半期における立川ローム層と石器群」『土と遺跡 時間と空間』予稿集: 20-23、多摩川流域の考古学的遺跡の成立と古環境復元研究会
- 五十嵐 彰 1999 「旧石器資料報告の原料(Ⅰ)一坂下遺跡の分析を通じて一」『東京考古』17: 19-32、東京考古談話会
- 稲田孝司 1984 「旧石器時代武蔵野台地における石器石材の選択と入手過程」『考古学研究』第30巻4号: 、考古学研究会
- 小田静夫 1977 「第Ⅲ章 第二節 5. 編年」『新橋遺跡』104-107、I.C.U.(Occasional Papers4)
- 小田静夫・C.T. キーリー 1973 『武蔵野公園遺跡Ⅰ』野川遺跡調査会、1-57
- 小田静夫・伊藤富治夫・C.T. キーリー 1976 『前原遺跡』I.C.U. (Occasional Papers3)、1-228
- 小田静夫 1980 「武蔵野台地に於ける先土器文化」『神奈川考古』第8号: 11-27、神奈川考古同人会
- 国武貞克 2001 「武蔵野台地石神井川流域における砂川期の様相」『石器文化研究』第8号: 253-270、石器文化研究会
- 栗島義明 1987 「先土器時代における移動と遺跡形成に関する一考察」『古代文化』第39号4巻: 21-32、財団法人古代学協会
- 小林達夫・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男 1971 「野川先土器時代遺跡の研究」『第四紀研究』第10巻4号: 231-252、日本第四紀学会
- 坂入民子・伊藤富治夫・織笠 昭 1977 「高井戸東(駐車場西)遺跡」高井戸東(駐車場西)遺跡調査会、
- 相模野考古学研究会 1971 『先土器時代遺跡分布調査報告書 相模野篇』
- 鈴木遺跡調査団 1980 『鈴木遺跡Ⅰ』鈴木遺跡刊行会、
- 鈴木遺跡調査団 1980 『鈴木遺跡Ⅱ』鈴木遺跡刊行会、
- 鈴木次郎・矢島國雄 1979 「相模野台地におけるナイフ形石器終末期の様相」『神奈川考古』第7号: 、神奈川考古同人会
- 鈴木次郎・矢島國雄 1988 「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ(1)[新版]』154-182、有斐閣
- 諏訪間 順 1998 「相模野台地における石器群の変遷について」『神奈川考古』第24号:

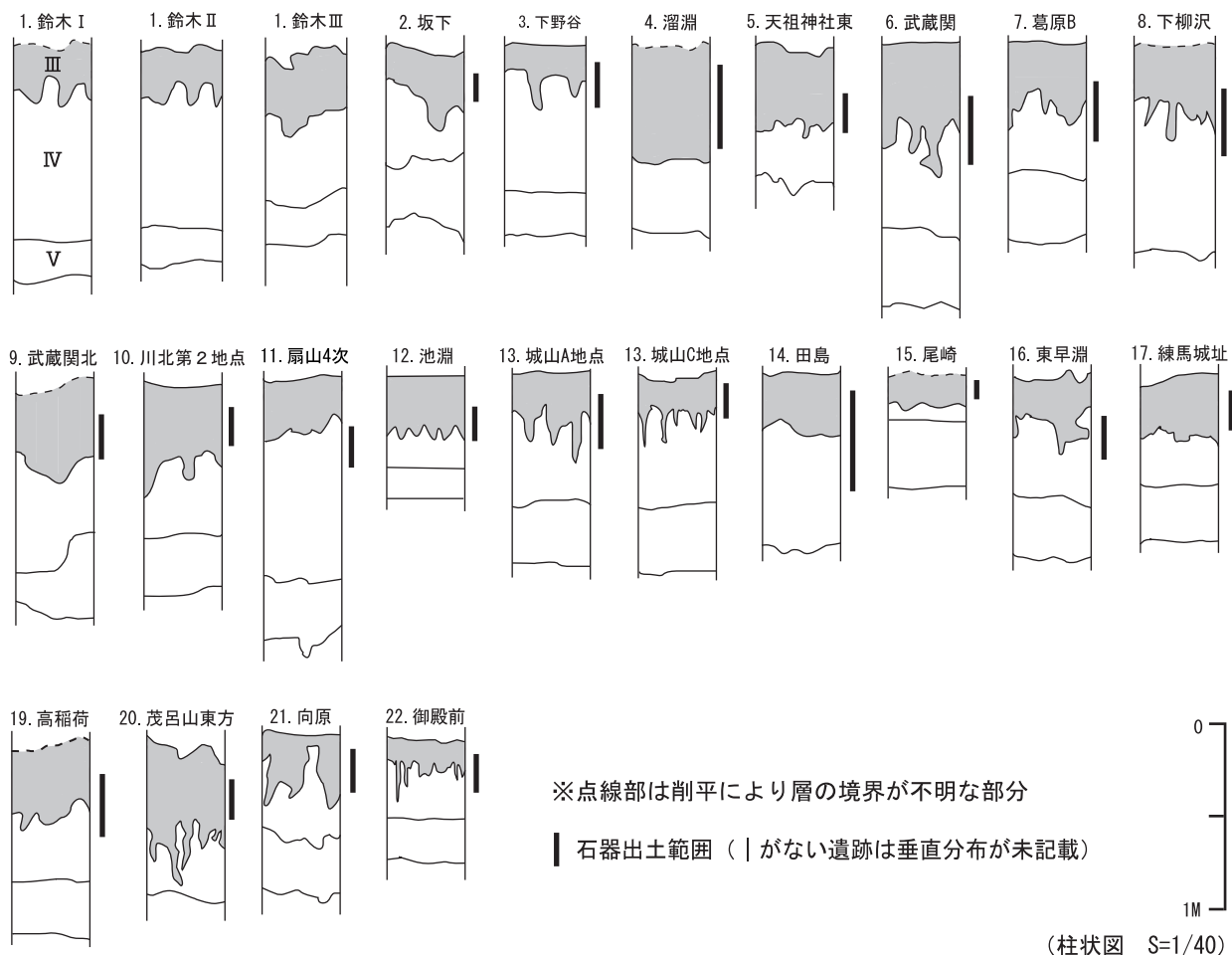
- 版)』154-182、有斐閣
- 諏訪間 順 1998 「相模野台地における石器群の変遷について」『神奈川考古』第24号：1-30、神奈川考古同人会
- 高倉 純 1999 「遺跡間変異と移動・居住移動形態復元の諸問題」『日本考古学』7：75-94、日本考古学協会
- 田中英司 1978 「山室遺跡第2地点」『富士見市中央遺跡群Ⅰ』：1-8、富士見市教育委員会
- 中津由紀子・千浦美智子・小田静夫・J.E.キダー 1977 『新橋遺跡』I.C.U (Occasional Papers4)、1-214
- 野口 淳 1997 「武蔵野台地北部における旧石器時代遺跡群」『砂川旧石器時代遺跡』59-65、所沢市教育委員会
- 野口 淳 2005 「旧石器時代遺跡研究の枠組み—いわゆる「遺跡構造論」の解体と再構築—」『旧石器研究』第1号：17-37、日本旧石器学会
- 野口 淳 2006 「ローム層と文化層、時期区分—旧石器時代研究の時間尺度についての覚え書き—」『明治大学校地内遺跡調査団 年報』3：69-76、明治大学
- 廣田吉三郎・前田 顕・河野重義 1987 『葛原遺跡B地点』練馬区遺跡調査会、1-233



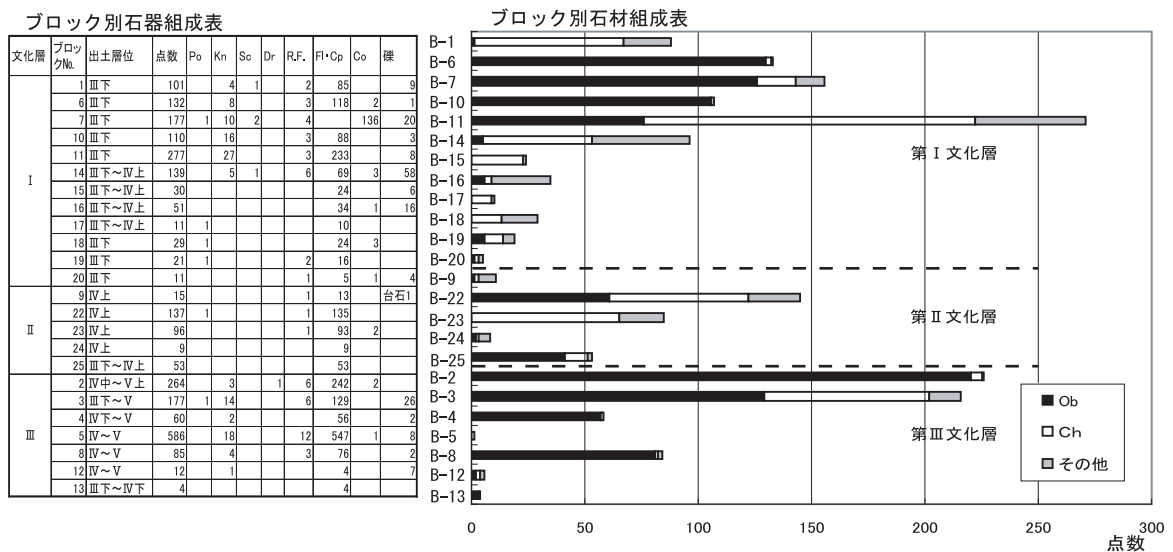
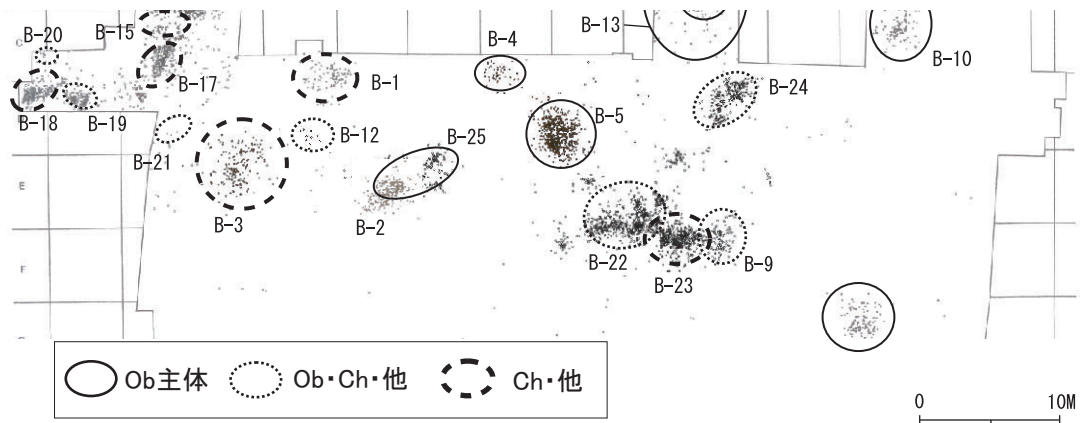
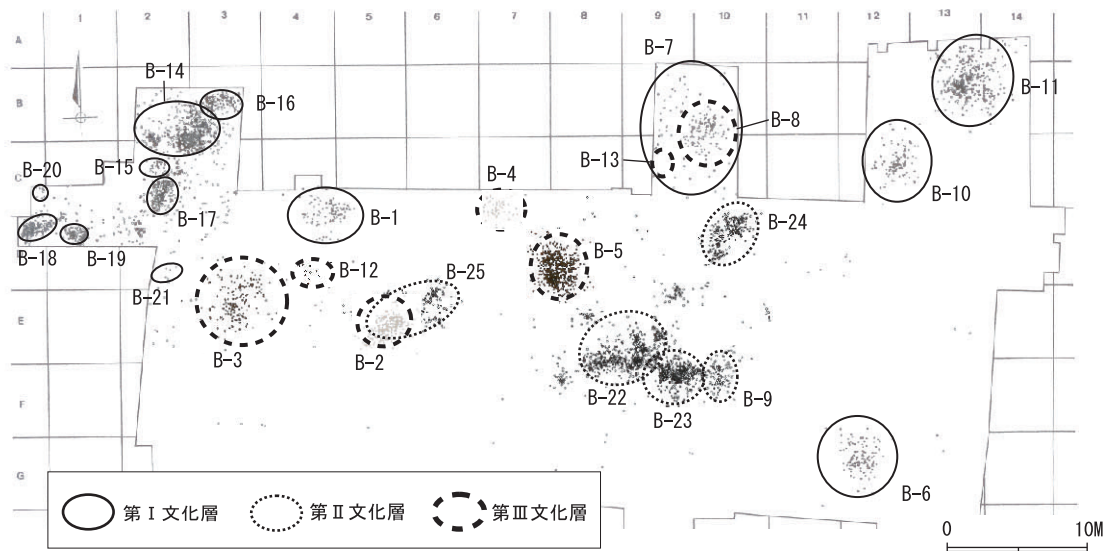
第1図 野川遺跡の層序と文化層
(小林ほか1971)



1. 鈴木 2. 坂下 3. 下野谷 4. 溜淵 5. 天祖神社東 6. 武蔵関 7. 葛原B 8. 下柳沢
 9. 武蔵関北 10. 川北第2地点 11. 扇山4次 12. 池淵4次 13. 城山 14. 田島 15. 尾崎
 16. 東早淵 17. 練馬城址 18. 栗山第2地点 19. 高稲荷 20. 茂呂山東方 21. 向原
 22. 御殿前



第2図 石神井川流域における立川ローム層IV層の堆積状況と武蔵野IIb期の遺跡



第3図 葛原遺跡B地点の石器群と文化層（廣田1987をもとに作成）

学会ポスターセッション発表資料

2004 年 12 月 第 2 回 日本旧石器学会 東京都立大学

「武蔵野台地後期旧石器時代遺跡の横断層序による研究（1）

—自然堆積、石器文化層を中心とする視点からの中間報告—」

「武蔵野台地後期旧石器時代遺跡の横断層序による研究（2）

—年代測定を中心とする視点からの中間報告—」

2006 年 6 月 第 4 回 日本旧石器学会 埼玉歴史と民俗の博物館

武蔵野台地後期旧石器時代遺跡の横断層序による研究Ⅱ

2006 年 8 月 日本第四紀学会 2006 年創立 50 周年記念大会 首都大学東京

武蔵野台地における後期旧石器時代遺跡立地—Geo-Archaeology の視点—

武蔵野台地後期旧石器時代遺跡の横断層序による研究 (1)

ー自然堆積、石器文化層を中心とする視点からの中間報告ー

比田井民子・伊藤 健・西井幸雄・野口 淳・平井義敏

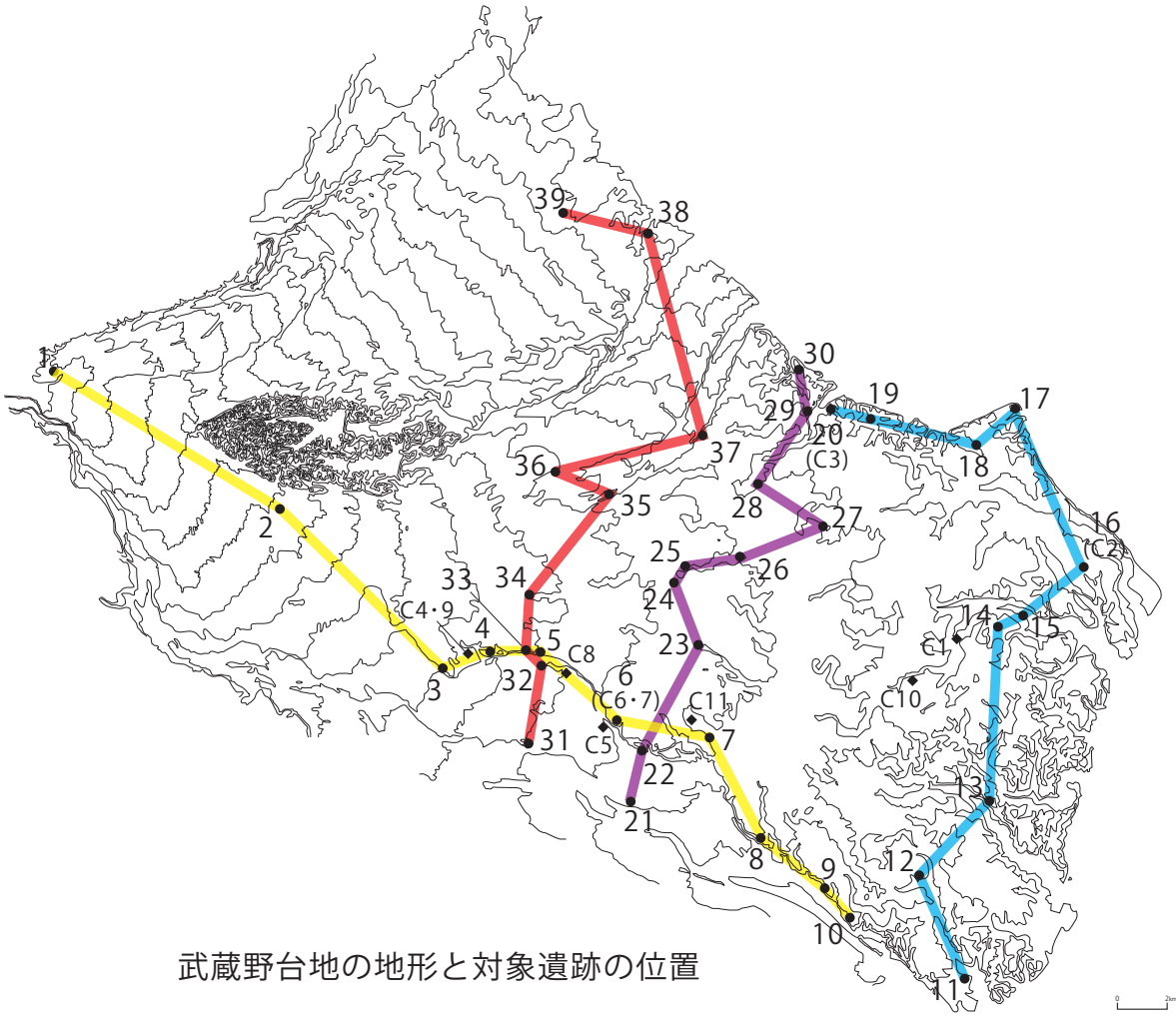
キーワード 武蔵野台地 後期旧石器時代 遺跡 立川ローム層 層序 層厚 テフラ 土壌化 年代測定

本研究では自然環境と遺跡立地の関係から武蔵野台地全体の後期旧石器時遺跡を対象として見直すことを行っている。

今回は実験的に武蔵野台地を横断するラインを設定し、そのライン上にある後期旧石器時代遺跡を抽出し、石器文化層を記載した立川ローム層層序の集成を行ってみた。このことから武蔵野台地のローム層の堆積が地域により異なり、文化層のありかたもかなり異なっていることが明らかになった。こうした差異が一つの台地のなかで地域的に生じていることについて、地質環境による層堆積の地域的傾向が遺跡形成にどのような影響を与えているのか、花粉、植生などの自然科学的データを含めて遺跡形成にどのように作用していたか、報告書のなかで孤立化していた自然科学的データを有効的に遺跡形成の要因の解明に反映できるような研究方法論を提唱していきたい。野川流域では突出した文化層の区分があるがこれらの有効性を再検証していくことも今後の課題である。

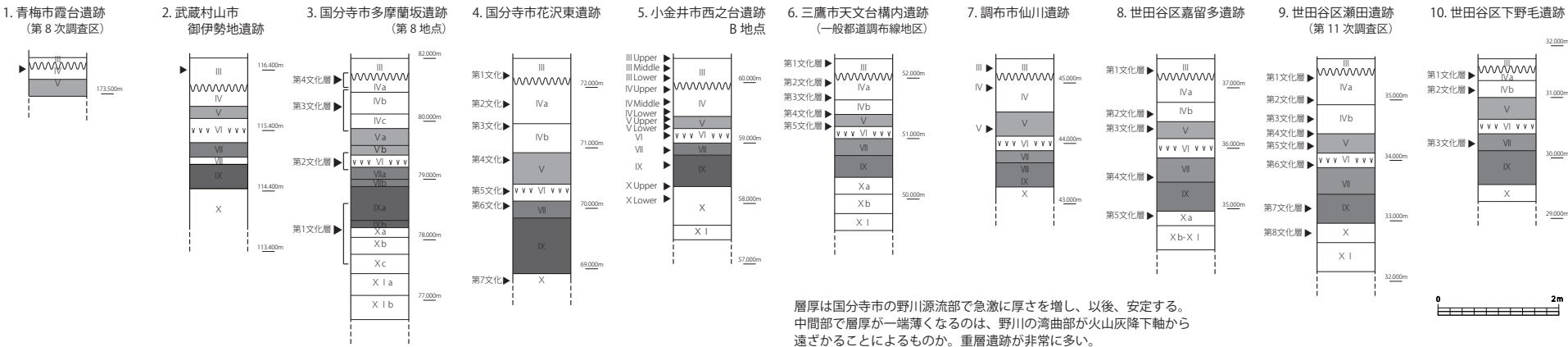
また、遺跡の年代測定の資料集成を行ってみたが、 β 線、AMS測定などの測定方法による違い、石器文化層と測定値のギャップの問題などがある。

武蔵野台地の西南部に位置する野川流域遺跡群は武蔵野台地の一部の地域の局地的な様相を表しているにすぎない。この研究をおこなうことにより野川流域だけではない武蔵野台地の全容を明らかにしていきたい。

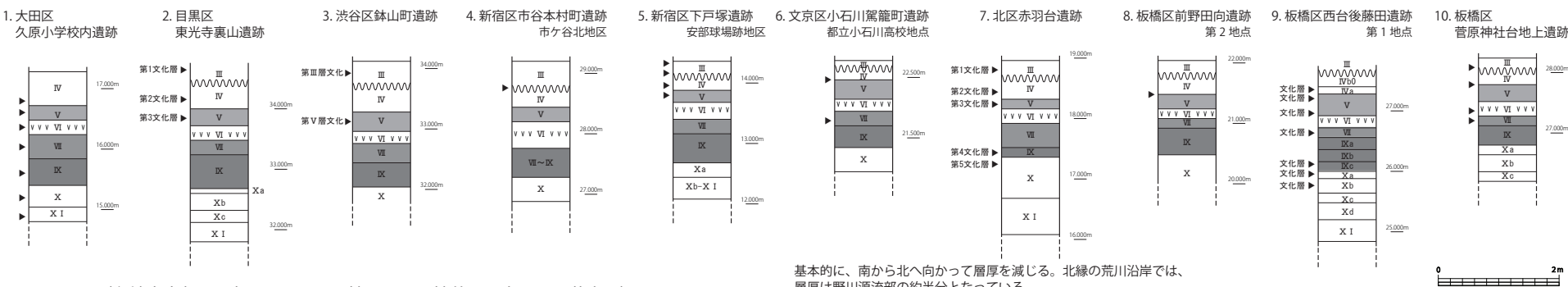


武蔵野台地の地形と対象遺跡の位置

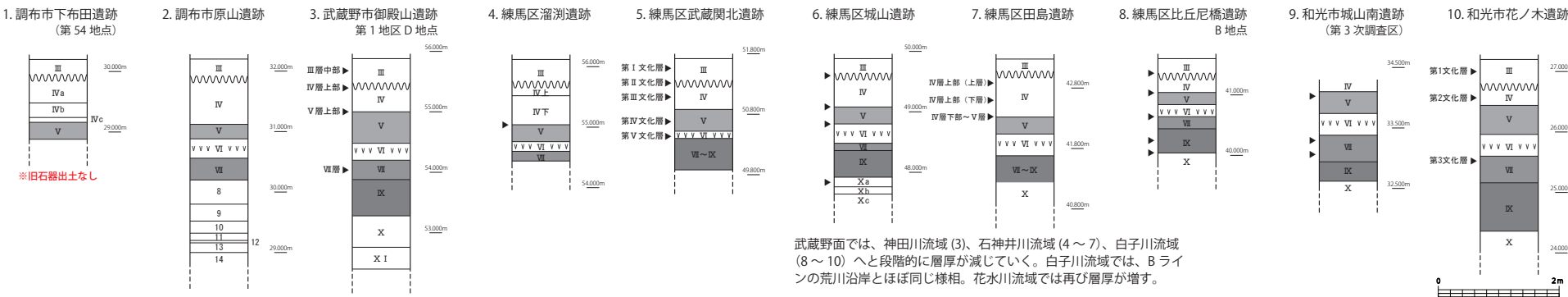
Aライン（武蔵野扇頂部～扇端部：国分寺崖線沿い）



Bライン（台地東部：南～北）



Cライン（台地中央部1：立川面～野川～神田川～石神井川～白子川・花水川）

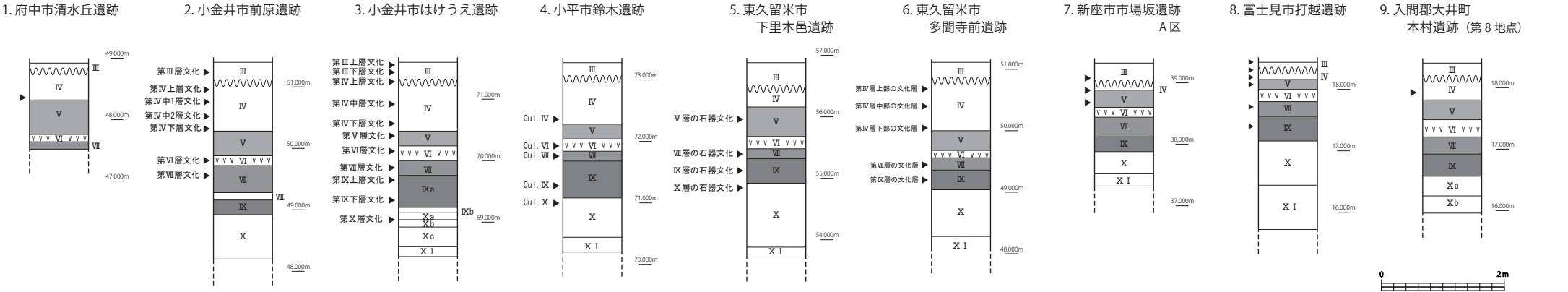


武蔵野台地後期旧石器時代遺跡の横断層序による研究 (2)

一年代測定を中心とする視点からの中間報告一

比田井民子・伊藤 健・西井幸雄・野口 淳・平井義敏

Dライン (台地中央部2：立川面～野川～石神井川～黒目川～台地北部)



立川面と武蔵野面の層厚はほぼ等しい。野川～石神井川～黒目川上流部まで(3～6)は、層厚がゆるやかに減じるが、黒目川中流域(7)から台地北部へむかって、急激に層厚が薄くなる。

武蔵野台地における放射性炭素年代測定値一覧

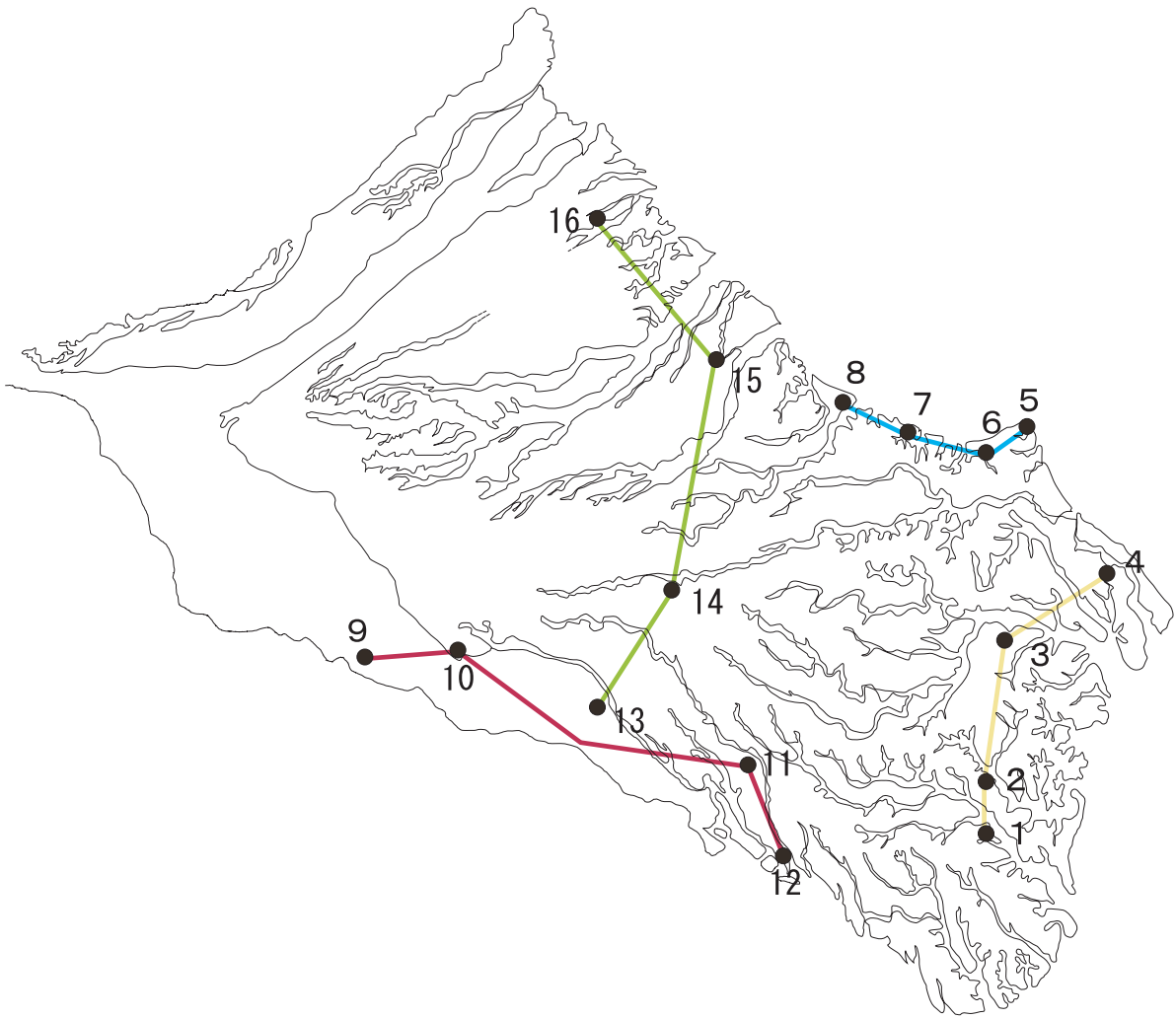
No.	行政区画	遺跡名・地点・調査区	測定記号	測定方法	測定機関	測定年代	半減期	補正年代	層位	文化層	対象試料	コンテクスト	前処理	調整等	分析実施機関・報告者				
C1	新宿区	北新宿二丁目遺跡ライオンズマンション新宿柏木地区	Bete-132645	AMS	Standard-AMS	19,400±80(1σ)	5,568	19,360±80(1σ)	Ⅲ下～Ⅳ上層		炭化物	遺構(1号様群)	AAA		地球科学研究所				
C2	文京区	小石川駕籠町遺跡 都立小石川高校地点	PAL-298	B線	バリノ・サーヴェイ様	>26,140	5,570		ⅠX上		炭化材				バリノ・サーヴェイ様				
				B線	バリノ・サーヴェイ様	>28,870	5,570		ⅠX中		炭化材								
			B線	バリノ・サーヴェイ様	7,970+300-290	5,570		Ⅳ層上部		土壌	土層断面試料								
			B線	バリノ・サーヴェイ様	12,240+490-460	5,570		Ⅳ層下部		土壌	土層断面試料								
			B線	バリノ・サーヴェイ様	15,160+440-420	5,570		Ⅴ層上部		土壌	土層断面試料								
			B線	バリノ・サーヴェイ様	14,480+540-510	5,570		Ⅴ層下部		土壌	土層断面試料								
			B線	バリノ・サーヴェイ様	14,760+700-650	5,570		Ⅵ層上部		土壌	土層断面試料								
			B線	バリノ・サーヴェイ様	16,400+560-520	5,570		Ⅵ層下部		土壌	土層断面試料								
			B線	バリノ・サーヴェイ様	17,680+600-560	5,570		Ⅶ層上部		土壌	土層断面試料								
			B線	バリノ・サーヴェイ様	18,240+560-520	5,570		Ⅶ層下部		土壌	土層断面試料								
			B線	バリノ・サーヴェイ様	19,840+630-580	5,570		ⅠX層上部		土壌	土層断面試料								
			B線	バリノ・サーヴェイ様	20,280+940-850	5,570		ⅠX層下部		土壌	土層断面試料								
			B線	バリノ・サーヴェイ様	19,410+780-710	5,570		ⅠX層上部		土壌	土層断面試料								
			B線	バリノ・サーヴェイ様	20,310+1400-1190	5,570		ⅠX層下部		土壌	土層断面試料								
			C3	板橋区	菅原神社台地上遺跡	NUTA-3832	AMS	名古屋大学	12,900±110(1σ)	5,568		Ⅲ層か		炭化物		32号土坑内出土			中村俊夫
NUTA-3834	AMS	名古屋大学				12830±110(1σ)	5,568		Ⅲ層か		炭化物	32号土坑内出土							
NUTA-3835	AMS	名古屋大学				13120±120(1σ)	5,568		Ⅲ層か		炭化物	32号土坑内出土							
NUTA-3841	AMS	名古屋大学				13150±110(1σ)	5,568		Ⅲ層か		炭化物	32号土坑内出土							
NUTA-3838	AMS	名古屋大学				12990±100(1σ)	5,568		Ⅲ層か		炭化物	32号土坑内出土							
C4	国分寺市	武蔵国分寺跡遺跡北方地区	Bete-5284-104073	AMS	Groningen	13,670±110(1σ)	5,568	13,670±110(1σ)	Ⅲ層下部*	第1遺物群	炭化物	伴(1-T5)	AAA		BETA ANALYTIC／地球科学研究所				
			Bete-5283-104072	AMS		16,110±110(1σ)	5,568	16,120±110(1σ)	Ⅲ層下部*		炭化物	単独	AAA						
			Bete-5280-104069	AMS		16,280±110(1σ)	5,568	16,240±110(1σ)	Ⅲ層下部*		炭化物	単独	AAA						
			Bete-5281-104070	AMS		9,520±90(1σ)	5,568	9,540±90(1σ)	Ⅳa層下部*	第3遺物群	炭化物	伴(3-T30)	AAA						
			Bete-5282-104071	AMS		16,330±120(1σ)	5,568	16,320±120(1σ)	Ⅳa層上部*	第2遺物群	炭化物	伴(2-T22)	AAA						
			Bete-5279-104068	AMS		23,980±180(1σ)	5,568	23,970±180(1σ)	Ⅴ層上部*		炭化物	単独	AAA						
			Bete-5277-104066	AMS	26,810±220(1σ)	5,568	26,830±220(1σ)	Ⅵ層上部*		炭化物	単独	AAA							
			Bete-129738	AMS	AMS-Standard	24,870±130(1σ)	5,568	24,870±130(1σ)	Ⅶ層上部	第7群	炭化物	包含層	AAA						
			Bete-5278-104067	AMS	Groningen	25,850±210(1σ)	5,568	25,840±210(1σ)	Ⅶ層上部*		炭化物	単独	AAA						
			Bete-5276-104065	AMS		22,010±160(1σ)	5,568	22,040±160(1σ)	ⅠX層上部*		炭化物	単独	AAA						
			Bete-129740	AMS		28,060±190(1σ)	5,568	28,040±190(1σ)	ⅠX層上部	第9群	炭化物	包含層	AAA						
			Bete-129739	AMS	AMS-Standard	27,950±160(1σ)	5,568	27,910±160(1σ)	ⅠX層上部	第9群	炭化物	包含層	AAA						
			Bete-5275-104064	AMS	LLNL	21,070±80(1σ)	5,568	21,050±80(1σ)	XⅦ(?)		炭化物	単独	AAA						
			C5	三鷹市	下原B遺跡	PAL-936	β線	バリノ・サーヴェイ様	14,050+250/-240(1σ)	5,570		(Ⅲ層)	Ⅲ層	木材		遺構(SFX-3)			バリノ・サーヴェイ
						PAL-937	β線		13,590+160/-150(1σ)	5,570		(Ⅲ層)	Ⅲ層	木材		遺構(SFX-3)			
PAL-938	β線	13,880+170/+160(1σ)				5,570			(Ⅲ層)	Ⅲ層	木材	遺構(SFX-3)							
TK-465	(β線)	21,300±500(未記載)				不明			Ⅳb層	Ⅳ下層?	炭化物	包含層							
C6	三鷹市	東京天文台構内遺跡 (新子午線)	TK-466	(β線)	東京大学	測定不能	不明		Ⅵ層	Ⅵ層	炭化物	包含層			東京大学放射性炭素年代測定装置委員会				
			TK-467	(β線)		測定不能	不明		Ⅵ層	Ⅵ層	炭化物	包含層							
			TK-468	(β線)		23,500±300(未記載)	不明		Ⅵ層	Ⅵ層	炭化物	包含層							
			TK-469	(β線)		23,900±300(未記載)	不明		Ⅵ層	Ⅵ層	炭化物	包含層							
			TK-470	(β線)		測定不能	不明		Ⅶ層	Ⅶ層	炭化物	包含層							
			TK-471	(β線)		28,300±600(未記載)	不明		ⅠX層	ⅠX層	炭化物	包含層							
			TK-472	(β線)		測定不能	不明		ⅠX層	ⅠX層	炭化物	包含層							
			C7	三鷹市		東京天文台構内遺跡 (一般都境誤布線)	IAAA-30881	AMS	株式会社研究所	24,600±110(1σ)	5,568	24,630±110(1σ)	Ⅴ層下部	第5文化層		炭化材	包含層		
C8	小金井市	野川中洲北遺跡	Gak-12913	(β線)	学習院大学放射性炭素年代測定室	12,330±360(未記載)	不明		第Ⅲ植物化石層	(Ⅲ層上?)	材	(低地泥炭層)			バリノサーヴェイ				
			Gak-12911	(β線)		12,860±230	不明		第Ⅲ植物化石層	(Ⅲ層上?)	材	(低地泥炭層)							
			Gak-12912	(β線)		13,200±220	不明		第Ⅲ植物化石層	(Ⅲ層上?)	種実	(低地泥炭層)							
			Gak-12922	(β線)		13,610±170	不明		第Ⅱb植物化石層	(Ⅳ層中～上?)	土壌	(低地泥炭層)							
			Gak-12921	(β線)		13,520±250	不明		第Ⅱb植物化石層	(Ⅳ層中～上?)	材	(低地泥炭層)							
			Gak-12926	(β線)		13,610±170	不明		第Ⅱb植物化石層	(Ⅳ層中～上?)	材	(低地泥炭層)							
			Gak-12924	(β線)		13,700±250	不明		第Ⅱb植物化石層	(Ⅳ層中～上?)	土壌	(低地泥炭層)							
			Gak-12923	(β線)		14,380±260	不明		第Ⅱb植物化石層	(Ⅳ層中～上?)	材	(低地泥炭層)							
			Gak-12925	(β線)		15,540±230	不明		第Ⅱb植物化石層	(Ⅳ層中～上?)	材	(低地泥炭層)							
			Gak-12920	(β線)		15,630±470	不明		第Ⅱb植物化石層	(Ⅳ層中～上?)	材	(低地泥炭層)							
			Gak-12927	(β線)		18,300±540	不明		第Ⅱa植物化石層	(Ⅳ層中～上?)	材	(低地泥炭層)							
			Gak-12915	(β線)		19,000±1,330	不明		第Ⅱa植物化石層	(Ⅳ層中～上?)	土壌	(低地泥炭層)							
			Gak-12919	(β線)		19,050±470	不明		第Ⅱa植物化石層	(Ⅳ層中～上?)	材	(低地泥炭層)							
			Gak-12914	(β線)		21,370±610	不明		第Ⅱa植物化石層	(Ⅳ層中～上?)	材	(低地泥炭層)							
			Gak-12918	(β線)		>32,500	不明		第Ⅰ植物化石層	(ⅠX層以下?)	材	(低地泥炭層)							
Gak-12916	(β線)	33,410±2,180	不明		第Ⅰ植物化石層	(ⅠX層以下?)	材	(低地泥炭層)											
Gak-12917	(β線)	>35,470	不明		第Ⅰ植物化石層	(ⅠX層以下?)	土壌	(低地泥炭層)											
C9	国分寺市	日影山遺跡	Beta-119975	AMS		16,680±120(1σ)	5,568	16,660±120(1σ)	Ⅳa層中～下	(第2文化層)	材	包含層			BETA ANALYTIC／地球科学研究所				
C10	中野区	富士見台遺跡 (参考値)	Gak-18298	(β線)	学習院大学放射性炭素年代測定室	7,040±620			Ⅲ層	第4文化層	材	包含層			バリノサーヴェイ				
			Gak-18299	(β線)		>23,340			Ⅶ層	第2文化層	材(2点)	遺構(2号様群)							
			Gak-18296	(β線)		23,330±1010			Ⅶ層	第2文化層	材(3点)	遺構(4号様群)							
			Gak-18293	(β線)		>18,030			Ⅶ層	第2文化層	材(4点)	遺構(4号様群)							
			Gak-18294	(β線)		10,650±940			Ⅶ層	第2文化層	材(3点)	遺構(5号様群)							
			Gak-18295	(β線)		21,120±2150			Ⅶ層	第2文化層	材(6点)	遺構(5号様群)							
			Gak-18297	(β線)		>23,970			Ⅶ層	第2文化層	材(4点)	遺構(8号ユニット)							
C11	三鷹市	鳥屋敷遺跡 (参考値)	beta-99598～99600	AMS		26,540			Ⅶ層下部～ⅠX層上部	第Ⅲ遺物群	炭化物								
			AMS		27,380														
			AMS		28,050														
beta-110036	AMS		29,310±650			ⅠX層下部～ⅠX層上部	第Ⅳ遺物群	炭化物											

測定記号：報告書のとおり(不明、未記載の場合は「不明」) 測定方法：AMSまたはβ線 測定機関：報告書のとおり(未記載の場合は「不明」)
測定年代：報告書のとおり(カッコ内は誤差確立範囲の単位、1σ、2σ、未記載、など) 半減期：報告書のとおり(採用半減期が不明、未記載の場合は「不明」)
補正年代：炭素安定同位体比(13C/12Cまたはδ13C)による同位体分別効果にもとづく測定年代の補正值(補正なし、またはδ13C未記載・不明などの場合は「不明」)(カッコ内は測定年代と同じ)
較正年代：暦年較正年代値が報告されている場合(未記載の場合は空白) 較正方法：依拠した較正曲線データ(Stuiver et al.1993など)、較正プログラム、較正方法(交点法、確率分布、など)(未記載・不明の場合は「不明」)
対象試料：炭化物(1cm未満程度の炭化物小片) 木材(枝、葉等、部位が特定できる場合は明記) 土壌(腐食酸等) 骨・歯
コンテキスト：遺構(炉址・土坑などの人為構築物中の試料、不明確なものも含む) 伴(石器集中部、燐群の範囲内、または隣接)
包含層(同一層中に石器、礫等が出土している＝文化層設定されている範囲内) 単独(分析試料のみ、石器、礫などとの共伴、層位関係不明確) 不明(不明、採取位置等未記載)
前処理：AAA(酸・アルカリ・酸洗浄) AW(酸洗浄) AE(酸エッチング) N(未記載) U(不明・未記載)
調整等：低濃度(低濃度有機処理) コラ(コラーゲン抽出→骨・歯) セル(セルロース抽出→木材) 延長(ベータ線計数法における測定時間延長)
分析実施機関・報告者：報告書のとおり
比較年代測定値：同一層位でのTL、OL年代測定法など他の方法による年代測定値が報告されている場合
地質・層序対比：試料採取層準の地質・土壌・火山灰等による対照が可能な場合(分析の種類、マーカーを記載 例：YNo. Y-117相当、例：火山ガラス：ATピークと同一層、など)

武蔵野台地後期旧石器時代遺跡の横断層序による研究Ⅱ

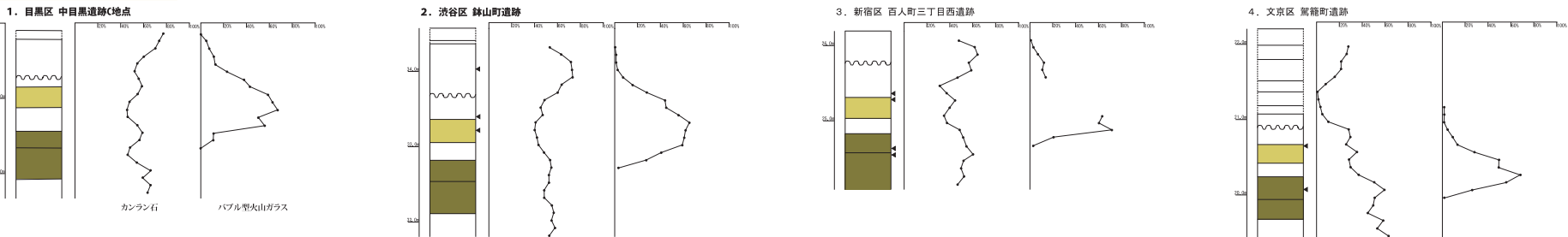
—火山性降下物と石器文化層—

比田井民子、伊藤健、西井幸雄、野口淳
山岡拓也、藤田健一、飯田茂雄、林和広

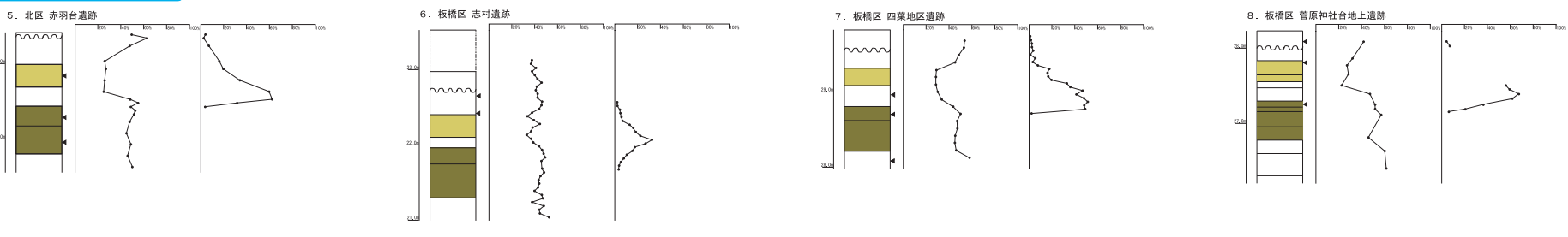


武蔵野台地の地形と分析遺跡位置図

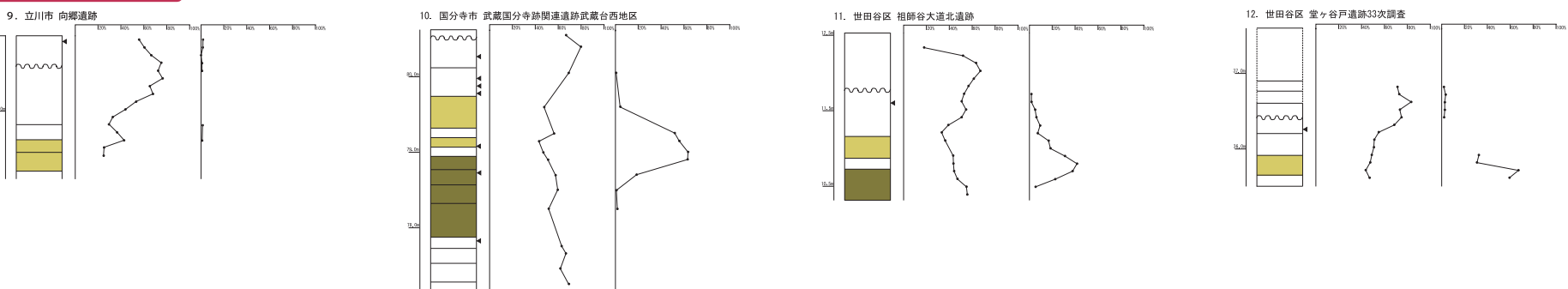
Aライン（東京湾側）



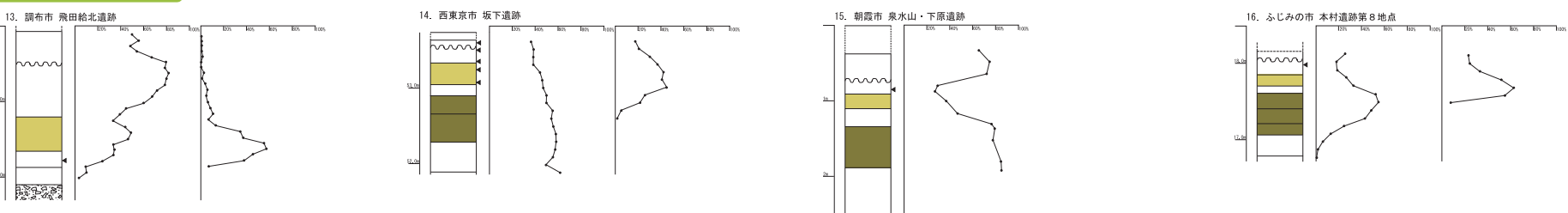
Bライン（荒川側）



Cライン（多摩川側）



Dライン（中央部横断）



前回の研究では武蔵野台地の後期旧石器時代遺跡における石器文化層と自然層の関係を上げた。このたびの研究では自然科学分析が行われている後期旧石器時代遺跡の集中する地域を中心に新たに横断ラインを設定し、火山性降下物と石器文化層の位置関係を明らかにした。ラインは武蔵野台地の東京湾側、荒川側、多摩川側、中央部横断について4本の横断ラインを設定した。従来、武蔵野台地の後期旧石器時代遺跡では多くの自然科学分析が行われているが、調査成果との整合性が検討されることは少なく、遺跡間どうしの比較検討が行われたことも少ない。ここでは調査報告書における重鉱物・軽鉱物分析の成果に基づき、火山性降下物のなかでもかねてより顕著な増減を示すと指摘されているカンラン石、火山ガラスの立川ローム層中における含有量の推移を再整理し、石器文化層との関係を明示し、大枠ではあるが遺跡間の比較を可能にしてみた。

いくつかの成果の一部をあげると代表的な火山ガラスであるバブル型火山ガラス（AT）の層順が一定のピークをなすものばかりではなく、暗色帯中に含まれるものや、第Ⅵ層全体に散るものなど遺跡や地域によるばらつきが目立つことである。またカンラン石と火山ガラスの相関関係が当時の自然環境の変遷にも関わる問題を含んでおり、石器文化層との関係が注目される。

また、立川ローム層の層厚については最寒冷期から最終氷期にかけてのローム層の堆積の推移があり、遺跡形成への影響が予想される。

武蔵野台地における後期旧石器時代遺跡立地－Geo-Archaeology の視点－

伊藤 健（東海大・非、都埋文）・比田井民子（都埋文）・西井幸雄（埼玉県埋文）・野口 淳（明治大学校地内遺跡調査団）・山岡拓也（都立大・院）・
藤田健一（明治大学校地内遺跡調査団）・林 和広（東京大・院）・飯田茂雄（明治大・院）

キーワード
武蔵野台地 後期旧石器時代 酸素同位体ステージ3／2 遺跡立地と地形 段丘崖 斜面地形

後期旧石器時代の遺跡はどこに立地し、どこに立地しないか。従来から、遺跡は中小河川に沿った「高台」に立地することがわかっていた。しかし近年、今まで遺跡発見が想定されていなかった多摩川側立川面などにおいて多数の遺跡が発見されるに及んで、遺跡立地についてより詳細な検討が必要となった。

遺跡発掘資料から遺跡立地と地形の関係性について検討したところ、次のような特徴がわかった。

① 遺跡は、段丘崖・斜面地形の上位などの地形変換点に沿って立地する。ただし、段丘崖の縁だけでなく、小支谷・埋没谷斜面などあらゆる場合が考えられる。（図1・2・5・7）

② 段丘崖・斜面地形から離れた平坦面に遺跡が立地することは珍しい。（図3）。

③ 斜面地形に斜面を這うように立川ロームが堆積する場合、時期を経るに従って斜面変換点は後方へ移動する。それに従って、遺跡立地も後方に移動する。ただし、斜面崩落や削平などによって土壌が失われていく場合があり、その場合後方移動は見かけ上の現象である。（図4）

④ 河川に沿って複数の面が形成される場合、各面の縁に沿って遺跡が立地する。後期旧石器時代前半期（ステージ3）から後半期（ステージ2）へ時期を経るに従って、下位段丘面へ遺跡立地が進む可能性が考えられる。（図6）



図2 野川上流域における後期旧石器時代遺跡の分布（伊藤1992をもとに作成）
武蔵野面の国分寺崖線、及び立川面の野川脇微高地に沿って遺跡が立地する様相を看取することができる。武蔵野面の遺跡では、崖線そのものに沿う場合よりも小支谷に向かう斜面に向いている場合が多い。

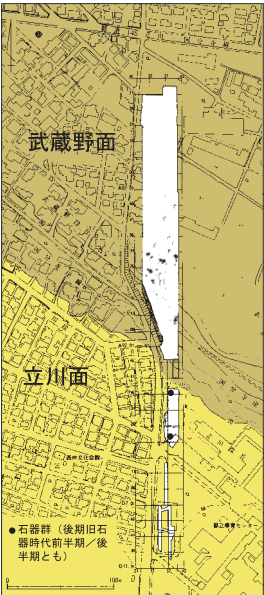


図3 武蔵国分寺跡関連遺跡武蔵台西地区の石器群分布（川島・大西2004をもとに作成）
遺跡は国分寺崖線の南北に立地する。武蔵野面の石器群は、国分寺崖線に沿う20mの範囲にしか分布しない。それ以上離れると分布しなくなる。また、立川面にも2基の石器群が分布する。

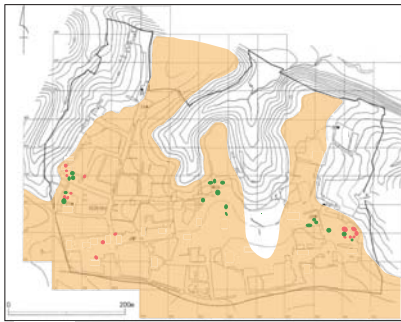


図7 四葉地区遺跡の石器群分布（依田他1996をもとに作成）
●石器群（後期旧石器時代後半期（ステージ2））
●石器群（後期旧石器時代前半期（ステージ3））

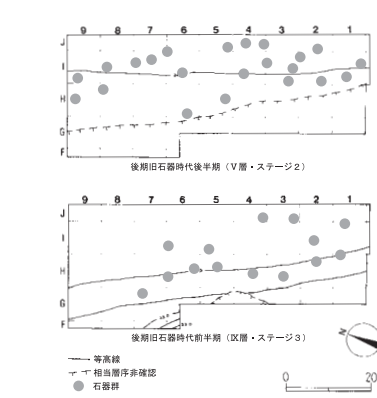
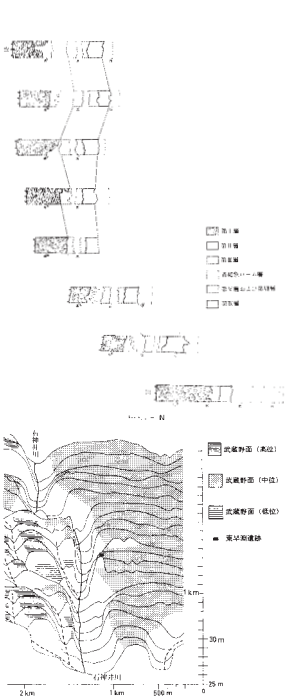


図4 東早瀬遺跡の石器群分布（絹川・田村他1986をもとに作成）
遺跡は石神井川左岸の武蔵野面の斜面地形に沿って立地する。ステージ3からステージ2に向かつて斜面地形は石神井川から後方へ後退するが、石器群の立地も地形にあわせて後退する。従って、時期を進ても、遺跡が斜面地形に沿うことに変化しない。

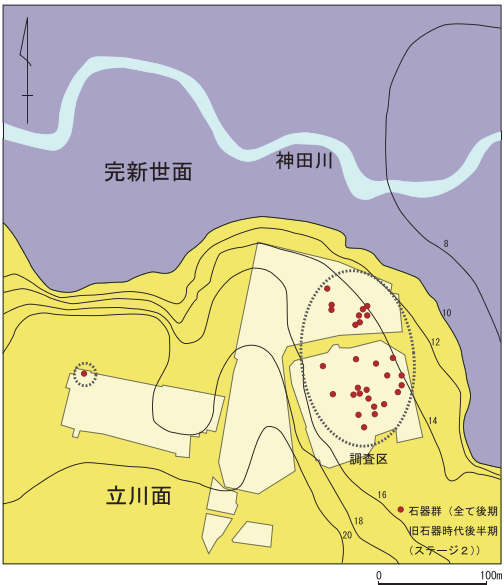


図5 下戸塚遺跡の石器群分布（亀田・久保他1996をもとに作成）
遺跡は神田川右岸の立川面上に立地する。石器群は立川面最下位面上の斜面地形に沿って立地する。上位面に向かう遺跡中央の斜面には立地しない。なお、等高線は、現地表面をもとにしている。

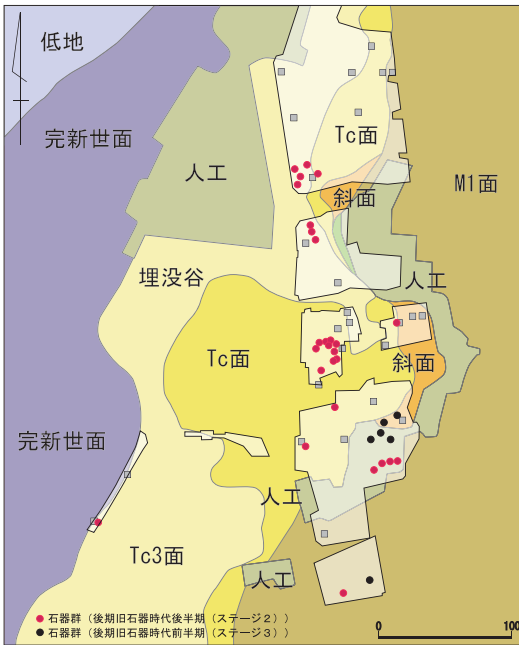


図6 百人町三丁目西遺跡の地形区分と石器群分布（萩野・バリノ他1997をもとに作成）
遺跡はM1面からTc3面にかけて立地するが、M1面からTc1面への斜面、Tc1面中の埋没谷、Tc3面から「完新世」面への斜面に沿って分布する。なお、ステージ3ではM1面にのみ立地していたものが、ステージ2でより下位面にも立地するようになり、時期を経るに従い下位面に進んでいく様相を示している。

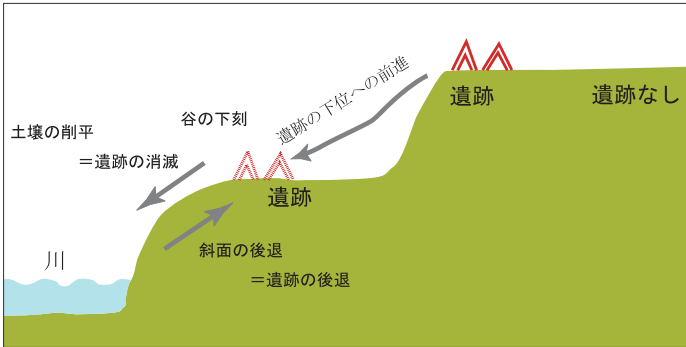


図9 遺跡立地と地形の関係（概念図）

引用・参考文献

比田井民子・伊藤 健・西井幸雄・羽島謙三他 2001『多摩川流域の段丘形成と考古学的遺跡の立地環境』とうきゅう環境浄化財団
伊藤 健 1995『先土器時代社会の人口と領域』『古代文化』47-2 古代学協會
亀田直美・久保純子他 1996『下戸塚遺跡の調査 第1部旧石器時代から縄文時代』早稲田大学校地埋蔵文化財調査室
亀田直美・バリノ・サーヴェイ株式会社他 2001『百人町三丁目西遺跡Ⅴ』財団法人新宿区生涯学習財団
川島雅人・大西雅也 2004『府中市武蔵国分寺跡関連遺跡（武蔵台西地区）』東京都埋蔵文化財センター
絹川一徳・間室幸仁・田村 真他 1986『東早瀬遺跡』練馬区遺跡調査会
萩野早苗・バリノ・サーヴェイ株式会社他 1997『百人町三丁目西遺跡Ⅲ』新宿区百人町遺跡調査会
新宿区西早稲田地区遺跡調査会 1993『下戸塚遺跡－西早稲田地区第一種市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
依田賢二他 1990『四葉地区遺跡 平成8年度【旧石器時代】板橋区四葉遺跡調査会

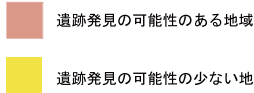


図8 遺跡発見の可能性のある地域と可能性の少ない地域（比田井他2001をもとに作成）
多摩川流域の立川面、埼玉県側不老川－黒目川間では、埋没した河川、埋没谷沿いに遺跡が立地している可能性が高く、近年その発掘事例が増えている。また、石神井川、神田川、目黒川などに沿った低位面に沿っても、遺跡が埋没している可能性が高い。

執筆者紹介

比田井民子	(財)東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター	担当課長
伊藤 健	(財)東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター	主任調査研究員
西井幸雄	(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	主査
野口 淳	明治大学校地内遺跡調査団	調査研究員
上條朝宏	(財)東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター	係長
藤田健一	明治大学校地内遺跡調査団	調査研究員
飯田茂雄	明治大学大学院	
林 和広	東京大学大学院	

「^{た ま がわりゅういき}多摩川流域^{こうこがくてきいせき}の考古学的遺跡^{せいりつ}の成立^{こかんきょうふくげん}と古環境復元」

(研究助成・一般研究 VOL. 29-NO. 173)

著 者 ^{ひ た い}比田井 ^{た み こ}民子

発行日 2008 年 3 月 31 日

発行者 財団法人 とうきゅう環境浄化財団

〒150-0002

東京都渋谷区渋谷 1-16-14 (渋谷地下鉄ビル内)

TEL (03) 3400-9142

FAX (03) 3400-9141